

---

# 破魔月

テイク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

破魔月

### 【Nコード】

N08000

### 【作者名】

テイク

### 【あらすじ】

ユーニヴァスの東方の国日本。数ある名は世界にとどろく。桜咲き乱れる美しき国。將軍により治められし侍の国。鎖国により閉ざされた国。独自の文化と発展した技術を持つ国。

文化と技術を狙い日本に魔の手が迫る。守護するは美しき九つの花。紡ぐは絆。集うは絆星。偉大なる覇星の下で、踊り狂う。人はその果てに本物の絆を知る。

## 零（前書き）

修正、ある少女の武器を大剣を箆手に変更しました。  
微妙ですけど報告です。

ユーニヴァスの東方の国日本。桜咲き乱れる美しき国。將軍により治められし侍の国。鎖国により閉ざされた国。独自の文化と発展した技術を持つ国。

列強諸国は文化と技術を欲し、我が物にせんと300年以上にも及ぶ鎖国を魔法の力を使い打ち破ろうとしていた。

しかし、当時の將軍徳川家咲とくがわいえさきはそれを良しとしなかった。初の女性將軍で後に列強諸国から鬼姫と呼ばれるようにまでになる女傑。学問に秀で才女と名高く、また、武術の腕も將軍の名に恥じぬものだった。

その時に彼女が將軍であったのはまさしく運命。

彼女は持てる力の全てを使い、列強諸国から日本を護りきつた。不利な条約を結ぶことなく開国して見せた。だが、それで列強諸国が満足するわけなどなく、列強諸国ははるかに進んだ魔法の力を使い侵略を開始しようとした。

だが、それでも彼女は、日本は揺らぐことはなかった。

絆鋼と呼ばれる幻の鉱石で作られた武器を持った九人の守護者たち、彼らの手により軍は壊滅させられ再び日本は護られた。それから、何十年の月日が流れ、再び日本は侵略の危機に瀕していた。

江戸湾の空を空飛ぶ帆船が覆う。数にして五十。魔法の力で飛ぶ魔法の船。異国の侵略軍。魔法使いたちの乗る船だ。

「ねえ、アレを落とせばいいの？」

黒髪の少女が、空飛ぶ船を指差しながら聞く。手には一振りの抜

き身の刀。美しき刀身と、それを彩る漆黒の柄の至高の刀。袖のない黒のミニスカート丈の着物と、同じく黒のニーソックス姿で、黒く背中に桜の紋が描かれた羽織を羽織っている。

「ああ、そうだ」

その少女の問いに、銀髪の少年が答える。少年の後ろには、八人の美しき少女たち。

「そっか、じゃあ、行ってくる」

黒衣の少女が跳ぶ。刀を抜く。そして、全てを斬り裂くべく少女はその刃を振るう。一瞬のうちに船が斬り裂かれていく。

それに続いて、八人の少女たちも跳ぶ。

ある少女は、籠手をつけ、船を殴り潰していく。

ある少女は、二つの長い刃がねじれて一本になって形成された、赤い飾り房と柄の末端には龍の頭のある二又槍にて高速の突きを放ち。

ある少女は、紫の燐光を放つ翼のような双剣を振るい船を細切れし。

ある少女は、リングに左右対称の鳥の翼を展開したような弓を引き、千を超える矢を放つ。

ある少女は、四つの刃が中心の輪にくっついたような巨大な手裏剣を投擲する。

ある少女は、柄の部分に茨のような装飾が巻きついている槌を振り下ろし船を叩き潰す。

ある少女は、対となる椿の紋がついた巨大な鉄扇を振るう。

ある少女は、鎖が巻きついた禍々しい形状の鎌を振るい刈る。

九人の少女たちが空を舞う。まさしく天の舞踏。美しき少女たちの天の舞踏。

五十の船は、少女たちによって全て叩き落とされた。  
少女たちが少年の元に帰って来た。

「終わったよ」

「ああ、ご苦労様。さて、みんな帰ろう」  
『はい!!』

少年と九人の少女は去って行った。

・  
・  
・

これは、絆の物語。

鍛冶屋の少年と九人の美しき少女達の絆の物語。

## 巻

江戸、日本の首都。日本の中心都市であるためかなり発展した都市。

町の中心には江戸城があり、江戸城は将軍の居城であり、江戸は幕府の政庁が置かれる行政府の所在地であると同時に、自身も天領を支配する領主である將軍家の城下町でもある。

江戸の町は將軍のおわす江戸城の南西ないし北に広がる武家の町と、東の数々の河川・堀に面した庶民の町に大別される。

その東のはずれにある一軒家に銀髪の少年が住んでいた。その一軒家は鍛冶屋であり、少年も鍛冶師である。一昔前、彼の父親の代は名のある鍛冶屋だったが、今はほとんど客がおらず寂れている。

それは、少年の鍛冶の腕が悪いわけではなく単純に必要なないせいである。

このところ大きな戦もなく天下泰平を將軍が実現しているためである。鎖国して他国との交流もないためそういうものを作る必要がないのである。

「ふあゝあ」

少年　糸杉銀いとすぎぎんは眠そうに、欠伸をしながら井戸の水を汲む。さつきまで寝ていて、今起きたばかりだ。緩慢な動作で、水を汲んでいく。

「暇だな。まあ、俺たちみたいなのが忙しい世の中ってのはダメなんだろっけど」

そう言いながら井戸の水を汲み家の中へ持っていく。

「しかし、暇だな。何か、起きないかな」

その時、家の扉がノックされる。何か起きろとは言ったが、少し急すぎな気がする。

「誰だ？ こんな朝早くに」

銀が扉を開ける。そこには刀を背負った黒髪で小柄な少女がいた。少女は、緊張した面持ちで銀にたずねた。

「あ、あの、糸杉の鍛冶屋はここですか？」

「そうだけど、客？」

銀は、少女の品定めをしながら言う。

「は、はい」

「そっか、じゃあ、中に入って」

「わかりました」

銀は少女を家に招き入れた。

「それで」

銀が何を作るのか聞こうとした時、また、扉がノックされた。

「今日はえらく多いな」

「！」

少女が部屋の奥に行った。玄関から見えない位置に隠れる。



「どうかした？」

「いえ、お構いなく」

少女はどこか怯えたようだった。銀は不思議に思いながらも、とりあえず扉を開けた。

二人の侍が立っていた。雰囲気的に客ではない。

「何でしょうか？」

「朝早くに悪いな。この少女を見なかったか？」

侍の一人が黒髪で刀を背負った小柄な少女が写った写真を見せる。先程の少女である。

「……………ないですね。この女の子がどうかしたんですか？」

銀は知らないフリをした。少女の様子を思い出したからだ。どこか、そのおびえた様子に少し気になったからだ。

「詳しくは言えないが將軍家に弓を引いたらしいのだ」

「それは穏やかじゃないですね」

「ああ、だから、見かけたら報告してくれ。多少だが、報償金がある。それだけだ、ではな」

二人の侍は去って行った。二人が完全に見えなくなってから銀は扉を閉め、鍵をかけた。

「もう、良いぞ」

少女がおずおずと、奥から出てくる。

「あの、どうして言わないでくれたんですか？ あなたに何のメリットもないのに、こんな見ず知らずの私を……」

「君の様子が気になったのと、君みたいな可愛い子が何かするとは思えなかったからな」

「か、可愛い！？」

少女は茹でダコのように顔を赤くすし、手足をバタバタと振ってかなり慌てる。だが、銀はそれに気にせず話を進めた。

「さてと、それで何を作ればいいんだ？」

「あ、は、はい、これを使って武器を作ってほしいんです」

少女が懐から銀色に輝き透き通った鉱石を取り出した。中で銀が渦巻いているようにも見える。見る角度で輝きがその都度変わる不思議な石だ。

「なるほど、きずなはがね絆鋼か」

絆鋼、日本にだけに存在する特殊な鉱石。高い硬度と柔軟性を併せ持っている。かなり数が少なく市場に出回ることはずもない。この鉱石で作った物には不思議な力が宿ると言う。手にした者は世界を支配するとまで言われている。その昔、日本が危機に陥ったとき、これを使った武器を持った守護者がそれを打ち破ったとされる。特別な資格を持つ者しか鍛えることが出来ない。別名、黄泉鋼または黄泉まで鋼。絆鋼が一般的。

「しかも、高純度の。追われるわけだな」

絆鋼はその数の少なさと力から將軍とその守護以外が使用することは禁止されている。もちろん所持する事でもある。鍛冶の製法を

許可なく知っているのも罪となる。

「……………なぜこれで武器を作りたい？」

「理由は言えない。だけど、必要なんです」

銀の問いに少女は覚悟の伴った目で答えた。その目に、迷いはない。

「あまりオススメはしないんだがな」

「それでも必要なんです。噂で、これを扱えるのは將軍のお抱えの鍛冶師とあなたただだと聞きました。もう、あなたしかいないんです」

少女は何を言っても聞かない様子だ。銀は黙ったまま、何も言わない。

「迷惑なのは承知です。きちんと御代もお支払いします。だから、お願いします」

絆鋼を所持している者、それを鍛えた者も罰を受ける。少女の願いは共犯になれということだ。見ず知らずの人間にするには重過ぎる願い。身勝手な願い。それでも、少女はその願いを取り下げようとはしない。絶対に、かなえてほしいから。身勝手な願いだろうと、叶えられるのは銀しかいないから。

「もしもの時は私が無理矢理に作らせたと言ってもらっても結構です。だから……………」

「いや、それはいい。どの道製法を知ってる時点で罪だ。だから、既に罪は背負ってる。俺が言いたいのは、絆鋼を鍛えれば否応なく幕府から狙われる。幕府の追っ手と一人戦い続けることになる。そ

れに絆鋼は……。いや、これはいいか。一生戦い続けることになる。それを続ける覚悟があるのか？　そして、俺の、他人の命を背負う覚悟はあるか？」

じつと、銀は少女を見つめる。少女の覚悟しだいで銀は共に罪を背負い、共に歩き続けると銀は言っている。その覚悟を銀は確かめている。少女は一心に銀を見つめ返す。そして言った。

「……はい、覚悟は元から出来ています」

「……本当にいいんだな」

「はい」

よどみのない真剣なまなざしだった。銀はそれを見て頷く。これならば、大丈夫だと。

「そうか、なら、俺は何も聞かない。ただ、作るだけだ。全力でな」

「ありがとうございます！」

「礼には早い。さて、絆鋼を使うなら久々に準備しねえとな」

銀が二つある扉のひとつにを開け鍛冶場に入っていく。鍛冶場には窯、様々な作業を行う台や工具一式と言った鍛冶道具が所狭しと置いてあった。少女が入ると鉄と炭の匂いが鼻をついた。

「おっとそうだった。まだ、名前を聞いてなかったな。名前なんて言うんだ？」

「桜、春夏秋冬桜です」

「桜か、良い名だ。俺は糸杉銀だ。さて……」

銀が窯に近付いていく。窯には不思議な文様が描かれていた。それは窯だけでなく、水槽やその周辺にも描かれていた。当然、桜に

は何が書いてあるかわからない。これからも、読むことはないだろうとも、思う。

「ここが、絆鋼専用の鍛冶場だ」

「専用？」

「ああ、絆鋼は普通の方法では鍛えることは出来ないからな」

銀は、木箱を開けその中から玉鋼を取り出す。そして窯の中に炭ではなく取り出した玉鋼を入れていく。十個ほど入れたところで銀は立ち上がり窯に近づく。

「あの、それじゃ、燃えないんじゃない……」

「大丈夫だ。絆鋼を鍛えるのならこれでいい」

玉鋼を入れ終わった銀は窯の前にしゃがむ。窯の表面に手をつき目を閉じ、そして呟いた。

「我、至上を鍛えん、我、欲するは、至上の炎なり」

文様に光が走り、玉鋼が燃え上がり青き炎が窯に灯る。すぐに鍛冶場に熱気が充満した。

「すごい……」

思わず呟く桜。青い炎は幻想的でどこか、違う世界を思わせる。引き込まれそうな炎だと、桜は思う。儂さの中に、力強さを垣間見せる、そんな炎の輝きに魅せられた。

「絆鋼を」

「あ、はい……」

ぼんやりとしていた桜が慌てて取り落としそうになりながらも、何とか落とすことなく、絆鋼を銀に渡す。

「最終確認だ。本当にいいんだな？ 今なら、まだ戻れる。絆鋼をどこかに捨て静かに暮らすことも出来る。それでも、やるのか？」

「はい」

「そうか、なら始めるぞ」

銀が絆鋼を持つ。そして、目を瞑り、集中する。

「絆よ、絆、鋼よ、鋼」

絆鋼が光を放ち、絆鋼が更に澄み渡る。渦が止まりただただ、澄み渡る。そのまま、透明になって消えてしまうのではないかというほどに。

「さて、お前はどんな姿になりたいのかな」

銀が絆鋼を窯の中に入れた。一層青い炎が燃え上がる。絆鋼が赤く燃え上がり光を放つ。

「後は俺一人でやるから、居間で待っていてくれ」

「わかりました」

桜は逆らわず居間へと向かった。どうせ、何も自分に出来ることはないのだから。

桜が居間に行ったのを確認し、銀は服を左側だけ脱ぐ。左腕には窯や、鍛冶場と同じ文様が描かれていた。そして、背中には翼の紋が描かれていた。そして、青炎燃え盛る釜に左腕を突っ込んだ。だ

が、銀の左腕は燃えることはない。熱さも感じていないようだ。銀は絆鋼を握り締める。

「型納め」

銀は目を閉じ精神を集中させる。絆鋼はどんな形になるかを自分で決める。まるで、生きているかのように。銀は、その形を聞いているのだ。そして、型を決める。銀は、絆鋼の手伝いをするのだ。

「なるほどね」

銀が左腕を窯から出し、服を着る。絆鋼をどのような形になりたかがわかったのだ。これから、鍛える。

「さあ、行くぞ」

銀は絆鋼を鍛え始めた。

\*\*\*\*\*

銀が絆鋼を鍛えている頃。桜は、居間で正座して待っていた。何もすることなく、手持ち無沙汰な状態だ。何か手伝えばよかったかなと思うが、どうせ、手伝いに行っても邪魔になるだけだと思い、やめる。やはり、手持ち無沙汰だ。

ふと、気になり、刀を見ることにした。背中への刀は横に置いてある。それを手にとり抜く。刀は半ばで無惨にも折れ、使い物にならなくなっていた。どうして、こんな状態になったのか、桜には記憶がない。しかし、何度確認しても、折れた事実が変わることない。確認し終え、それを鞘におさめる桜。

なぜだか、わからないが、自分の感覚が普段よりも数段鋭くなっ

ている。今では、家の外の気配も詳細に感じられる。外で何かの気配を感じる。二つ、とても、強大な気。

「……私の問題、のはず、巻き込むわけにはいかない」

記憶はないが、自分のために危険を冒している銀を、危ない目にあわせるわけには、いかないと思い行動する。桜は、居間の壁に立て掛けられていた刀を手に取った。銀が作ったもの、なかなかの業物だ。なぜだか、わからないが、それがわかった。

「ごめんなさい。お借りします」

刀を背負い銀の家を出る。そして、森へと跳んだ。誰にも気づかれないことなく跳躍する。鍛冶場からそう離れていない森の中心で止まった。

「やはり、逃がしてくれないみたいですね」

自然と、そんな言葉が桜の口から、飛び出す。桜は驚いているがそんなことに気を割く暇はない。

すぐに鉤爪を両腕につけた黒髪の男とチャクラムを持った黒髪鉄面皮の男の二人が桜の前に現れた。

「たりめえだ、さっさと絆鋼を渡しやがれ!!」

鉤爪の男がありたっけの威圧を込めて言う。髪が猫のように逆立っている。

「いや、だと言ったら?」

「これまで通り力付くで奪わせてもらおう」



チャクラムの男が鉤爪の男と正反対に冷静に言う。

これまで通り、その言葉になぜか、桜は納得できた。なぜだか、わからないが、自分はこの二人と、何回も戦ってきた。そう、感じた。

「そつだ、さっきの鍛冶屋ことなあー!!」

「やはり、知っているんですね……」

「我々が知らないはずがない。刀を作らせただけかもしれないが、前に関わった者は消せとの命令だからな」

「やらせない、絶対に」

桜が背中を勢いよく抜きはなつた。自分でも驚くほどの変化が襲う。自分という個が消え、何か別のものが湧き上がってくる。そんな感覚を感じた。桜の纏っていた雰囲気が変わる。少女の雰囲気から歴戦の侍のそれへと変わる。瞳が陰しくなる。

「出て来やがったな劍神。いいぜえ、殺るぜ神依！」

「ああ、絢火」

鉤爪の男　　絢火、チャクラムの男　　神依が得物を構える。

「また、貴様らかオレの邪魔をするな」

桜のものと思えぬほど冷たい声で桜が言う。桜であり桜ではない存在がそこに居た。

「うるせえ！　この前は刀折られたくせに！」

「だから、勝てるっても？　貴様ら、頭に乗るなよ」

高速で桜が動いた。神速の踏み込み。同時に白刃が閃く。並みの武士ならば、これで終わるほどの。だが、絢火と神依の二人も並みではない。神依は白刃に合わせ後ろに跳び、絢火は鉤爪で受け止める。

「……………」

桜はすぐ後方に跳ぶ。先程まで桜のいた場所をチャクラムが通り過ぎた。桜が着地したと同時に絢火が桜に迫っていた。鉤爪を振り上げ、振り下ろす。桜はそれを数歩下がり紙一重でかわす。鉤爪が地面に当たり地面を抉る。絢火が動けないうちに、すかさず、桜が絢火の首を切断するべく動く。一步の踏み込みから、刀を横に振るう。

「殺らせない」

神依が投げたチャクラムを桜が弾く。だが、弾いたというのに桜の表情は険しい。

「チツ、やはり、二人いると厳しいな。まあ、関係はないがな」

「その刀でよく言う」

「……………」

桜が目を細める。桜の刀はボロボロとまでは行かないがたった数度うちあったで所々刃毀れしていた。名刀も、絆鋼で作った武器には敵わない。それが明らかだ。

「ははっ！ ただの刀が絆鋼で作られた俺らの武器に敵うかっての！……！ 行くぜ！……！」

「っ……」

神依が放つチャクラムと共に絢火が両腕を広げ桜へと疾駆する。桜は先行するチャクラムを避けるため身構える。

「お前が弾くか、避けるのはわかりきっている、だから使わせてもらう。縁技、渡り」

二つのチャクラムを投擲。さらに、神依はチャクラムを二つ投擲し最初の二人の穴をくぐらせた。物理的にくぐるはずのないチャクラムは、なぜかくぐった。くぐったチャクラムが消える。

「渡れ」

なんと、消えたチャクラムは桜に迫っていたチャクラムから出てきた。いきなり現れたことで反応が遅れた桜。それでもチャクラムをかわすが、左腕にかすった。深くはないが、浅くもない傷がつく。

「どうだ渡りは？ まだ、行くぞ」

おごりもなく、神依はただ、実行する。

縁技、絆鋼で作られた武器に宿った力を使った技のこと。絆鋼と形状、思いによって異なる。渡りはチャクラム同士を繋げ移動させる技。

「くっ！」

チャクラムを投擲し、渡らせる。チャクラムは縦横無尽に飛び、ありとあらゆる方向から攻撃する。桜はかわすことに集中していた。それでも、かわしきれず何度か、切られ、傷がつく。血が流れる。

「俺を忘れんなよ!!」  
「くっ!!」

絢火の鉤爪を受け止める桜。だが、鏢競り合いなどせず、すぐに後方へ跳び距離をとる。

桜が刀を見る。刃は刃こぼれし所々ヒビがはいっている。絆鋼の武器と打ち合ったせいだ。このまま打ち合いを続ければ刀は折れる。いかに業物といえど絆鋼とは天地ほどの差があるのだ。

完全に桜に不利な戦い。だが、桜は不敵に笑う。それは余裕の笑みか、狂った笑みか、それとも、もっと別の笑みか。

どうしようもない不利な状況の中で桜は楽しんでいた。

## 式

銀は絆鋼を窯から取り出す。絆鋼は赤く熱せられていた。見るからに熱そうだが、銀はそれを素手で掴んでいた。それを鉄鋏に持ちかえる。

「さて、お前はあの形になりたいんだよな。絆よ、絆、鋼よ、鋼、望し形へと」

再び窯の中に入れる。しばらくして、取り出す。すると、絆鋼はその形を変えていた。それを銀は水槽に入った血のような紅い液体につけた。

一瞬のうちに紅い液体が熱せられ、蒸気が発生する。蒸気と、独特の鉄臭い匂いが、鍛冶場に充満した。

窯で熱せられていた絆鋼は数百度に達する熱を放ち、擦過音を上げて大量の気泡が玉鋼を動かし、紅い液体を掻き回す。

徐々に絆鋼は冷やされ、赤く変色していた表面は変わり、数十秒のうちに絆鋼は、その姿をさらに変えた。そして、絆鋼は、その紅い液体を吸収していく。まるで、水を欲する貪欲な砂のように。

絆鋼が紅い液体を完全に吸収し、水槽が空になる。するとそこには灰色の輝きを放つ、柄のない茎の部分が剥き出しになった刀の刀身があった。

「やはり、刀か……さて、ここからが重要だ」

そう、絆鋼の武器を強力なものにするためには、ここからの工程が重要なのだ。

「魂入れを開始する」  
たまいれ

魂入れ、文字通り絆鋼の武器に魂を入れる行為のことだ。これが、どの位出来るかで武器の強さが決まる。

（ありつただけの思いを込める。あいつがどんな刀を必要かは俺はわからない。だけど、刀は斬るためのものだ。ありとあらゆるものを斬る。その思いを込める）

銀は表面に文様の書かれた木箱の中から黒い金槌を取り出す。金槌の頭部には心と刻まれていた。

心槌ハジメ、絆鋼用の金槌。ただの金槌ではなく心を絆鋼に直接送ることが出来る金槌。心を使用するので使用し続けると死に至る。絆鋼に力を与えるもつとも簡単な方法のひとつである。

「さて、行くぞ」

心槌を振り上げ、振り下ろす。鉄と鉄がぶつかる小気味のいい音が鍛冶場に響く。心槌を打ち付ける度に何かが刀身に入って行く。銀の思い。桜に対する思い。刃に対する思い。その全てを銀は注ぎ込み、打ち付ける。

これが最も難しい。なぜなら、本来は形を変える作業であるのに、絆鋼はそれ以前に形が完成してしまっているのだ。この形を変えずに魂入れを行うのは、とても難しい。力加減を間違えれば形は変わり失敗する。絶妙な力加減を要するのだ。絆鋼を扱える鍛冶師が少ないのは、これが理由のひとつでもある。

「はっ！ よっ！ てや！」

何度も何度も心槌を刀身に打ち付ける。その度に小気味のいい音が響く。時に優しく、時に荒々しく、されど刀身の形状は変わらな

い。逆に更に洗練されて行く。

どの位打つたのだろうか、千か、万か、それ程打つた時ようやく、銀は手を止めた。ただただ、敵を斬るために洗練された刀身がそこにあった。

しかし、まだ完成ではない。柄にはめ、鞘に収めて初めて完成なのだ。

「さて、あともう少しで終了だな。しかし、仕事なんて久しぶり過ぎて疲れた。いやいや、これくらいで、疲れてどうするよ。早く完成させよう」

疲れた様子を見せるが、すぐに、それをよそに仕舞い、刀身を柄にはめ込む。ようやく、刀としての形になった。それを、黒塗りの鞘に納める。銀は出来栄えに、満足したような顔をした。

「さて、これで終わりだ」

銀が左腕を振るう。すると窯の火が消えた。窯から玉鋼を取り出し仕舞う。

その時、轟音と共に何か天井を突き破り家を破壊した。

\*\*\*\*\*

縦横無尽に繰り出される鉤爪と、全方位からランダムに放たれるチャクラムを紙一重で桜はかわしていく。だが、やはり少しずつ傷を負っていく。それでも、苦悶の表情だけは、浮かべない。逆に楽しそうな顔さえ浮かべる。見るものが見れば、狂気を纏っているかのように見えるだろう。

「面倒くせえ、神依あれやるぞ」

「わかった」

神依が十以上のチャクラムを投げる。それは、桜の周りで円を描くように並ぶ。そして、もう、ひとつを絢火の前に投げる。絢火の前でチャクラムは止まった。

「何をする気だ」

チャクラムの檻に閉じ込められる形となっている桜。

「はっ！！ こうすんだよ！！！」

絢火がチャクラムに飛び込む。

「「複合縁技渡り流し」」

「なにを　！？」

殺気を感じ咄嗟に桜が飛び退く。そこを絢火が通り過ぎる。そして、またチャクラムの中に消え失せた。

「この渡り流しは渡りを連続で行い敵を弄り殺す技だ」

神依が冷静に解説する。そんな余裕すら、敵は持っている。

「親切だな。敵に情報を与えるなど」

「それでも、問題はないからな。そら、また来るぞ」

その言葉通り、絢火はチャクラムの中から姿を現す。桜はそれを避ける。だが、避けたその場所に絢火がいた。



「はっはっあゝ！！！！」

絢火が鉤爪を振り下ろす。無理に体をひねり受ける。だが、無理な体勢での受けは十分に力が伝わらず桜は押し負けた。骨が折れてもおかしくない。だが、うまく受け流したようで、桜は無事だ。空中で体をひねり、着地する。

「くっ！」

「まだまだ、行くぜえ！！！」

絢火がまた、チャクラムの中に姿を消す。そして、高速でチャクラム同士を移動。桜を切りつけていく。完全にランダムで縦横無尽な攻撃と、高速移動により桜を翻弄する。さすがの桜もこれはかわせず傷を負う。桜がチャクラムの檻を出ようとするが、それは桜を追って同時に移動した。

「ひやははははは！！！！！」

更に絢火のスピードが上がる。端から見れば何かが移動していることなど見えない。桜ですら視認することは出来なかった。暴風のような攻撃を桜は受け続けていた。それでも、死なないのは紙一重で致命傷を避けているため。だが、それもいつまで保つかかわからない。

「っー！」

徐々に桜の顔から余裕が消えていく。笑みを浮かべていた顔は苦悶の表情を浮かべる。息も上がっている。

「はっ！！ 息が上がってるぜ剣神！！ てめえの時代は終わった

「んだよー!!」

「なら、早くオレを倒せばいいだろう。早いだけで、軽いぞ」

絢火を挑発するように言う。その顔には嫌味な笑みが浮かんでいる。

「てめえ……………」

高速で移動していた絢火が止まる。その顔には、怒りが浮かんでいる。やはり、猫のように髪が逆立っている。

「絢火？」

「神依!! アレをやる」

「……………わかった」

チャクラムが神依の元に戻る。そのまま神依は離れていった。

「後悔しやがれ剣神! 縁技共振!!」

絢火が勢い良く鉤爪同士を叩きつけた。凄まじい轟音と振動が響き渡る。

「くっ! 何だ、耳が!!」

凄まじい音が桜の平衡感覚を狂わせる。

「余所見してんじゃねえぞ!!」

桜の前に絢火が現れる。桜が刀を振るおつとするが、刀身が振動し碎け散った。

「あの鍛冶屋のとこまで吹っ飛びな!!」

絢火の蹴りが桜を捉え、桜は凄まじい勢いで吹き飛んだ。そのまま、銀の家に入った。天井をぶち破り、家を破壊した。

「桜!? てか、どういう状況だ!!」

「くっ、けほっ! がはっ!!」

血を吐く桜。慌てて銀が駆け寄る。桜を抱き上げる。

「おい、大丈夫か!!」

「は、はい、大丈夫です。すみません。なんか私、借りた刀砕いちやったみたいで」

無理に笑いながら刀身の砕けた柄を見せる桜。体中傷だらけであった。

「さて、年貢の納め時だぜ」

絢火と神依が崩れかけの家に入って来る。

「逃げてください……私がなんとか……」

桜が動かない体に鞭打って、立ち上がる。满身創痕だが、確固たる意志で立ち上がった。それに出来上がった刀が共鳴する。

「はあ、まさか、こんなことになるとはな。俺は見つかるともりなんてなかったのによ。………待てよ。お前、武器なしでどうする気だよ。ほら、受け取れ」

銀が桜の前に刀を差し出す。刀は桜と共鳴し脈打っていた。心臓が動いているように。歓喜の産声を上げるように刀は脈動する。

「てめえその刀は!？」

「!？」

絢火と神依が気付いて止めようと動き始めるが、すでに時遅し。桜は刀を手に取り鞘から抜いた。銀は桜に刀の銘を伝えた。

「絆鋼から作り出した刀、銘は破魔。ありとあらゆるモノを斬る至高の刀だ」

鞘から抜かれた刀　破魔は、太陽の光を受けて神々しい輝きを放っていた。美しき刀身と、それを彩る漆黒の柄。まさしく至高の刀と言っても遜色ない。

「絆鋼を加工しやがった」

「ここは退くべきだ」

神依が絢火に助言する。圧倒していたとは言っても、二人がかりでかなりの時間を使っている。武器が対等になった今、絢火と神依の二人には荷が重い。

「オレが逃がすと思っっているのか？」

「思わねえなあ剣神。安心しろや。ここで、殺してやるよ……そっちの鍛冶師からなあ!!」

絢火が銀を狙う。この中で一番弱いのは銀だ。その銀を狙うのは当然のことだろう。絢火が鉤爪を振り上げ銀に振り下ろす。

「殺らせるわけないだろ」

絢火の隣に桜が移動していた。そして、絢火に刀を振り下ろす。迷いなき無情の白刃が絢火に迫る。神依がチャクラムを投げるが遅い。絢火が横に跳ぶ。だが、次の瞬間、絢火の右腕が宙を舞った。

「絢火！」

「グアアアアア！！」

絢火が右腕のあった部分を押さえる。右腕は肘から下が切断されていた。神依が絢火に駆け寄ろうとする。だが、既に神依の目の前に桜がいた。

「くっ！！ 渡り！」

神依が渡りを利用し絢火の前まで移動する。桜の斬撃は空を斬った。だが、それだけで大気が切断された。実力差は明白だった。もとより、二人にはかなうはずのない相手。剣の神と呼ばれし者。先ほどまでの攻防が嘘のように、桜は立っていた。

「……ここは退く」

神依が絢火を抱える。そして、渡りを使用しようとした。

「逃がすわけないだろう。無幻流奥義百花繚乱」

桜が刀を振るった。連続で繰り出される斬撃。それはまさしく嵐。剣風で鍛冶場は跡形もなく吹き飛んだ。

無幻流奥義百花繚乱、たくさんの花が咲きみだれるように、無数

の斬撃を連続で繰り出す技。初撃と終撃が同じだけで、一回使うごとに斬撃の軌道が変わるため、一回として同じ百花繚乱はない。嵐が通り過ぎた時、そこには神依も絢火もない。

「逃げたか、まあ、それも良いか」

桜が刀を鞘に収める。その途端スイッチが切れたかのように倒れる桜。

「おっと」

それを銀が受け止める。

「お疲れさんと……さて、どうするか」

とりあえず、桜を寝かせることにした。ほとんど何も残っていなかったが。

・  
・  
・  
桜が目を覚めたのはとくに日が沈んだころであった。先ほどまで、長い眠りについていたような気がする。

「!?!」

まずは、驚きで飛び起きた。天井がないことと家が全壊とはいわないまでも半壊、いや、八割は壊れていたことに驚いた。それを自分でやったのだとなんとなくわかってから、更に落ち込んだ。怪我は銀が手当したようだ。

「なに、落ち込んでんだ」

「あ、銀さん」

「銀で良いぞ、さん付けは他人行儀な気がするからな」

「あ、はい、でもさん付けで呼ばせて下さい。なんか、癖みたいで」  
「わかった、なら、仕方ないな」

そして、桜は落ち着いて周りを見渡す。ほとんど使えるものはなかった。完全に破壊されていた。戦闘だったとはいえやりすぎたと思わざるえない。まあ、桜自身にその自覚はないが。

「さて、こんな時で悪いが、代金の話をしようか」

「は、はい!」

「さて、まずは鍛えた刀代、鞘代、柄代、家の修理費、鍛冶場の修理費、諸々あわせてこれ位だな」

銀がそろばんをはじき、その結果を桜に見せる。その値段はかなり高かった。

「た、高い」

当たり前と言えば当たり前だが、旅をしてきた桜に払える値段ではない。

「それでも安い方だ、まあ、金がないのはわかってたから、驚きはない」

「すみません」

しゅんとする桜。

「というわけで、足りない分は働いて払ってもらおうぞ。いいな」

「……はい」

そんなわけで桜は銀の所で働くこととなった。しかし、働いただけで返せるとはまったく桜には思えなかったが。

「今日は遅いから寝る」

「はい、あの、これからよろしくお願いします」

「ああ」

桜は再び眠りについた。すぐに、寝息が聞こえはじめた。寝つきはいいらしい。

「ふう」

銀が煙管を吸い煙を吐く。片膝を曲げ、折れた柱に寄りかかった姿勢で空を見上げる。満月が綺麗で、雲一つない明るい空だった。小さな悩みなど、霞んでしまっくらいには。

「久し振りだな、銀」

そんな銀に桜、いや、桜の体、声をしているが全くの別人が声をかける。

「ああ、やっぱりそうか、今は何て名前だ」

「変わらない、お前も知っているはずだ」

「そうだったな剣神」

剣神は銀の隣に腰を下ろした。今まで、戦っていたのは、この剣神だ。



「どうやら、桜の体は合っているみたいだな」

どこか、敵愾心を放ちながら銀が言う。そこには、遠い過去を見つめているような気配があった。

「ああ、刀を抜いていなくても、桜が寝れば時々だが、こうしてオシが表に出れるようになった」

「そうか、てか、はしたないから胡座かくな、女だろうが」

胡座をかく剣神に銀が注意する。渋々剣神は姿勢を変えながらいう。本当にしぶしぶだ。

「昔からお前は変わらないな、まったく、しかし、お前あれはふっかけすぎだろ。もし、桜だけだったらどうしてたんだよ」

「あの値段は正当だ。それにお前がいたから鍛えたんだ。お前がいなけりゃつけるはずがねえ。いや、お前でも、受けたかは、わからんあ」

「その割には桜の為に思いを込めてたじゃないか」

「……………気のせいだろ」

一瞬の空白の後言った。それは、事実であった。銀が込めた思いは、剣神のためではなく、桜のため。もとより、剣神のために思いを込めたりなどする気はなかった。しようともしなかった。

「そうか……………それならいいが」

「それより、お前が来たってことはやばいことでもあるのか？」

「……………いや、単純に絆鋼を形にしておきたかった。それだけだ」

そう言い、剣神は天を仰ぎ、月を見る。

「そうか……さて、ならもつ寝る。明日から働いてもらうからな」

劍神の様子を気にせず銀は言った。それに劍神が笑いながら答える。

「ああ、こき使ってやれ。久し振りに話せて楽しかったよ銀。おやすみ」

「ああ」

劍神は元寝ていた布団に戻り眠りについた。その後は起きることはなかった。

「あいつ……今頃、どうしてるかな」

銀は呟いたあと頭を振り思考を振り払う。考えた所で今の銀には意味のないことだからだ。

「いや、俺には関係ないことだな。今の俺にはな……っと、寝るか」

銀は一度桜を見てから眠りについた。

江戸中央、將軍のおわす江戸城。時間は昼下がり。

当代將軍は徳川陶咲。とくがわすえさきまだ十六と若輩ながらも徳川家咲の再臨とまで言われるほどの才を持つ女性。時代に捕らわれない政策を次々に行っている。生き別れの兄がいるが消息不明で、皆が生きてはいないと言う中、唯一兄の生存を信じている。

そして陶咲は明朝帰還した二人の守護、絢火と神依の報告を聞いていた。昼下がりとなった理由は、絢火は右腕を肘から下が切り落とされてかなりの出血で先ほどまで危険な状態だったのだ。そのため報告が出来るようになるまでに時間がかかり昼下がりとなってしまったのだ。

「それで報告を聞きましようか」

よく通る声で陶咲が聞く。ひざまずいていた絢火が顔をあげ言う。先日の戦闘での荒々しい感じはなく、別人かと思うほど落ち着いている。

「我らは絆鋼を所持する者を追う任務を行っておりました」

「はい、それでその者を追い詰めたと聞いています」

「はっ！ しかし、そこまでは良かったのですが刀を抜いた途端霧困気が一変し、自らを剣神と名乗りました」

「まさか！？ それは本当なのですか！？」

陶咲の問いに頷く絢火。神依にも確認と陶咲が視線を送る。神依もまた頷いた。

「まさか……それで？」

「はい、刀を折るも、逃亡されました。そして、居所を突き止め、再び戦闘を行いました。善戦しましたが、敵に鍛冶師がいたもので、絆鋼を鍛えられ敗北しここに至る始末です」

「その時に右腕を？」

「はい」

絢火の右腕の位置には何もなかった。陶咲が悲しみを浮かべる。だが、すぐにそれを押し込め、いつもどおり言う。

「いえ、剣神相手に生き残っただけでも良しとしましょう。二人ともご苦労でした」

「もつたいないお言葉です」

「それでは下がりなさい」

頭を下げ絢火と神依が退出する。それと同時に刀を腰に差した、会った人間全てが白としか認識しないような真っ白な男が恭しく頭を下げ入室する。

「失礼します」

「白劫、絢火に代わりの腕を」

「承知致しました。既に技師に絆鋼を使い作らせています」

白劫、江戸守護の一人。幕府の懐刀、將軍の右腕、真白き剣聖など数多くの名を持つ。知略、武術、その全てが日本最強と謳われている。

「相変わらず早いわね」

白劫は頭を下げた。それから、懐から一枚の写真を取り出した。

「絢火と神依の報告にあった、例の鍛冶師を特定しました」

白劫が陶咲に写真を手渡した。写真には銀髪の男が写っていた。それを見た瞬間、陶咲の目が驚きで見開かれる。

「えっ……………」

陶咲の頭の中で考えが現れては消えていく。ああでもない、こうでもない。信じたいけど信じられない。混乱する陶咲。その間も白劫は話を続ける。

「命令さえあればすぐにでも捕らえることが出来ますが……………陶咲様？」

自分を見つめる白劫のおかげで我に返る陶咲。すぐに、指示をだす。

「はー!? あ、いえ、すぐにでも、どうこうする問題でもないですよ」

「……………御心のままに」

「もう、下がりなさい」

「はい」

一礼して白劫は退出した。陶咲は一瞬の逡巡のあと写真をもう一度見る。やはり、信じられない。だけど、本当なら嬉しさで、胸がいっぱいになる。

「まさか、本当に? 本当にお兄様なのですか?」

言い切ってからそれはないと思い直す。草の根かき分けて探した

兄が近くにいたなど信じられるほど陶咲は楽観的ではない。

「いえ、恐らく他人のそら似、お兄様があんなに所にいるわけないですよ。でも……………よく似ています。…………お兄様、あなたは今、どこにいるのですか。こんなにも私はあなたをお慕いしているというのに」

陶咲の呟きは虚しく虚空へと消えた。その写真は、大事に胸に抱きながら。

\*\*\*\*\*

明朝、日の登った直後、銀が目を覚ました。寝たときと同じで鍛冶場などは破壊されたままだ。吹きっさらしの中、桜はまだ寝ている。銀は見回しながら、さっさと引越すことに決める。

「さて、さっさと行くか。この状態じゃ結構困るからな」

銀は桜を起こすために桜に近づく。

「っ!?!?」

桜を見た銀は息が止まりかけた。桜は完全に服をはだけていたのだ。その為、桜の形の良い二つの果実はもちろんのこと、更に下半身まで全て見えていた。

頭が一回転するかと思うほど素早く顔を背ける銀。何とか湧き上がってくる激情を抑えようと四苦八苦していると桜が目を覚ました。

「んん〜銀さんおはようございます」

桜が体を起こし伸びをして、挨拶する。若干マシになったが、いまだにはだけているため、桜を直視出来ない銀。顔を不自然に背けたまま言う。

「あ、ああ、おはよう」

「いい天気ですね」

「ああ、そうだな。そんなことより……………」

顔を背けながら下を指し示す銀。

「？」

クエスチョンマークを頭の上に浮かべながら銀の示す方を見る桜。当然、服がはだけて色々丸見えになっているのが見える。

「！！！？」

まさに神速とも言える程のスピードで服を直す桜。顔は羞恥で真っ赤である。

「……………」

「……………」

嫌な沈黙が場を支配する。銀は見てしまったという罪悪感といったまねなさで黙り、桜は見られて怒っているというよりは、またやってしまったというような後悔で黙っていた。桜は寝起きが途轍もなく悪い。完全に目が覚めるまで、かなりきわどいことまでやってしまったことまでであるのだ。後悔もする。

「……………あゝ、とりあえず着替えたらどうだ？」

沈黙を破り銀が桜に言う。

「……服ないです」

「……………ないって……………」

「全部吹き飛んでます」

「あちゃ〜」

これではどうしようもない。現在は銀の使っていない寝巻きを来ている状態なので服がなければ何も出来ない。服を買おうにも桜は銀に膨大な借金をしている身のため金があるはずがなく、銀が買ってやろうにもこれ以上借金は増やせない状態なので買えないのである。

「お前の元着てた奴はボロボロだったからな、処分したし。さて、どうするか」

考えてもどうしようもない。何かないか記憶を探る銀。顎に手を置いて、考え込む。

「あ！ そうだ、確かあったな」

何か思い出したのか銀が瓦礫を探り始める。そして、黒塗りの木箱を掘り出した。それは、あれほどの剣戟の嵐の中でさえ、まったく傷ついていなかった。新品同然に綺麗であった。

「あった、やはりな、ほら」

その木箱を桜に渡す。クエスチオンマークを浮かべながら、桜がそれをあけるとそこには黒の羽織とそれに対応する動きやすそうな



服が入っていた。

「あの、これは？」

「元はお前のだ。俺が預かっていたものだから、着ていい」

「あの、私はこんなもの預けた覚えはないんですけど？」

銀の言葉にクエスチョンマークを浮かべる桜。だが、銀は意に返さない。さらさら答える気はないようだ。

「いいから着ろ。俺は向こうに行ってるからな」

銀はそこから立ち去る。瓦礫に座り煙管を吸う。銀の感情を読み取ることは出来ない。

「…………ふっ」

吐き出された煙が一瞬、宙を漂い消えていく。そこに、桜の聲がかかる。

「あの、銀さん…………着ましたけど…………」

桜が瓦礫に隠れている。

「何してんだ？」

「いえ、これ、少し露出が多いんじゃない」

桜の格好は袖のない黒のミニスカート丈の着物と同じく黒のニーソックス。確かに露出が多い。多いが、銀は思っ、羽織を羽織れば大丈夫だろうと。だから、言う。

「なんだ？ 羽織、羽織らないのか？」

「え？」

「一緒に入っていたはずだぞ」

「あ、でも、いいんですか、こんなに高そうなのに」

桜が取り出した黒の羽織、背中には桜の紋が描かれている。気づいてはいたが、高そうで、自分には不釣り合いだったので、着なかったのだ。万一汚してもしたら、と思うとなおさら着れない。

「言つたら、それはお前のだ。お前じゃないお前のだが」

「何だがよくわかりませんが、着てもいいんですね？」

「ああ」

銀がそう言うと、桜は勢いよく羽織を羽織った。そして一回転して後ろを向く。背中の桜の紋を銀に見せる。

「どうですか？」

「ああ、似合ってるよ」

「ありがとうございます」

ドキリとする銀。桜のその無邪気な笑顔がある人物に似ていたからだ。もう、二度と会えない。あの人に。

(性格も仕草も何もかも全く似てないんだがな)

それでも銀はどこか懐かしさを感じた。昔を思い出すように、遠くを見つめる。感づかれないように銀は話を変えた。

「さて、じゃあ、早速働いてもらうか」

「はい！ それで、何をすればいいですか？」

鞘に収めた破魔を背負い気合い十分な桜。ますます、その姿がある人とかぶるが、銀はあえて無視した。

「引越した」

「はい！でも、あてはあるんですか？」

「ああ、爺さんが昔建てた家がある。そこに行く。江戸からも離れてるし、ちょうどいいだろう」

そんなわけで銀と桜は引越しの準備を始めた。と言っても殆どの物は使えなくなっているか、吹き飛んでいるためさほど時間はかからない。準備が出来たら二人は新しい家に出発した。

新しい住居は江戸から離れた、とある位置の山の中腹にある。麓の村から続く長い石段を登れば着く。

「着いたと……ふう、流石にあの階段を登るのはきつかったな」

銀は登って来た石段を見ながら言った。ここまで、引越して来るまでほぼ半日かかってしまった。石段がなければまだ、早く終わっただろう。

「うわ〜すごいです。大きいです」

新しい住居はもはや屋敷であり、山の中腹でありながら広い庭や道場、鍛冶場まで有していた。

「爺さんが色々と無茶したからなこの屋敷……」

「そうですね。あ！誰かいますよ」

「何？」

桜が屋敷の入り口を指差す。そこには白い着物を着た女がいた。髪が長く顔を覆っているため表情を見ることはできない。どこか、人間離れした不気味さがある女だ。村の女だろうか。しかし、それではここにおいて、手招きしていることが説明できない。

「誰だあれは」

「銀さんの知り合いじゃないんですか？」

銀にあんな知り合いはいない。それに、さっきも言ったがこの屋敷は滅多に人が近付かないのだ。あんな女がいるはずもない。

「ああ」

「でも、手招きしてますよ」

女は顔を隠したまま手招きしていた。ただただ、ゆっくりと手招きしていた。黙々とその動作を続ける女。機械的な動作に、嫌な感じを感じる銀。

「嫌な感じがするな」

「そうですか？ とりあえず行って何してるか聞いてみましょう」

「あ、おい！」

銀が止める間も無く、桜は女の方へ走って行った。仕方なく銀も桜を追う。追いついたところで丁度、桜が女に問いかけた。

「あの何してるんですか？」

「……………」

桜の問いに女は沈黙を返す。そして、まだ手招きを続ける。聞こえなかったはずはない。意図した無言。

「あの〜」  
「……………」

女は相変わらず黙ったまま手招きをする。その時、何とも言えない感覚を銀は感じた。違和感とも言う。咄嗟に桜の襟を掴み後ろに引いていた。そして、気がついた。女が笑っていた。その瞬間、女性の顔が割れ、中から巨大な百足が現れ、その鋭い足を振り下ろした。

「ぐっ！」

「銀さん!!！」

銀により後ろに引かれた桜には届かなかったが銀は右腕を切られた。自身も後ろに下がろうとしていたため傷は浅い。桜が駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか!!！」

「ああ、大丈夫だ。だが、問題だな」

銀は傷口を押さえながら百足を見る。女の体に入っていたとは思えない程巨大な百足。生理的嫌悪感を感じずにはいられない。それほどまで、奇怪な生物であった。

「あれは何なんですか？」

「あは蟲だ」

「ムシ？ それってその辺りにいるバツタとかセミですか？」

「いや違う、それは虫だ。俺が言ってるのは蟲」

頭にクエスチョンマークを浮かべる桜。ややこしくてわからない

ようだ。まあ、言葉で説明すれば誰でもそうなるだろう。

「蟲つてのは人間の中にいるモノだ。よく言うだろ、虫の居所が悪  
いって、それは蟲のことを言ってるんだ」

「はあ」

「分からなくても先進むからな。本来蟲は外に出て来ることはない、  
人間が死ねば蟲も一緒に死ぬ」

蟲、人間の中に住むモノ。人間に害をもたらすモノではなく、人  
間と共生するモノ。人間の欲求に深く関わっている。殆どの人間は  
体の中に蟲がいることを知らない。蟲には定まった形はなく宿主の  
気質にあった形となる。また、宿主が子供をもうければ蟲はその子  
供に子を宿す。こうして人間と蟲の関係は成り立っている。

「そして、あれはその成れの果てだ。何らかの原因で蟲が怪化した  
ものだ」

蟲が怪化したモノを怪蟲かいちゅうと言う。蟲の形にもよるが、怪蟲は宿主  
が死ぬとその軀を乗っ取り人を誘い、人を喰らう。それは、本能の  
赴くまま無差別に。

「どうします？」

「斬れ、もうあれは死んでる。静かに眠らせてやるのがいいだろう」  
「わかりました」

桜が破魔に手をかける。その瞬間、沈黙していた百足も動く。女  
の軀を引きずりながら高速で動く。それに合わせ桜が破魔を抜き放  
つ。桜は、いつものように深みへと落ちていった。

「さて、こい蟲オレが相手だ」

桜の雰囲気が一変し剣神のそれとなる。百足はそんなもの関係なしに剣神へと突っ込む。剣神は破魔を腰ために構え向かってくる百足に走る。そして百足の目の前で回転、その勢いを利用し破魔を振るう。

蟲の本能か刃が百足自身の身体を切り裂く直前、百足はその体を捻り致命傷となる頭への斬撃を回避しようとした。剣神の斬撃が空を切る。

だが剣神は勢いを止めない。横の回転から体を捻り縦の回転に変える。

「はあああああああ！！！」

斬。地を揺るがすほどの衝撃が襲う。

剣神と百足が交差した。剣神は無傷で立っている。百足は綺麗に真っ二つになった。

「ふん、出直してこい」

剣神が血を払い破魔を鞘に収める。纏っていた雰囲気が桜のやわらかい雰囲気になる。

「ってわあ!？」

桜が百足の死体を見て驚く。凄まじいスピードで離れる。

「さっきまで普通に戦ってたじゃねえか」

「へ？ あ、えっと刀抜いた後はいつも記憶なくて」

やはり、剣神になっていたときの記憶には、桜にはない。

(なるほど、剣神の時の記憶は残らないのか。いつもと変わら  
ない。それにしても……………)

銀が百足を見る。真つ二つに切断され動く気配はない。完全に死  
んでいる。

だが、銀は違和感を感じずにはいられない。何かを忘れているよ  
うな気がするのだ。喉まで出掛かっているのだが、出てこない。喉  
に小骨が刺さった感じだ。

「あれ、また、お客さんが……………」

桜の言葉で銀は唐突に思い出す。当たり前のことであった。

「避ける!!」

銀が桜を突き飛ばし自分も転がる。そこを百足が高速で通り過ぎ  
る。風が二人に叩きつけられる。

先ほどの百足ではない。新しい百足だ。

「忘れていた。百足は常に番いで行動する」

百足はおそらくは女の夫であったであろう男の軀を引き摺って百  
足は高速で銀と桜の周りを回る。

「また、私が」

『ちよつと待ってもらおうか』

知らぬ男の声と甘ったるい匂いが銀と桜の鼻を突く。



「なんだ？ この匂い」

「なんか、甘すぎてくらくらします」

百足がその匂いの出所へ向かう。出所は石段の終わりの所に立っている白髪の男であった。その男が腕を振るう。すると百足が動きを止め地面に倒れ付した。

「ふう、協力ありがとよ」

白髪の男が近づいてきて言った。

「お前は誰だ？」

「俺か？ 俺は怪師かいしの桐生きりゅうだ」

白髪の男はそう名乗った。

## 肆（前書き）

怪師の桐生さん、イメージは某蟲師の主人公のあの人です。  
怪師の設定も似てますがパクリではないです。

## 肆

桐生と名乗った男は動かなくなつた百足に近寄り何かの札を貼つていく。

改めて男を見ると長袖とブラウンのロングコート、それに大きな木箱を背負っているという怪しい出で立ちであつた。

「それであんたは誰だ？」

警戒しながら銀が桐生に聞く。桐生は笑つて答える。少しでも警戒を解くためだろう。敵意を見せないための笑みだ。

「言つたる怪師だ」

怪師かいし、または怪師あやかしとも呼ばれる。怪に関するあらゆる事件を取り扱う怪の専門家。力ある者である怪師は、否応なく怪を呼び寄せしてしまうため、一つの村や、町には留まることが出来ず、旅をしながら仕事をしている。バラバラに仕事をしているように見えるが、怪師間での蟲の知らせなど、横の繋がりはある。普通の人間には、怪は見えないため一部の力のある人間にしか知られていない。男女比率が丁度半々なので、怪師は基本、同業者同士で結婚し、旅をしながら子を育てる。怪師の力はそのまま子に受け継がれる。それにより、次世代に力の強い怪師を遺していく。

「怪師か、俺は銀、こつちは桜だ」

「よろしく願います」

挨拶を交わす銀と桜と桐生。そして、疑問を述べる。

「で、なんでここに？」

「そいつらに関わる仕事をしているもんだ。捕獲途中に逃げられてな」

「なるほど」

桐生曰く、あの百足が現れたことを蟲の知らせで聞いた桐生がそれを捕獲しようとしていたのだが逃げられて追っていたらここに着いたらしい。それにしても、怪師の中でも、それなりに力を持っていそうな桐生が逃げられたことに銀は少し違和感を感じる。だが、それを聞いても答えてくれるとは思わないため、聞く事はしない。

「一匹倒してくれて助かるよ。元々一匹は殺すつもりだったが、俺は殺生はすかんからな」

「それは構わないが、どうするんだ？」

「怪蟲を元に戻すための研究に使う」

「怪蟲になった蟲は戻せないんじゃないのか？」

怪蟲は前にも言った通り元に戻すことは出来ない。桐生はそれを何とかする研究をしていると言う。

「へえ、よく知ってんな。確かに怪蟲に成った蟲は戻せない、殺すしかないと言われている。俺はそれがどうにも納得出来ない質でね」

桐生は札を貼り終えた百足に針を刺していく。見る見るうちに百足が縮んでいった。

それを桐生は木箱の引き出しから出した小瓶に入れた。

「えっ、え？ どうやったんですか？」

「怪師の企業秘密さ。さて、後は死体だな」

桐生は百足の死骸に近付いて調べる。特に傷口から見えている内  
部器官を念入りに調べている。

「ほう、綺麗に斬れてるな。全部綺麗に残ってやがる」

桐生は百足の傷を手袋をはめた指でなぞりながら言う。

「これをやったのはお前さんかい？」

桐生が銀に聞く。刀を持っているのは桜でも、知らなければ桜が  
やったとは到底思わない。当然だ。

「いや、俺じゃない。こいつだ」

銀が桜を指差す。

「ほう」

桐生の顔が驚きと感心に変わり、そして目を細め観察するような  
それに変わる。桜をじっと見る。

「……………あつ」

値踏みされるように見つめられて桜は真っ赤になって俯いてしま  
った。基本自分に注目が集まるのは、照れる。

「そうか、すげえ嬢ちゃんだな」

「あ、いえ」

桐生は再び死骸を調べる。そして、小瓶に解体しながら詰めてい

く。全ての小瓶に詰め終わると、同時に百足は粒子となって消えた。元居た場所に帰ったのだらう。桐生は木箱を背負う。

「さて、とりあえずは終わりだな」

既に空は暗くなっている。銀達は屋敷の片付けをしていた。桐生が終わったのを見て銀が言う。

「もう遅い泊まって行くといい」

「良いのか？」

「構わない、どうせ部屋は余っているからな」

「なら遠慮なく」

桐生は屋敷へあがった。銀が桐生を部屋に案内する。桐生はきよるきよると、場を見回す。色々と確認しているのだらう。そして言う。

「いい屋敷だな。綺麗な場だし、悪いもんもないみたいだしな」  
「爺さんが建てた屋敷だからな。それなりだらう」

それから食事となった。自分で作ると言った桜が作ったのだが意外や意外、かなり美味い。それを銀が言ったため桜は不機嫌になり、銀が苦勞して機嫌を直すことになり、それを見て桐生は笑うという面白い構図での食事となった。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

桜が食器を片づけ始める。銀が手伝って他のものを持っていく。片付けが終わったところで桐生がきりだす。

「美味かったな嬢ちゃんの料理は」  
「そんな、大したことないですよ」

照れて頬を染めながら、謙遜する桜。それでも、まんざらではなさそうだ。誰だって褒められれば嬉しい。

「いやいや、大したもんだって、じゃあ美味しい飯の礼に旅の話でもしてやるうか」

桐生が桜の料理の礼に旅の話をする事になった。  
桐生が語ったのは怪に関する面白い話、怖い話。どれも興味をひく内容であった。また銀の話などもあり場は盛り上がった。

深夜、桜が寝静まった頃、銀は縁側で月を見ながら煙管を吸っていた。趣味というか日課というかだ。

「ふっ」  
「よう、いい趣味だな」

そこに桐生がやって来た。桐生は隣にやってきて座る。

「眠れないのか？」

隣に座る桐生に銀が聞く。

「いや、ちょっとお前さんに聞きたいことがあってな」  
「桜のことか？」

「話が早くて助かる」

桐生はポケットから煙草を取り出しライターで火をつける。どちらも異国から伝わったものだ。持っている者は少ない。

「ふう、聞きたいことはまさにそれだ」

「まあ、アレに気付けないようじゃ怪師失格だからな」

そう言い銀は煙管を吸い、煙を吐き出す。吐き出された煙は一瞬虚空を漂い消えていく。それを数度繰り返す。

銀が煙管を吸い終わったのと同時に桐生も三本目の煙草を吸い終わる。

「さて桐生、あなたは桜をどう思った？」

「どう思っても何もありません。確かに外の軀も中の蟲も普通と一切変わらん。だが……………」

「魂が違う、だろ」

「そうだ」

銀は言いながら、煙管の雁首の火皿に丸めたタバコを詰める。詰め終えたら煙草盆の炭火に雁首を近づけて火を点けた。

「ふう」

再び煙管を吸う。そして言う。

「それは当たり前だ」

「だがありえんだろう一つの軀に二つの魂など」

だが、実際にありえてしまっているのだ。桜の軀の中には現在桜



本来の魂と剣神の魂が同居している。剣を抜くという動作の元、入れ替えが行われているのだ。

「なんなんだあの魂は？」

「剣神だ」

「剣神？」

「ああ、剣神のことを知るならこの話がいいだろう」

・  
・  
・

その昔、まだ、日本の内部で数十もの国に分かれ覇権を争っていた時代。幾つもの戦場で鬼の噂が流れた。戦場で無差別に人を殺す鬼の噂が。

数多くの戦場で人を斬り、髪と右腕と刀は赤く染まり、笑いを顔に貼り付けて人を殺す美しき女鬼。

更に、その剣の腕はままさしく剣神と呼ぶにふさわしく、敵うものなどいるはずもなかった。

彼女に殺された者は千を超え万に達するとまで言われた。

しかし、ある時その噂はぶつぷりと途切れる事となる。死んだのか？ 否、どこか遠くに行ったのか？ 否。断じて否。

彼女が消えた理由、それは単純なこと、戦争が終わったからだ。

天下分け目の大戦を機に剣神の名を、鬼の名を欲しいがままにした、彼女の名を人々が聞くことはなかった。

だがそれから約300年、再び剣神の名が全国に轟くことになる。千人斬り、千人もの侍を年端も行かぬ少女が圧倒的剣技で倒していった。

剣神の再臨として全国に再び剣神の名が轟いた。

当時の將軍徳川家咲はこれをよしとせず、九人の守護を自ら率い剣神を討伐に向かった。

結果、三日三晩に及ぶ激戦の後剣神は倒された。

しかし、その後も時代の、歴史の裏では、剣神は幾度となく現れ殺しの限りを尽くしていたという。

・  
・  
・  
銀は最後にそう締めくくり、話終えた。

「……………」  
「……………」

流石の桐生も黙る。知らない者からしたら、それほどの衝撃な話であった。おずおずと桐生が口を開く。

「つまり、あの嬢ちゃんには、その剣神が入ってるってことなのか」  
「そういうことだ」  
「信じられんな」

口に手を当て考え込む桐生。信じられんとは言うが、内心では信じていた。そうすれば、辻褄があうからだ。先ほどの百足の傷を見てなかったら、信じられなかったかもしれないが。

「だが、見た以上信じるしかないようだな。だがなぜ、そんな大事なことを俺みたいなのにした」

桐生が銀を疑いを含んだ眼で見つめる。そんな秘密は、桐生のよくな流れ者には、話すべきことではない。どこで、誰に漏れるかわかったものではないからだ。

「もしもの時の為だ。もしもの時、あんたみたいなの助けが必要だからな」

「なるほど、つまり俺を利用するたために話したわけか」  
「まさか、協力と言ってくれ」

銀が心外だなと笑いながら言った。

「わかった。もしも時はここに文を送ってくれ」

桐生が紙にその場所の住所を書いて銀に渡す。銀はそれを懐にし  
まった。

「わかった。さて、じゃあ、こっちからも聞いていいか？」

「ああ」

「お前、異邦人だろ」

「……………」

桐生は驚きで瞬きした。分かるはずがないと思っていた。それが  
バレて桐生はひどく驚いていた。

「なんでわかった」

「匂いかな。言葉も仕草も全部日本人だった。だが、匂いが違う」  
「匂い？」

桐生は確かめるように自分の匂いを嗅ぐ。それを見て銀は盛大に  
笑い出した。

「その匂いじゃねえよ。なんて言うか、外の匂いだ。日本にない外  
のな」

「なるほどな……当たりだ。俺は日本人じゃない。訳あって日本に  
来て帰れないから怪師をやってる」

なぜ日本に来たのか、なぜ帰れないのか、何で怪師になったのか銀は気になったが聞くことはしなかった。

「そうか……それで、これからどうするんだ？　ここでのやることはもう、終わったんだろ？」

「いや、まだ後一つあるんだが、これはお前たちには関係ないから明日の明朝には出て行く」

「そうか」

しばらく黙って二人は月を見ていた。そのうちタバコの火が消える。それを皮切りに夜会は終了のごとく銀が立ち上がる。

「さて、そろそろ寝るかな」

煙管を片付けながら銀が言う。

「なら、俺も寝るかね」

桐生も立ち上がる。

「なかなか良い時間だったよ。飯もつまかったと嬢ちゃんに伝えてくれ」

桐生が部屋に戻りながら振り返らずに言う。

「ああ」

銀も振り返らずに自分の部屋に戻って行った。

そして桐生は明朝予告通り何も言わずに出て行った。

「桐生さん何も言わずに行っちゃうなんて……」

残念そうに桜が言う。桐生の話など、それなりに楽しい時間を過ごしたのだ。お礼くらいは言いたかったという桜。

「いつかまた会えるさ」

今生の別れではない。いつかまた、めぐり合うときが来るだろう。お礼なら、その時に言えばいい。

「そうですね。そうですね」

頷いていつもどおりの笑顔になる桜。

「さて、とりあえず仕事を再会するかね。鍛冶場はあるし。まあ、客が来るとは思えんが」

あんな石段を登ってくる物好きはいないだろうと思う銀。

「ダメですよ。きちんと宣伝すれば誰か来てくれますよ」

「お前、俺たちの立場わかってるのか？」

絶賛幕府から追われている立場の二人。しかし、その追っ手は現在ないということを知らない二人。どの道宣伝することなど出来ない。

「わ、わかってますよ」

顔を背けながら言う桜。明らかにわかっているいなかったことが見え見えである。

「わかってなかったな」

「いえ、忘れてただけで……あ」

墓穴を掘った桜。わかってなかったことではなく忘れていたことが判明した。

「お前な……」

「すみません」

溜息をつく銀。

「まあいい、とりあえず、やれることだけやっておくさ。まだ、片付いてないところもあるしな」

「はい、私がんばります!!」

拳を突き上げる桜。がんばりすぎて空回りが怖い銀であった。

\*\*\*

「ああ、あなたの言うとおりだったよ」

桐生が生い茂る森の端の岩に寄りかかりながら呟く。煙草を取り出しライターで火をつける。

かさかさと物陰から、音が響く。

「まったく、驚くことばかりだったよ」

物陰に誰かいるようだと会話している。物陰の中の人間はまったく見えない。

「……以上が俺が感じたことだ」

桐生は紙の束を地面に置く。次の瞬間には紙の束が消え金の入った袋が置かれていた。

「気前のいいことで」

それを懐にしまい桐生は煙草に火をつける。紫煙を吐き出しながら聞く。

「一つ聞きたい。あんたは何であるの二人を俺に調べると言った」

いつまでも経っても反応はない。桐生が物陰を見ると既に立ち去った後であった。

頭をかき、さてどうするかと考える桐生。

「なるようにしかならんか」

だが、桐生はすぐに考えるのをやめた。自分が考えたところでどうにかなるわけでもないからだとわかったからだ。ただ、一線は守る。剣神についてなどは、話さなかった。

気を入れ替え、木箱を背負い桐生は歩き出した。

「さて、これからどこに行きましょうかね」

煙草をくわえて青空を見上げながら歩く桐生。その時蟲の知らせ

が届く。

「ここから、東で怪か。近いな行ってみるか」

桐生は道を東に折れまっすぐに歩き出す。

「ふう、さて、次はどんな怪が出るのやら」

振り返ることなく桐生は東に歩いていった。

\*\*\*\*\*

薄暗い部屋の中に二人の女がいた。一人は、薄暗い部屋の中でも日の中にあるような輝きを放つ金砂の髪と、エメラルドのように澄んだ緑色の瞳をした、高貴な雰囲気のある女性。ゆったりとした黒のドレスを着ている。もう一人は、質素で飾り気のないエプロンドレス、俗に言うメイド服を着た、闇に溶けそうな黒髪のメイドがいた。

金髪の女にメイドが報告をしている。

「本当ですわね？」

「はい、一名のみ見つけました」

抑揚のない、機械的で事務的な声でメイドが言う。

「無名ではありますが彼以外は望めないかと」

「……………仕方ありませんわね。文を出しなさい。列車のチケットと一緒に送れば間に合はずですわ」

金髪の女が悔しそうに爪を噛みながら言う。



「……本来なら事前に会って腕を確かめたいところですけど、仕方ありませんわね」

「噂が本当なら問題ないかと思いますが」

「噂は所詮噂ですわ。とりあえずチケツトと文、よろしく願いしますわ」

「お任せ下さいお嬢様」

メイドは頭を下げて部屋を出て行く。

「私にはもう、これしかないんですわ……………」

金髪の女の咳きは闇に呑み込まれ消えていった。

## 伍

異邦人の町長崎。鎖国の時代より唯一外国との交流のあった町。そのためこの町は、日本でありながら日本ではなくなっている。

長崎は洋の文化と和の文化、石造りと木造りが混ざり合い独特の雰囲気を作り出している町である。

異邦人も他の町よりも多く日本の町と言うよりは、まさに異国の町のように錯覚してしまう。

銀と桜は駅で列車を降り、そんな長崎の町に降りたつたのであった。

「うわ、すごいです！ 石造りの建物がいっぱいです！！」

桜が石造りの町並みを見て歓声をあげている。子供のようにキョロキョロとせわしなく周りを見ている。

銀はそんな桜に嘆息しながら言う。いくらなんでも、そこまで、子供みたいにはしゃがなくてもと思う。それでは、まるで、田舎者だ。現に、数人はそう思っていることだろう。

「そんなにはしゃぐな危ないぞ」

「あ、すみません。でもでも凄いですよ！」

「観光じゃないんだ行くぞ」

はしゃぐ桜を置いて銀は駅を出て行く。

「あ、待ってくださいよ〜！」

慌てて桜も銀を追いかけて走る。

なぜ、銀と桜が長崎に来ているのかと言うとそれは三日前に遡る。

・  
・  
・  
三日前、銀が適当に刀を打っていると桜が文を持って入ってきた。

「銀さん、見てください、手紙が来てますよ」

「ん？ どれだ？」

「これですこれ」

桜が銀に文を渡す。文の封には千宮の家紋が描かれていた。嚴重に封がされた文。それだけで、かなり重要なことが書かれているのではないかと思わせる。

「これは……」

銀が文の封を開ける。そこには仕事の依頼が書いてあった。それに列車のチケットも入っている。

「仕事の依頼だな」

文の内容を要約すればこんな感じだ。私は千宮椿<sup>せんのみやつばき</sup>。あなたに依頼したいことがあります。詳しくは長崎へ来てから、チケットはそちらに同封いたします。助手の方といらしてください。なんとも簡潔な内容だ。だが、それだけに、そこまで嚴重に封をした理由がわからない。

「詳しいことは本当にあつちに行ってからみたいだな」

「ということは旅行ですか!？」

旅行にいけると桜が喜んでいるが銀はあまり乗り気ではないよう

だ。

「お前な、まあ、今まで何もないところを見ると追っ手は来てないのか、ほかに何かあるのかだが、一応追われる立場なんだぞ」

「でもでも、お仕事ですよ！！」

「そうなんだが、何か嫌な予感がするんだよな。千宮家なら俺なんかに頼まなくても、ほかに頼む鍛冶師はたくさんいるはずなんだが」

千宮家、日本開国後外国との交易商売で成り上がった貴族。現在長崎のほとんどの土地を持っている。現当主は98歳と高齢で次の当主を決めるための勝負が近々行われるという噂だ。おそらくはそれに関係したことなのだろうと、中りをつける。

「どうも、怪しいな」

「とにかく行ってみましようよ」

「……はあ、わかったよ」

こうして銀と桜は長崎へと向かうことになったのであった。

・  
・  
・

銀と桜は駅を出た。

「さて、これからどうするのかな」

「お待ちしております」

黒髪で質素なメイド服を身に纏ったメイドが銀と桜を呼び止めた。おそらく迎えだろうと思いい、話を聞く。

「お待ちしてありました。糸杉銀様ですね」

「そうだが、あんたは？」

「私はメイドの小夜子こよこと申します。お嬢様の命によりお迎えに上がりました。どうぞ、馬車を用意してあります」

桜は馬車に乗れるとはしやぎながら、銀はやっぱりかと納得したような顔でメイドの小夜子について行く。

馬車は一等の豪華な馬車であった。中には輝く金砂の髪とエメラルドのように澄んだ緑色の瞳の女　千宮椿が座っていた。

「どうぞお乗りなさいな」

銀と桜は椿の対面に座る。それと同時に馬車はゆっくりと発進した。

「はじめまして私が千宮椿ちのみやつばきですわ」

「糸杉銀」

「春夏秋冬桜です」

挨拶もそこそこに椿が本題に入る。

「それでは本題に入らせていただきますわ。あなたは優秀な鍛冶師と噂で聞きましたわ」

「まあ、一応は」

噂はどうか知らないが、鍛冶の腕だけはかなり高い。それだけは銀が誇れる唯一のことだった。

「今、千宮家では当主争いが行われていますわ。あの男が出した当主を継ぐための条件は、あの男が所有する鉱石を鍛えること」

「なるほどね、だが、ならなぜ俺を呼んだ。無名の俺なんかを」

そんな大事なことなら、本来なら無名の銀などより名の知れた鍛冶師を雇うはずである。だが、椿は銀を雇うしかなかった。

「この目と髪ですわ。わかつている通り私には半分異邦人の血が流れていますわ。しかも卑しい身分の。あの男はそれが気に入らないらしくて、私は嫌われ、更に親族が他の候補に味方してますの。有力な鍛冶師は全て雇われた。そのせいで私が鍛冶師を雇うには無名の鍛冶師でしか無理でしたの」

椿は憎々しく自身の髪を見る。美しい金紗の髪を。

「なるほどな」

「私は全員を見返すつもりですわ。私を馬鹿にした他の兄弟姉妹を、あの男を」

眉間にしわをよせ、瞳に憎しみを浮かべ椿は言い放った。

「もったいないな」

銀が言う。

「何がですの」

「いや、そんなに綺麗な髪と目してんのに、そんな顔してるからさ。もったいないと思ったただけだ。せっかくの綺麗で可愛い顔が台無しだぞ」

臆面もなく言い切った銀。それからの変化はめざましかった。椿は茹でタコのように真っ赤になり、動揺する。もし、小夜子が見て

いたなら、飛び上がって驚くほどだ。

「な！？ なななな！？ あ、あなたは、な、何をいきなり何を言ってますの！？」

「そ、そうです！？ 何言ってるんですかいきなり！！」

「いや、正直な感想？」

二人の反応に疑問を浮かべながらも答えた銀。それがまた動揺と混乱を誘う。

「あ、あなた、もう私わたくしの前で先程のようなことを申すのを禁止いたしますわ！！」

「まあ、そう言うならわかったが………で、その鉱石ってのはなんなんだ？」

樁が落ち着いた所で銀は本題に戻る。

「知りませんわ。ただ、澄んだ銀色ってことくらいしか」

「おいおい、それでどうするんだよ」

「当日に発表されますわ。つまり、その時に使える鍛冶師を選ぶのも試験のうちなのですわ」

銀は呆れたような顔をする。だが、頭の中では考えが激流のように荒れ狂っていた。

(試験に使われる位の鉱石だ、鉄とか銅とかありふれたものではないはず)

そんなものなら並の鍛冶師でも鍛えることは出来るだろう。だが、樁はそんなことはせず、わざわざ銀を呼んだのだ。腕がいいと噂さ

れる銀に期待して。それだけで、困難なものだと予想できる。

( なら、恐らくは並の鍛冶師では鍛えるのが不可能と予想されそうなもの。誰にも鍛えることが出来ないもの、それに澄んだ銀色……… )

銀にはそれに心当たりが一つだけあった。ごく最近扱った代物。並や恐らくはどんなに腕がよくても、資格がなければ鍛えることが出来ない鉱石、それは絆鋼。資格無に鍛えることはできない鉱石。

( だとしたら色々とまずいかもしれないな。さっきの話を聞く限り、この女は俺がいくら言っても退かないだろう。さて、どうするか )

顎に手を当て考える銀。その様子に気がついた椿が、何を考えているか聞いた。

「何を考えてますの」

「ちよつとな……… 良い話と悪い話があるがどつちから聞く」

「では、良い話から」

「恐らく条件の鉱石は鍛えることが出来る」

鉱石が絆鋼なら銀になら鍛えることが出来る。もし、その他のものでも鍛えられないほどのものではないだろう。おごりでもなく事実だ。

「それは良い話ですわね。では、悪い話は？」

「悪い話は、まあ、これも仮定の話だが、その鉱石が俺の予想通りのものだとしたら、恐らくただじゃ済まない」

銀にしたら家が全壊した。その上幕府に追われるような立場にい



るのだ。それ以上のことだつて容易にありえることだ。覚悟がなければ到底耐え切れるものではない。

「具体的にはどうなんですか？」

「幕府、果ては將軍家への反逆」

「反……逆……？」

「そうだ、おそらくあなたの叔父が持っているのは絆鋼だ。簡単には鍛えることが出来ない鉱石だからな。澄んだ銀色つて特徴も一致している。どこで手に入れたか知らないが幕府にばれたら一発で終わりだぞ」

黙りこむ椿。

「それでもいいのか？」

覚悟があるのか聞く銀。覚悟がなければそれまでだったということだ。銀が依頼をする気はなくなり、すぐに出て行くだろう。

「……それでも……それでも私はあなたに依頼しますわ」

決意を湛えた瞳で椿は言った。

「そうか、まあ、わかった。覚悟があるならそれでいい。覚悟もなしにやられたんじゃないからな。じゃあ、無事当主になったら俺のことかばってくれ、千宮家クラスだと幕府もそう手は出せないだろうからな」

「わかりましたわ。成功したらなば報酬と共にあなたたちの安全は保障しますわ」

「助かる」

しばらくして馬車が止まり馬車の扉が開く。

「お嬢様着きました」

小夜子が椿をおろす。そのあとについて銀と桜も下りる。到着したのは屋敷であった。おそらくは本邸ではなく千宮が所有しているうちのひとつであろう。椿の住んでいる屋敷である。少しこざっぱりとしている。中に人の気配はない。

小夜子に案内され屋敷へと入る。外から見たときと同じく人の気配がない。不思議に思い椿に銀が聞く。

「ああ、この屋敷には私わたくしと小夜子の二人しかいませんわ  
「なぜだ？」

「あまり人が多いのは好きではありませんの」  
「そうか」

本来の理由は誰もここで働きたがらないからだ。千宮本家から疎まれていた椿に雇われているのはあまり良いとは言えないからだ。例外は小夜子だけであった。それも、例外中の例外だったが。

「それでは、ごゆっくりおくつろぎください。夕食には呼びに来ます」

部屋に案内され椿と小夜子が出て行った。銀は備え付けのソファに座る。

ノックの音がしたので入室を許可する。桜が入ってきた。

「あの、いいんですか？」

「何がだ？」

「依頼受けちゃって……ただでさえ私のせいで……」

「いいんだよ。どの道、一回やるのが二回やるのが変わらない。それに……千宮にコネ作つとくのはいいと思つてな」

桜はまだ納得してないような顔だがこれ以上の答えが聞けないことを悟つたのか、それ以上聞くことはしなかった。

「それにしても凄いいお屋敷ですね。洋室なんて私初めてです」

さつきまでの納得のいかない顔をしていた桜は一変して嬉しそうにはしゃぎだす。やはり、田舎者か、子供にしか見えない。相変わらず銀は、記憶の中のある人と、桜がかぶる。それとともに過去の記憶が掘り起こされる。

「俺は昔あるな」

あの人と、洋館に泊まつた記憶。遠い遠い、昔のお話。二度と戻ることはないエピソード。

「そうなんですか？」

「ああ」

しかし、銀はそのことを話す気はないらしく何も言わない。桜からも、無理に聞こうとは思わないのか、追求はなかった。

銀はソファから立ち上がり窓際に歩いていく。そこからは長崎の町並みが見える。桜もそばに来る。一緒に長崎の街並みを見る。

「何度見ても面白い町並みですよね」

桜が言う。窓から見える長崎の町並みは確かに面白いと言える。様々な文化が入り混じつた町並みは見ていて飽きさせない。こんな

町には他にはない。

「そうだな、さてとじゃあ、俺は少し出てくるからあいつが来たら言っといてくれ」

「なら、私も一人は危ないですし」

「いい、あまりお前が来るような所じゃないからな。頼んだぞ」

「そうですか。わかりました」

屋敷を出た銀は裏通りへと向かって行った。入り組んだ裏通りを迷いなく進む銀。

着いたのは行き止まりだった。一本道の終わりだ。家の入り口などはない。何も無い。では銀は何をしに来たのだろうか。

「確かここだったはず……………あつた」

銀が地面を探る。そこには地面に偽造されているが取っ手がある。銀はそれを持ち引く。見る見るうちに地下への階段が出現した。

銀はそこに入り、入り口を閉める。数分階段を下りていくと扉がある。銀はそこも同じように開けて入る。扉の中の部屋は人形やオルゴール、そして棺が置かれた悪趣味かつ不気味な部屋だ。

「久しぶりだな人形師<sup>マリオネッター</sup>」

「やあ、久しぶりだね」

黒い帽子黒い服に白髪で隠れた目、ニタッと笑った口。明らかに怪しい男がこの主。ここを知っている人間からは人形師と呼ばれている。本当の名前は知らない。それで人形師<sup>マリオネッター</sup>はここでひっそりと店をやっている。人形職人らしいのだがオルゴールや時計なども作れるらしい。

だが、それはあくまで副業というか、趣味で人形師<sup>マリオネッター</sup>の本業は情報

屋である。

「それで何しに来たんだい？ ここには人形しかないんだけど」

銀マリオネッターに人形師が聞く。

「何、ただ葬式の手配をしたくてね」

「そう、ここにある棺ならどれでも」

「俺が探してるのは特別な棺さ金の棺だ」

「そんな棺はないよ。あつとしてもそんなのは実用的じゃないよ」

「それを決めるのは俺だ」

流れるような問答。

「なるほど、本業か………………。ヒビ、何が聞きたいんだい？」

先程の流れるような問答は合い言葉。この場所と合い言葉がなければ人形師マリオネッターから情報を得ることは出来ない。

「千宮のことだ」

「ヒビ、やっぱりそう来ると思ってたよ」

人形師マリオネッターはニヤリと全てを見透かしたように笑った。

## 陸

マリオネッター  
人形師の飄々とした様を見ても銀はいつも通りか、と思うだけであった。逆にイライラが募っていきそうだった。さっさと終わらせるため、銀は本題をきりだす。

「俺が何でここに来たか知っているな」

答えはわかりきっているが一応確認の為に聞く銀。マリオネッター  
人形師は笑って答えた。やはり、嫌味な笑みだ。人のことを馬鹿にした笑み。

「当たり前だよ。ワタシは何でも知っている。千宮当主戦のこともねえ〜ヒヒ」

人をあざ笑うかのように不気味な笑いを時折漏らす人形師。マリオネッター  
銀は意に返さず人形師に教えるように言う。

「いいよ、君には結構世話になったからね。ヒヒ」

「なら、早く教える」

「わかつてるよ」

マリオネッター  
人形師はガサゴソとカウンターの下を探っていく。しばらく時間がかかりそうなので銀は適当に周りを見ることにした。

相変わらず悪趣味で不気味、銀の感じたことはこれ。銀が前に来たときからまったく変わってない。本当に悪趣味だ。人間と間違えそうになる程精巧な人形、たくさんのオルゴールとその部品、何が入っているかわからない棺。これを悪趣味と言わず何と言うのか。

比較的まともなオルゴールを銀が見ていると人形師がマリオネッターカウンターから紙の束を取り出した。

「あつたあつた」

「少しは片付けたらどうだ」

「これでも片付いてるほうだよ。ヒヒッ」

マリオネッター

人形師が紙の束から三枚抜いて銀に渡した。そこに書いてあつたことを要約するとこうだ。

千宮家当主せんのみやかげよし千宮景義に関する情報。千宮景義。序列第一位。98歳という高齢ながらいまだ現役。千宮家を更に栄えさせた功労者。非常に厳格な人物。異邦人を見下している。その為千宮椿に対する扱いは酷い。数十年前、山の中で高純度の絆鋼を発見する。

千宮当主戦。千宮景義により執り行われる次期当主を決めるための勝負のこと。勝負内容は千宮景義の所持していた絆鋼を鍛えること。鍛えた者が当主となる。開催地は出島。開催日は10月4日〜5日。

千宮家親族についての情報。千宮当主戦に参加する親族の顔写真と名前、情報が書かれていた。銀はそれを目的の情報まで流し読みした。特に知りたい情報はないためだ。そして目的の情報を見つけた。千宮椿に関する情報だ。

千宮椿。異邦人とのハーフ。序列第八位。父親は千宮光世せんのみやみつよ。序列第四位。母親は不明。千宮光世は十年前に、一族の者により殺されている。その髪と瞳により千宮景義の不評を買い一族全員から疎まれている。両親の敵討ちと一族を見返すため当主の座を欲する。

「なるほどな」

「ヒッヒッヒッ、どうだい？」

「よくわかったが……お前の個人的な感想を書くのをやめろ」

上記していないが、実際には所々人形師マリオネッターの個人的で変態的な感想が載っているため情報は正確なのに不快になる。しかも、この感想

はまったく役に立たないため書面の無駄なのだ。これをいちいち読んでいた日は暮れることもあるという。

「いいじゃないか、君には迷惑はかけていないよ」

「不快だ、それに無駄だろこれは」

「この世界に無駄なことはないよ。あるのは必要なことだけさ。どんなに無駄なことに見えてもねえ、ヒツヒツ」

不愉快極まりない笑いで言う人形師。マリオネッター 銀は何か言うのを諦めて書類を人形師に返す。もらつていくわけにもいかないからだ。

人形師はそれを受け取ると紙の束に戻し、カウンターの下に戻した。笑みを浮かべて表情は崩れない。

「知りたいことはわかった。じゃあな」

「ヒヒ、もう帰るのかい？ せつかく来たんだからお茶でも飲んで行ったらどうだい？」

マリオネッター  
人形師がお茶のようなものが入ったビーカーを振る。当然断る。

「そんな何が入ってるかわからないもん飲むわけないだろ」

何が入っているのかわかったものではない。下手をすれば毒でも入っていそうだ。入っていなくても危険なことには変わりない。

「話くらいはいいじゃないか、今度も君とまた無事に会えるとは限らないんだから。ねえ」

突如部屋中のオルゴールと壁にかけられた時計が鳴りだした。人形師の言葉はオルゴールと時計の音でかき消された。マリ

だが、銀には人形師が何を言ったのかはつきりとわかっていった。



銀の表情が険しくなる。

「その名で呼ぶな。俺はそんなものじゃない」

「違うないさ。君はいつだってそれなんだから。逃げることは出来ないんだから」

「……………」

「……………」

銀が人形師を睨む。人形師はまったく気にせず黙っている。

「……………まったく……………これ、貰っていくぞ」

銀はオルゴールを一つ取り金を人形師に投げ渡し立ち去った。

銀が立ち去った後、人形師は笑う。

「ヒツヒツヒツ、君は面白いね〜やっぱり。まあ、これから先のことを考えるとねえ〜」

人形師は置いてあった人形を撫で回す。とても悪趣味で気味が悪い。

「覇星に集うは絆星九つ、さあ、どうなるかな〜ヒツヒツヒツ」

人形師の笑いが響いた。

\*\*\*\*\*

銀は人形師の所から真つ直ぐ椿の屋敷に戻って来た。あまり屋敷を離れていると椿が何か言うと思ったからだ。椿が言わなくても小夜子は言うだろう。下手をすれば桜も。

「糸杉様どちらに行っていらしたのですか」

予想通り小夜子に呼び止められる。屋敷の門をくぐった所だ。ここで待ち伏せしていたような節がある。事実、小夜子は銀を待ち伏せしてた。どこかに出かける銀が何をしていたのか、確認するためである。

「待ち伏せか？ 安心しろ敵には情報とか漏らす気はないからな」

「……そうですか。ですが、お嬢様を裏切るようなことはしないで下さい」

「わかってるよ」

銀はそう言い自身にあてがわれた部屋に戻る。そこにはまだ桜がいた。

「あ、お帰りなさい！」

「お前何でここにいるんだよ」

「何となくです」

そう言っって銀の顔をじっと見つめる桜。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

「銀さん……何か、ありました？」

「っ！？ 何でそう思う」

驚きを一瞬で隠し銀は桜に聞いた。外見的にはいつもと変わらな  
いはずだ。動揺も一瞬だったから、気づかれていないはず。

「いえ、何かいつもとは表情が違うような気がしたので」

「……………気のせいだ」

「そうですね、それなら良いです」

「そうだ、土産があつたな」

銀が、懐から人形師の<sup>マリオネット</sup>ところから、買ってきたオルゴールを、取り出した。それを桜に渡す。

「なんですか？」

しかし、桜はそれが何か、知らないようだった。なんともあげがいがない。

「これはオルゴールって言ってな、このつまみを回したら音楽が流れるんだ」

「へ」

桜がオルゴールをいろんな角度から見ている。本当に見たことがなかったようである。元が異国のものなので見たことがないのは、当たり前かもしれない。

「ほら」

つまみを巻いてオルゴールを鳴らす。流れてきた曲は、静かであったりとした曲。澄んだ音色が、とても心地よい曲だった。

「綺麗な曲……………」

「だろ、お前何も私物持つてなかったからな、やるよ」

破魔もいまだ金を払い切れてないため、銀のものであるし、着ているものは、銀から桜のものと言われているが、桜は借り物だと思

っている。そのため、私物はないに等しい。

「いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます！！」

喜んでくれてなによりだ。渡し終えた時、ちょうど小夜子が入ってきた。

「お食事の準備が出来ましたのでお呼びに参りました」

「ああ、ありがとう」

小夜子は一礼して去っていった。

「食事ですね。一体どんなもの、何でしょう！」

桜がやはりはしゃぐ。銀は、田舎から江戸にでて、初めてのことで、だらけではしゃぐ田舎者を見ている感覚だった。

「まあ、どんなのかは知らないが、洋食ならマナーがいるな」

「マナー？」

案の定桜は知らないらしく、きよとんとする。そんな、桜に銀が説明する。

「こういう、所謂上流階級の食事にはマナーがあるんだ。簡単に言えば、食事をするときの決まり事だ」

「へ〜」

まあ、千宮と云えど、銀たちを交えた個人邸宅の食事だ、さすが

にガチガチに厳しいということはないだろうが、最低限のマナーくらいは知っていた方が良い。

一般教養は知っていていて損はない。例え、使う機会が少なくても、いざという時に知らないよりはいい。

「お前知らないよな」

「はい！」

なぜか自信満々で言う桜。自信満々で言うことではない。

「自信満々で言うなよ。とりあえず、最低限必要なこと教えるから、覚えろ」

「頑張ります！」

銀は桜に必要な最低限のテーブルマナーを教える。桜がきちんと覚えるか、かなり怪しいが。

・  
・  
・

食堂もやはり広がった。真っ白でシミ一つない、テーブルクロスのかかった、長テーブルが中央に置かれ、均等に椅子が配置してある。壁には絵画がかけられていた。

食堂に入ると、既に椿は席についていた。銀たちを見て、待ちくたびれたと、無言で伝えてくる。

「待たせたな」

銀と桜は指定された席に座る。

「遅いですわよ。一体何をしていたのかしら」

「いろいろな」

椿が遅れた理由を聞いてきたが、銀ははぐらかした。桜にマナーを教えていて遅れたなど、椿は認めないとわかっていたからだ。余計なことは言わないに限る。

「次はないですわよ」

「わかってるよ」

「それでは、食事を始めましょう」

椿が指示を出したので、小夜子が料理を運んできた。どこか敵かな雰囲気のなか、食事が始まった。

・  
・  
・

無事、何事もなく食事を終え、銀と椿は談話室に来ていた。千宮当主戦の段取りを決めるためだ。

ちなみに桜は満腹になったので、眠くなり部屋に戻って行った。まるで子供だ。ここに来てからの行動全てが。

「では、千宮当主戦について説明しますわ」

「ああ」

椿が千宮当主戦について説明した。それは、マリオネッター人形師から聞いたことと、違いはなかった。マリオネッター人形師の情報は、正確だったようだ。

「何か質問は？」

「いや、ない。しかし、かなり不利だぞ。大丈夫か？」

「あなた次第ですわ。課題の鉱石が、あなたの言う絆鋼なら、あなた以外には鍛えることが出来ない。だから、あなたさえしっかりす

ればいいのですわ」  
「なら、大丈夫だ」

銀は自信を持って答えた。それはおごりでもなんでもなく、絆鋼を鍛えられる人間がこの長崎には銀ひとりだけであるからだ。それはマリオネット人形師の情報に書いてあった。最初から勝負は決まっている。だが、問題なのは、それ以外のところだ。

「大した自信ですわね。本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だって、少しは信用しろって　伏せる！」

「なに　きゃあ！！」

いきなり天井が崩れる。銀は椿を突き飛ばす。襲撃だ。

「何かあったんですか！？」

桜が音に気がついて飛び起きてきた。その表情はいつもとは違う。剣神の半覚醒状態だ。

「抜け！！」

「はい！！」

桜が銀の命令に従い、破魔を抜いた。雰囲気が変わり、剣神が現れる。

煙が晴れると黒服の襲撃者たちがいた。忍だ。恐らく誰かに雇われた者たちだろう。

忍は音もたてず、入ってきた天井の穴から外へと、飛び出して行った。剣神もそれを追う。

「行ったか」

「あ、あなた、今何をしているのかわかっているんですのー!!」

顔を真っ赤にして椿が言う。それもそのはず、椿は今、銀に押し倒されているような体勢なのだ。赤くもなる。かなり密着もしているのだ。男にここまでされてことのない椿の動揺は一人だろ。

「は？　つと、悪い、咄嗟だったからな」

「だとしても、もう少しやり方と言うものが、あるでしょうに！早く退きなさい!!」

「待て！」

「何を　むぐ!?!」

銀が椿の口を手で塞ぎ、更に体を密着させる。椿は半狂乱だが、銀は無視して、辺りを探る。

忍が一人近付いて来ていたが、二人は瓦礫の影にいるため、忍には見えてない。

(早く終わらせてくれよ剣神)

\*\*\*\*\*

「はっ！」

剣神は投擲されるクナイを切り裂いていく。数から見て襲撃者の殆どが、剣神に引きつけられたようだ。

クナイを投擲する忍達に剣神は疾駆する。忍は動き回るが、到底剣神の速さに、ついて来れる者などいなかった。

剣神は無慈悲に破魔を振るう。その刃は、容易く忍の身体を切り刻んで行く。血の雨が降る。だが、剣神は血の雨に濡れることはない。



「ば、化物め!!」

忍の一人が叫び、それを遺言に死んでいく。化物、劍神には言われ慣れた言葉であった。だから、それがどうした、と無慈悲に劍神は殺戮を続ける。

「お前で最後だ」

残りは、最後に屋敷から出て来た忍だけであった。

「……………」

忍は、それでも黙って無防備に立っていた。まるで、人が生きるのに必要な何かが、欠けてしまったかのような。

劍神はいかぶしむ。空気が変わっていた。異質な、異形の気配が場を支配していた。

「xxxxxx」

忍が何かを呟いた。それはおよそ、この国の言語ではなかった。

忍の身体に変化が起きる。身体が内側から膨れ上がり、変化していく。そして、それは人とは呼べぬものに変質した。

## 陸（後書き）

第六話です。今のところ私のほとんどの小説レギュラーな人形師のマリオネッター登場です。この人にも実は秘密があるんです。

それでは次回もよろしくお願いします。



「なるほど、完全に墮人おちびとに墮ちたようだな。これじゃ元には戻せない。まあ、戻す方法は知らないし、する気もない。ただ斬るだけだ」  
触手をさけながら墮人おちびとと距離をとっていく。そして、ある程度の距離で立ち止まる。

『キシヤアアアア！』  
「ふう〜」

剣神が息を吐き、止める。そして、破魔を顔の前で横向きにして構えた。鏡のように磨かれた刀身には剣神自身と墮人おちびとが写っている。ゆっくりとした動作で、剣神が破魔で円を描く。破魔が描いた円の軌跡は空中に残る。それは鏡のように墮人おちびとを写している。墮人おちびとの動きが波紋になり鏡の表面を揺らす。

「無幻流奥義明鏡止水」

波紋が止まる、そして、写しこまれた墮人おちびとも止まる。まるで、時間が止まったかのように身動きひとつしない。先ほどまであげていた、耳障りな咆哮もあげない。

「壊鏡」

鏡にひびがはいり、そして、砕け散った。鏡が砕け散ると、墮人おちびとにひびがはいる。それは、鏡に写ったひびと同じだった。ひびが全身に回り、墮人おちびとがバラバラに砕け散った。

無幻流奥義明鏡止水、刀で空中に描いた鏡に敵を写し、その動きの波紋を止めることで敵の動きを完全に封じる技。使い手の心が真に研ぎ澄まされた状態でなければ、使うことが出来ない。また、鏡

に敵を映した状態で鏡を割ると、敵も砕け散る。

「オレを追ってきたのはこれで、終わりだな。さて、まだ屋敷の中にもいるな。急ぐか」

剣神が羽織をはためかせ、大穴のあいた屋敷へと走る。剣神は跳躍し、あいた穴から屋敷へと入り、音もなく着地する。

間髪入れず走り出す。閉まっている扉を切り裂いて通り、長い廊下を走る。

剣神に気がついた忍がやって来たが、すれ違い様に斬り伏せていく。忍如きでは、剣神を止めることなど出来はしない。

\*\*\*

天井に開いた大穴から、剣神が飛び込んで来て、すぐに部屋を出て行ったのを見た銀は、ほっとした。少なくとも外の危険は去ったからだ。

（大丈夫そうだな）

危険がなくなった。剣神ならば、まず負けることは有り得ない。ありえるとすれば、神話の神と戦うときくらいだろう。それも、あ  
るはずはないが。

「んー！ んー！！」

さつきから銀に押し倒されて、口を塞がれている椿。恐らく離せ  
と言っているようだ。すぐに、銀が口を塞いでいる手をどける。

「あなたは自分が何をしているのかわかっているんですの！！」

羞恥で顔を真っ赤にした椿が言う。かなり怒っている。それは、もう火山のように。

「悪い悪い。敵が来たんだ許してくれ」

「それなら誠意を見せなさい！ こんな体勢で謝られても、誠意を感じれませんわー!!」

「確かに」

銀は言われた通り立ち上がった。椿が体を起こす。

「ほら」

銀は椿に手を差し出した。それをいかぶしげに見る椿。

「何ですか?」

「お手をどうぞ」

「……………あなたがやると、まったく似合いませんわね」

そう言いながら椿は銀の手を取る。

「はいはい、わかってるよ」

椿を立たせ銀は周囲の様子をうかがう。恐ろしいほど静かだ。どうやら、全員剣神が倒してしまったようだ。

「さてと、ちょうど戻ってきたな」

丁度よく剣神が入ってきた。

「どうだった？」

「何も無い、手ごたえのない相手だった」

「そうか、それならいい」

そこで、椿があることに気がついた。人が一人いない。いるべきはずの人間がいない。

「小夜子は？ この騒ぎなら、出て来てもおかしくないはずなのに」

確かに、あれほどの大騒ぎをしても小夜子は出てこなかった。小夜子なら、何か物音がしただけでも椿の下に来るだろう。これなくとも、騒ぎが収まれば出て来るはずだ。

「確かに、おかしいな。剣神、小夜子さんを見なかったか？」

「……………見たぞ」

そう言う剣神の表情に、影があることに、銀は気がついた。可能性ならたくさんあった。裏切り、誘拐、事故、死亡。そのどれも有り得る話だった。そして、そのひとつが当たっていることに銀は気がついた。

「どこ！ それはどこですのー！！」

「……………下の厨房だ」

聞いた瞬間椿が部屋を飛び出していった。それを確認して、銀は剣神に聞く。

「……………生きていたのか？」

「辛うじてな」

「そうか……………」

「……………じゃあ、オレは戻る」

剣神が破魔の血を払い、鞘に収める。その瞬間、剣神から桜に戻り、桜は、操り人形の糸が切れたかのように、倒れる。それを銀が受け止めた。

「すゝ、すゝ」

桜はかわいらしい寝息をたてていた。寝ているだけのようだ。ここに置いていくワケにもいかないので、銀は桜を背負い。椿を追って部屋を出て行く。階段を降りて厨房へ。

そこには、血塗れで倒れ付す小夜子が居た。

「小夜子！！」

「お……………じよ……………う……………さま……………」

辛うじてだが息があるようだ。だが、それも長くはないだろう。厨房を赤く染める血が、それを物語っていた。治療するにも血を流しすぎた。

「もうし……………わけ……………ありま……………せん……………」

「喋らないで！ 今、医者を呼びますわ！！ あなた、何をしていますのー！！」

椿が銀に言うが、銀は黙って首を横に振る。今更、医者を呼んだところで、間に合うはずがない。無駄だ。銀にはそれがよくわかった。恐らく椿にもわかつているだろう。ただ、納得出来ないだけだ。

「あなたー！！」

「いいん……………です……………私はもう……………助かり……………ません」



「小夜子！ そんなこと言わないで！ 大丈夫だから！！」

小夜子が首を振った。それだけでも、苦しそうだ。一秒たつことに、命が磨り減り消えていく。

「い……いんです……おじょう……さま……に……看取られ……るなら……」

「わたくし私は嫌ですわ！！」

しかし、無情にも小夜子の血が流れるのは止まらない。だんだんと死の影が小夜子にかかる。死神の足音が忍び寄る。

「お……じょう……さま……どうか……せん……の……みやのしあ……  
……わせで……は……なく……あなた……のし……あわせを……つ……  
か……ん……で……く……だ……さい」

そして小夜子は焦点の合わない目で、銀を見る。銀は聞き逃さなように、しゃがみこむ。途切れ途切れに小夜子は言う。

「いと……すぎ……さ……ま……ま……どうか……どう……か……おじょう……  
う……さ……まを……よろ……しく……おね……がい……しま……  
す……」

「わかった、出来るだけのことはする。約束する」

小夜子が目を閉じて、満足そうな顔をする。これから、死ぬ人間とは思えないほど、晴れ晴れとした表情だった。

「ああ……これで……も……う……こ……ろ……の……り……  
は……」

小夜子の言葉が途切れ、体から力が抜ける。

「小夜子？」

椿が小夜子を揺さぶるが、反応はない。ピクリとも動かない。

「ちょっと、何、勝手に眠っているんですの？ 小夜子、起きなさいよ」

更に椿が小夜子を揺さぶり、声をかける。だが、どんなにやっても、小夜子が反応することはない。

銀は顔を背けた。その光景が、あまりにも、痛々しかったからだ。痛々しく、酷く悲しく、残酷。

「起きろって、言っているのが聞こえませんか！ 仕事がなくて、途方に暮れていたあなたを、救ったのは誰だと思ってますの！！  
どんな命令にも従うと、言ったのは、どこの誰ですの！！！ 何とか言いなさいよ！！！！」

「……………」

小夜子が返事をすることも、動くこともない。完全に死んでいる。椿は完全に心からわかってしまった。

「何か、何か言っつてよ。何でもいいから、お願いだから、何か言っつてよ。小夜子……………」

沈黙。小夜子何か言うわけはなく、銀も何も言わない。

「……………」

椿の頬に涙が流れる。

「お願いよ……たった一言で……たった一言でいいから……小夜子……くっ……うわあああ！」

遂に、せき止められていた感情が溢れ出した。椿が小夜子にすがりつき、大粒の涙を流す。そこにいたのは、強気な名家のお嬢様ではなく、大切な人が死んだら涙を流す、ただのか弱い少女だった。一目も憚らず、椿は泣いた。

銀は静か厨房をあとにした。椿が泣いているのを人に見られたくないだろうと、思った銀の配慮だ。部屋に桜を寝かせ、廊下にでる。

「くそ！」

壁を殴りつけ、額を壁につける。そこに、人を不快にさせる笑いが響く。

「ヒッヒッヒッ」

そこには、壁に体を預けるようにして立つ、マリオネッター人形師がいた。にやりと気味の悪い表情を浮かべながら、両手を互いの袖に入れている。マリオネッター人形師は嫌でも、人を不快にさせる。

マリオネッター「人形師が、こんな所で何をしている」

銀はマリオネッター人形師に向き直って聞いた。どうせ、ロクなことじゃない。

「ヒッヒッヒッ、気になったからね、見に来たんだよ」

ニヤニヤしながら言うマリオネッター人形師。それが、銀の神経を逆撫でする。

「何をだ」

「わかってるくせに〜。それにしても、君は泣かないのかい〜？」

「黙れ」

銀が低い声で言う。だが、マリオネッター人形師は気にせず、話し続ける。お前には何も出来ない。そう語っているかのように。

「内心では、泣きだいくせに〜」

「黙れ！！」

銀の言葉が廊下に響いた。マリオネッター人形師も黙る。だが、顔は笑ったままだ。予想通りだといった風ですらある。

「ふむ、じゃあ、これだけは言うておこう。君はわかっているとと思うけど、これをやったのはね、千宮の誰かだよ」

「わかっている」

千宮当主戦に勝つための妨害。それは予想できたことだ。それで、何もなかったのは自分だ。誰かを攻めることは出来ない。

「わかっているさ……………」

「そうかい〜、じゃあ、ワタシはなんにも言わないよ〜。ワタシは意外にいそがしいからね〜。これから、守護にもあわないといけなからね〜。ヒッヒッヒ〜」

そう言つてマリオネッター人形師は、闇の中に消えていった。最後まで、嫌らしい笑い声が響いていた。

「……………」

銀は、しばらくの間、そこに立ち尽くしていた。このままここにいても仕方ない。銀は厨房へと向かった。椿は、泣きやんでいた。

「これから、どうするつもりだ、千宮椿……」  
「……………」

椿は黙って、ただぼおつと空中を見つめているだけだった。銀の言葉に反応を示さない。

「おい」  
「……………」

無反応。椿は小夜子が死んだことにより、完全に気力を失い、心が折れていた。

無理もない、椿と小夜子の絆はそれは強いものだったのだから。二人が出会ったのは、八年ほど前のことだ。その年は世界的に不況で、町に失業者が溢れていた。小夜子も、その中のひとりであった。

両親が既に他界し、親戚からは見捨てられた、小夜子に行くあてはなく、路地裏で倒れ、餓死するか瀬戸際であった。そんな時だ、小夜子が椿に出会ったのは。

その時は、外見はまだまだ子供であった椿だったが、親族の度重なるイジメや、母の死により、外見に合わず精神は成熟していた。そのため、椿はひとりで町中に来ていた。

椿は従者を探していたのだ。自分でも、嫌がらすに付き従っていく人間を。小夜子との出会いはまさに運命であった。

椿は倒れている小夜子に、何をしているのか聞いた。小夜子は失業したこと、親は死に、親戚には見捨てられたことを話した。

小夜子からすれば、それは単なる愚痴に過ぎなかった。だが、椿

は真摯に聞いた。その話は椿本人の事情に似ていたからだ。

椿は思った。この人なら自分に付き従ってくれるのではないかと。椿は、小夜子に自分のことを話した。

小夜子は、話を聞いて驚いた。それは、まだ幼かった少女には酷なことであつた。そして、それに押し潰されずに凜としている椿に、尊敬の念を抱いた。

小夜子は椿から、従者の話を聞くと、二つ返事で承諾した。自分が椿を支えよう、そう思ったからだ。

小夜子は無償の信頼を椿に寄せた。そんな小夜子を椿は信頼した。こうして、二人は、尊く強い絆を、作り上げていったのだ。そのため、小夜子が死んだことは、椿の心にポツカリと大穴を開けたのであつた。

「千宮椿！」

「……………」

銀は椿の肩を掴み、強引に、自分の方を向かせる。そして、腕を振った。

厨房にパァンと、乾いた音が響いた。銀が椿の頬を叩いていた。椿は驚きで目を見開いた。

「お前は何をしてるんだ！！」

銀は椿の情けなさに怒りを覚えていた。胸倉を掴んで引き寄せる。流石に乱暴だが、この情けない女にはちょうどいい。罪悪感も感じない。

「お前、小夜子の死を無駄にする気か！！ お前は何がしたかったんだ！！ 千宮の当主になるんじゃないのか！！」

「もつ……………どうでも……………いいですわ」

パン！　また、乾いた音が響く。再び、銀は椿の頬を叩いていた。

「目は覚めたか」

「……………」  
「これぐらいのことはいくらでも起こる。お前は、自分が当主になると決めた時から、覚悟していたはずだ。違うか」

「違わない。椿は全てを覚悟していた。どんなことをしても、必ず当主になると。覚悟したはずだった。」

「それなら、最後まで突き通せ！！　こんなところで立ち止まるな！！　それで、どうやって小夜子に顔向けするつもりだ！！！！」  
「っ！？」

「明日までに決める。明日の朝、答えを聞かせる。それ次第で俺は、ここから出て行く」

「銀は、振り返り厨房をあとにした。言うことだけ言って、立ち去った。」

「……………」

椿は黙っていた。だが、先ほどまでの死んだような目ではない。決意をたたえた瞳であった。

「小夜子、私は、やりますわよ……………」

翌朝、椿は、銀に決意したことを伝えた。銀はそれなら、最後までついていくと言った。そして、ひとまず、新たな拠点に向かうこ

と  
に  
な  
っ  
た。



## 捌

大衆向け食堂。日本の料理だけでなく、異国の料理などを安く食べられる庶民向けの食堂。利用する客は多い。

そこに、小柄な少年が入店してきた。茶髪で、額に赤い八チマキを巻いている。白いノースリーブのジャケット、その下には、赤い半袖とジーパンという、日本ではかなり珍しい格好をしている。腰には赤い短い棒を差している。

少年は窓際の席に座る。

「ご注文は？」

女性店員が注文を取りに来た。少年はメニューを見てから、言った。

「えっと、ご飯、赤飯、おこわ、玄米、麦飯、おにぎり、寿司、にぎり寿司、巻寿司、ちらし寿司、稻荷寿司、バツテラ、鯖寿司、なれずし、粥、雑炊、おじや、茶漬け、栗飯、深川飯、鯛飯、五目飯、松茸飯、山菜飯、芋飯、牛丼、鰻丼、天丼、カツ丼、親子丼、鉄火丼、木葉丼、卵かけご飯、麦とろ、冷汁、カツレツ、コロツケ、エビフライ、カレーライス、ハンバーグ、グラタン、ハヤシライス、スパゲティナポリタン、エスカロップ、トルコライス、シチュー、カキフライ、ムニエル、チキンカツ、牛カツ、ハムカツ、メンチカツ、ステーキ、ドリア、ピラフ、味噌汁、粕汁、すまし汁、けんちん汁、潮汁、鉄板焼き、もんじゃ焼き、お好み焼き、たこ焼き、あんぱん、クリームパン、コロネ、メロンパン、カレーパン、焼きそばパン、ラーメン、長崎ちゃんぽん、焼き餃子、野菜炒め、天津飯、麻婆豆腐、担担麺、回鍋肉、青椒肉絲、麻婆茄子、棒棒鶏、乾焼蝦仁、シュウマイ、北京ダック、あとは、プリン、ゼリー、ケーキ。

これくらいかな」

大量の料理を早口で注文した少年。これでは、店員が聞き取れないと思っただが、店員はなれていようで、きつちりと注文を全てとり終え、厨房へ伝えに戻っていた。これだけで、この少年が何度もここに来ていことがわかる。料理を待っている間、少年は鼻歌を歌っていた。そこに、目隠しをした、黒服の男がやってきて、テーブルを挟んで少年の前に座る。

「おい、幸村<sup>ゆきむら</sup>、またあんなに頼んだのか」

幸村、守護九人衆の一人で、九州担当。棒術を得意とし、軽業師のような身軽な動きで敵を翻弄する。小柄だが非常に大食漢で、食費だけで幕府を転覆させることすら出来ると噂される。性格は非常に子供っぽい。野性的な勘に優れ、すぐに本能で行動する。

目を隠した男が少年 幸村に言う。

「当たり前だろ、佐助<sup>さすけ</sup>」

目隠しをした男 佐助は呆れた顔をして幸村を見る。そして溜め息をはきながら、どうにかして暴飲暴食をやめさせられないかと思案するが、無理という、いつも通りの結論に達した。

佐助、日本一の忍。性格は冷静沈着。とある理由により目が見えないが、それを感じさせないほど、高い戦闘能力を持つ。また、高い知略を持つ。だが、もっばら、暴走する幸村を押さえるために使われる。九州守護幸村が一の家臣とされているが、本当の所、お目付け役。

「どうぞ、お持ちしました」

次々と注文した料理が運ばれてきた。見ているだけで、満腹になりそうなほどであった。とりあえず、佐助は満腹になった。

「いただきま〜す」

幸村が凄まじい勢いで食べ始めた。次々と料理を口へと運んでいく。その手の動きは、常人には視認すら不可能だった。それほどまでにすばやく食べる。

見る見るうちに、料理が皿の上から姿を消し、皿が積み上がっていく。一体、幸村の小柄な体のどこに、これほどの量の、料理が入るのだろうか。

「はあ」

見る見るうちに、減っていく料理を見ながら、佐助は溜め息をついた。相変わらずとは言え、体に悪いと思う佐助であった。

・  
・  
・

十五分後、テーブルの上には何もなくなっていた。幸村が全て食べたのだ。佐助は見ているだけだった。

「ふう〜、ごちそうさま〜。うまかった〜」

「はあ、全くお前と言う奴は、呆れてものが言えん」

「タハハハ、悪い悪い。で、佐助が来たってことは、何かあったの？」

「ああ」

佐助は長崎で行われる、千宮当主戦について話した。

「九州守護として、その当主戦、視察する必要がある」  
「ふ〜ん〜、じゃあ、アレ絡みってわけか」

アレとはもちろん、絆鋼だ。絆鋼が絡む事件は、全て守護に渡るようになっていく。絆鋼に対抗できるのは絆鋼だけだからだ。それに、守護ならば迅速にことを終わらすことが出来る。

「そつだ、だから、行くぞ」

「今日は渡り使えるんだよな〜」  
「無理だ」

露骨に幸村が嫌そうな顔をする。神依の渡りを使えば一瞬で、チャクラムの置いてある場所に移動できる。全国の主要都市には、神依の渡りが見えるようにチャクラムが置いてあるため、それを使えば一瞬で移動が出来る。しかし、現在は神依が絢火の看病のため、使用が不可能になっている。

「早く行くぞ」

「はあ〜」

深い溜め息をつきながら、幸村は立ち上がり、食堂を出る。佐助は先に行き、勘定を済ませていた。0の数がかなり多かった気がするが、佐助は無視して払い、領収書を受け取っていた。

あとで幕府に請求するためだ。後に、領収書を見た陶咲が卒倒し、江戸中が大騒ぎになったことは、別の話だ。

幸村と佐助の二人は食堂を出た。外は良い天気で、空は青く、晴れ渡っていた。雨など降りそうもない。

「嵐が来そうだな」

だが、幸村は神妙な顔で言った。晴れ渡った空を見て、嵐が来ると言った。幸村の勘はよく当たる。はずれたことなどない。だから、きつと嵐が来る。それも、特大の嵐が。

「なら、急いだ方がいいな」

佐助は幸村の言葉に頷き、余計なことも言わず、出発の準備をした。

「おい、行くぜ佐助え!!」

「ああ、幸村」

幸村と佐助が道から消え去った。

\*\*\*\*\*

銀たちは屋敷から必要な物だけ持って移動していた。屋敷は昨夜の襲撃により、だいぶ破壊されたため、新たな拠点に向かっていったのだ。

向かっているのは、出島だ。椿の話によれば、出島の中には、兄弟姉妹のための控え屋敷があるらしい。少しの間そこで過ごすのだ。どの道、来る予定だったので、予定が少し早くなっただけだ。

「ここだな」

「ええ、ここですわ」

椿が屋敷の一つに入っていく。前の屋敷ほど大きくはないが、手入れはきちんとしてあった。

屋敷の中に入ると、エントランスに一人の男がいた。如何にも貴族然とした格好をした男だ。嫌みったらしく、人形師とはまた違う

マリオネット

笑いを、顔に貼り付けている。

「やあ、待ってたよ椿」

男が言う。椿は嫌そうな顔をする。

「なぜ、あなたがここにいるんですの！」

語尾を強めて、椿が言う。嫌悪感丸出しだ。だが、男は気にした様子もない。むしろ椿のその様子を楽しんですらいる。その様子に椿の機嫌が悪くなっていく。男は何食わぬ顔で椿に近づいていく。

「なぜって、大事な弟の娘が誰かに襲われたんだから心配で見に来たに決まってるじゃないか」

嫌味な笑いを貼り付けたまま男が言う。だが、それには全く感情は感じられない。社交辞令、そんな言葉が思い浮かぶ言い方だった。見え見えだ、隠そうともしない。

「よくそんなことが言えますわね。嘘つきで卑怯者が」  
「ハハハハ」

男が乾いた笑みを漏らす。そして、笑みを崩す。先程とは打って変わって冷徹で残忍な表情になる。

「調子に乗るなよ屑が。刺客を退けた位でな。当主になるのは、このオレだ。どんな手を使っても……」

男が拳銃を取り出す。その時、乾いた音がエントランスに響き渡る。

「ストップ、ストップ」

銀が手を叩きながら言った。

「誰だお前は」

「俺はあんたの姪に雇われた鍛冶師だよ。一応雇い主だからな、死なすわけには行かないんだよ」

銀と男が睨み合う。男が拳銃を仕舞い、下の、嫌味な笑いへと戻り、肩をすくめる。

「やらないよ。これじゃ、割りに合わない。そもそも、お前如き、殺すまでもない。まあ、せいぜいがんばるんだな」

そついい男は屋敷を出て行った。場の空気が一気に弛緩する。

「ふう」

銀が息を吐く。何もなかったことに安堵する。これで、何かあったら、大変だ。

「その、助かりましたわ」

「俺は何もしてないぞ。それに、誰だあいつは」

椿を姪と呼んでいたことと、当主になると言った言葉から、千宮家の人間であることは確か。マリオネット人形師の資料の中にも名前はあった。なぜ、知っているのに椿に聞くのかと言えば、その知識は銀が元は持ち得ない知識だからだ。そこで、変に詮索されたくはない。

「あいつは千宮綺零、卑怯で卑劣で残虐な男ですわ」

千宮綺零。千宮景義の息子で、千宮家長子。序列第二位。32歳。高い知能を持つ。サディストでプライドが高く、異邦人を嫌っている。目的のためなら手段を選ばない冷酷さを持つ。当主になるためなら、兄弟姉妹を殺すこともいとわない。何人かの有力な兄弟姉妹が彼に殺されている。椿の父親を殺したのも彼。

「なるほどね」

マリオネットター  
人形師の所で見た資料を思い出しながら、頷く。どうりで、嫌味な奴だ。どこか、人形師に通じるものがある気がする。  
マリオネットター  
そうしていると、屋敷の扉が勢いよく開け放たれた。身構える銀と椿。

「お姉様!」

しかし、入って来た者を見て構えをとく。入って来たのは、黒髪をツインテールにし、後ろだけおろした髪型の少女。色が明るく、露出の少ないドレスを着ている。

（こいつは確か人形師の資料の中にいたな、確か……）

せんのみやひなぎく  
千宮雛菊。序列第五位、せんのみやきりえ  
千宮霧絵の娘。序列第九位。年齢にそぐわず精神は成熟しており、椿ですら舌を巻くほどの才覚を持っている。椿のことを姉と慕っている。椿からはすっかり者でできた妹として扱われていた。誰にでも優しく、平等。

「雛菊!」



自分の記憶が合っていたことを確認した。

(なるほどな。この女の子が千宮雛菊か……………)

銀は、どこか、油断ならないように雛菊を観察する。

「お姉さま。ようやく、いらしたのですね。それでは、鍛冶師を見つけたんですね」

「ええ、あいつですわ」

椿が銀を指差す。雛菊は、椿の横から、後ろにいた椿を見る。雛菊は無意識に上から下まで見る。そして、銀と桜に近づいていった。

「はじめまして、千宮雛菊と申します」

「糸杉銀だ、よろしくな」

「春夏秋冬桜と言います。よろしくお願ひします」

「こちらこそ」

雛菊は椿に向き直る。

「良い、鍛冶師の方に会えたんですね」

「ええ、そうよ。それで、雛菊は大丈夫でした？」

「はい、お姉さま。私は大丈夫です」

「そう、それなら、いいですわ。私は少しわたくし疲れているので、先に休ませてもらいますわ」

椿はそう言い、部屋へと先に行った。銀たちは、それを見送った。

「桜、お前も部屋行け」

「はい、わかりました」

銀の言葉に従って桜も部屋へと向かった。ここに残ったのは銀と雛菊だけだった。雛菊は意図した訳ではないが好都合、話をするにはちょうどいい。変に勘ぐられずに済む。

「それで、俺に何か用か？」

「はい、お久しぶりです銀様」

「お前に会ったことあったか？」

「はい、正確には遠くから見ただけですけど、十年前に」

「!!!」

雛菊の言葉で、銀の表情が険しく、厳しく、鋭くなる。

「十年前だと、お前はまだ、二歳位のはずだ」

「私は、一度見たもの、聞いたものは、絶対に忘れないんです」

完全記憶能力と十年前の記録。人形師マリオネットのデータにはなかった。知らなかったはずはない。わざと載せていなかったのだ。こうなることを見越して。つくづく嫌味な奴だ。まったく、反吐がでるな。アイツは絶対に味方ではない。

「独自の情報網を使って、お姉様があなた様を雇われたのを知って、自然に会えて、話せるように準備しました。結果お姉様が悲しんでしまったのは、失敗でしたけど。まさか、伯父様までなんて思いませんでした」

「そうか、なるほど、情報以上に厄介なお嬢さんだ……………何が目的だ。当主の座か？ それとも……………」

この俺か。銀は口に出さなかったが、雛菊には何を言ったかわかった。

「私は当主の座など、どうでもいいのです。ただ、お姉様が幸せに暮らせればそれで。あなた様のことも何もしません。ただ、お会いして、お話しをしたかっただけなのです」

「……………わかった。だが、俺はもう、そんな立場じゃない。だから、そんなかしこまるな」

「わかりました。さて、そろそろ私は戻ります。その前に一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

少しの沈黙の後、ゆっくりと雛菊はその口を開いた。

「もし、この国に危機が迫ったら、あなたは立ち上がってくれますか？」

「……………そんなのは將軍家の……………」

「答えてください」

「……………」

銀は一瞬の沈黙の後言った。

「ああ、ここは俺の国だからな」

その答えに満足したのか、雛菊はにこりと微笑んだ。

「やっぱり、思ったとおりの人でした。それじゃ、私はもう行きま  
す。お姉様をよろしく願いますね」

「わかってるよ。約束だからな」

雛菊は一礼して、屋敷を出て行った。

銀は溜息をつき階段を上り、自分にあてがわれた部屋へと向かっ

た。

\*\*\*\*\*

「おい、佐助え、ここでいいんだよなあ」  
「そのはずだ」

幸村と佐助は、長崎一高い鉄塔の上に器用に立って出島の様子をうかがっていた。

およそ、人間の視力では出島内の様子など伺うことは出来ない距離ではあったが、2人には問題ないようであった。もっとも、目隠しで目自体が役を成していない佐助を、問題ないとするならだが。

「何もやってねえじゃん！」  
「当たり前だ。当主戦があるのは明日だ。言ったはずだぞ」  
「そう、だっけ？」

佐助が呆れと諦めの入り混じった溜め息をつく。話した位では覚えてないのは何時ものことだ、それについては何とも思わない、わけではないが、こんな上司の下に来てしまったことに、何度目かの溜め息を自然についてしまう。

「そつだ。少しは覚えてくれ」  
「タハハハ、わりい、わりい」  
「まったく……」

佐助は幸村を放って、出島を見る。目は使えないが、それ以外の感覚で、目で見るとより鮮明に世界を知覚することが出来る。

それだから感じられたのかもしれない。出島の異様な雰囲気。

(しかし、なんだ、これは……おかしい……有り得ない、なんだ、これはこんな禍々しい気など……)

まるで、地獄の悪魔でもいるかの如き禍々しさを放つ出島。それ程の気を放つのなら、一般人でも、何か感じていいはず、だが、誰も気付いていない。そのことが、違和感を増大させ、佐助に畏怖を抱かせる。

幸村は気付いてはいない。勘の鋭い幸村ですら気付かない。感覚が鋭すぎる佐助だからこそ気付いた。それはまさに異常。

幸村に伝えるべきか迷うが、伝えないことにした。伝えたところで、意味がない。

「なあ、佐助え、行かないのかよ」

幸村が偵察することに飽きたのか、狭い鉄塔のうえにで体を、しきりに動かしながら言う。

「それは明日だ」

「なら、飯食いに行こうぜ！ ここ、中華街があるしよあ！！」

楽天的な幸村に呆れながらも、こいつなら大丈夫だなと、妙な安心感を抱いた。

「そうだな」

「ええ！！」

なぜか、幸村が盛大にのけぞり驚いた。危つく鉄塔から落ち掛ける程。

幸村の驚きように少しムツとしながらも、努めて何時も通り振る舞う佐助。

「意外か？ 腹が減っては戦はできぬだ」

「うん、意外だ。何時も小言ばっか言うからさ」

自分の行動を振り返る佐助。なるほど、確かに小言ばかりだ。だが、それは幸村の責任だ、言われたくないなら、言われぬ努力をするべきだろう。幸村はそれがわからない。

「お前が言わせてるんだろう。それで、行くのか、行かないのか？」  
「行くぜえ！！」

勢いよく幸村は鉄塔から飛び降りる。佐助もそれに続く。2人は危なげなく着地すると、すぐに目的地へと向かった。

幸村と佐助が中華街に向かっていた頃、徳川陶咲は白劫から千宮当主戦についての報告を聞いていた。

「なるほど、確かにそれは介入する必要があるそうですね。長崎なら幸村ですね。すぐに」

「それならば、既に指示は出してあります」

「流石は白劫、相変わらず適切な判断ね」

「もつたいないお言葉」

白劫が恭しく頭を下げる。しかし、どこか、それが形だけの、中身が伴っていないようなものを感じる。それだけが、この白劫に感じる不満点。国のために尽くしてくれているのはわかっているのだが、不意に、まったく中身がなく、とても、事務的で機械的に感じることがある。それを見るととても、不安になる。いつか、白劫が今ある全てを破壊してしまえばいい。

陶咲は頭を振り、その考えを頭から追い出す。そんなことはありえない。そう、ありえないはずだ。いくら、覇がなかるうとも、自身に忠義を尽くしてくれていると陶咲は信じている。だが、言い知れぬ不安があるのも、確かだ。

「それでは、下がちなさい」

「はい」

白劫は部屋を退出する。それと入れ替わるように、黒髪をポニテールにした凛という言葉が似合う女性が入ってきた。桜と同じようなミニスカート丈の着物と黒い羽織を羽織って、腰には刀を差している。

「神楽、首尾は？」

陶咲が黒髪の女性　神楽に聞く。

神楽、陶咲の側近。陶咲に絶対の忠誠を誓っている。元は、陶咲の側近などではなく、陶咲の兄の側近であった。だが、九年前のある事件により、陶咲の側近となる。その剣技は守護者に匹敵するとまで言われている。

「上々とは言い難いです。幸村様と佐助様が入り込むのは不可能でしょう」

「そうでしょうね」

形の良い顎に手を当てて考える陶咲。千宮ほどの家ともなると、幕府からの介入するのが難しくなる。相手は九州を中心に全国にその経済網を張り巡らせている。下手に千宮を刺激すれば、この日本の経済がストップする可能性すらある。それなら、まだ良いが、問題なのは異国との取引をしている千宮家のコネだ。それは無視できない。千宮が裏切った場合、他国に情報がばれる可能性すらある。しかも、絆鋼を所持している。それが、異国に渡ったりしたら目も当てられない。

「あれこれ可能性を考えても仕方ないですね。私のいけない癖です。では、もう一つの方は？」

「はい、かの鍛冶師ですが、名を糸杉銀と言っらしいです」

「糸杉……確か……」

陶咲の記憶の中には糸杉という名があった。糸杉銀という名前ではないが、30年ほど昔の將軍抱えの鍛冶師の中にその糸杉という名があったはずだ。昔の記録を読んだときに見た覚えがある。名前



は、糸杉いとすぎげんせい厳正となっていた。

「はい、この將軍抱えの鍛冶師で居たのは数年ですが、とても腕の良い鍛冶師だったようです。当時の將軍も、彼が出て行くときに引き止めたそうですが、糸杉厳正は従わずに城をあとにしたそうです。それからの行方はよくわかっておりませんが、江戸のはずれで小さな鍛冶屋を営んでいたそうです」

「では、糸杉銀は彼の子供だと？」

陶咲の問いを神楽は否定する。

「いえ、どうやら、どこからか拾ってきた子供のようです」

「拾い子……………」

陶咲の頭によぎるのは、一つの可能性。兄がその拾い子だという可能性。しかし、それには穴がある。元この鍛冶師だったのなら、厳正は生き別れの兄に会っているだろう。会っているのなら、保護した時点で自分たちに話が伝わる。なら、その子供は違うということだろう。

「そうです。確かに似てはいますが……………まだ、そう決まったわけではありません」

「ええ、わかっていますわ。とりあえず、そちらは置いておきましょう。今は、千宮の方が大事です」

「それなのですが……………その……………」

神楽が言いよどむ。

「どうしたのです？」

「それが……………彼らも来ているのです。出島に、しかも関係者のよう

で……」

「なんですって!?!」

なぜ、こつもあの鍛冶師は我々に関わってくるのだろうか。そんな疑問が陶咲の中を通り過ぎていった。

\*\*\*\*\*

椿は誰よりも早く目を覚ました。目をあけ、体を起こすと知らない部屋。出島の屋敷の部屋なのだが、まだ、完全に目を覚ましていない椿は、目を覚ますために、いつものように呼びかける。

「小夜子、モーニングテイーを、あ……………」

だが、呼びかけは虚しく、虚空へと消え去った。そこで気がつく。昨夜の出来事を。小夜子はいないということ。

「そう、でしたわね」

思い出して泣きそうになるのを堪える。目を瞑り、精神を落ち着かせる。深く息を吸って吐く。落ち着いたところで、目を開いた。そして立ち上がる。

着替えを行い、部屋を出る。

「今日ですわ。今日、全てが決まる」

決意を胸に、椿は歩く。

\*\*\*\*\*

「さてと、いよいよか」

銀は部屋で呟く。隣には剣神。

「そうだな」

「……………どう思う」

「オレに聞くな」

「だろうな」

剣神にははじめから期待していないといった風で言う。それがわかってても剣神が気にした様子はない。むしろ、そんな銀の様子すら楽しんでる風である。

「だが、来てるだろうな。外に二つ、かなりでかい気がある」

幸村と佐助の気配を感じながら剣神が言う。なかなか楽しめそうな敵だと剣神は思う。抜き放たれている破魔が脈動しているのもその証拠だろう。破魔もまた、強い人間と戦いたいのだから。それが与えられた本能なのだから。

「守護だ……………まあ、入り込んだとしても、お前が倒すんだろ」

「当たり前だ……………それがオレの根底に設定された目標だからな」

「……………行くぞ、そろそろ時間だ」

「そうか、じゃあな」

剣神が破魔を鞘に戻す。剣神は漆黒の底へと舞い戻り、桜が表に出てくる。桜が気がついて、まずしたこと。

「え？ ええええええええ！？」

悲鳴を上げること。昨日は自分の部屋で寝たはずが、朝起きると銀の部屋。叫ぶのは普通の反応だ。

「よう、起きたか」

「え？ あれ、なんで！？ どうして!?!」

「さあ？ 朝起きたらお前ここにいたけど？」

銀の言葉に愕然とする桜。何があったのか、必死に思い出そうとするが思い出せない。その様子を銀は笑いを堪えながら見ていた。何も知らず慌てふためく桜の姿はとても面白い。そんな銀の様子に気がついたのか、桜が頬を膨らませて怒る。

「悪い悪い、何かおかしくてな、ハハッ」

「む〜」

「つと、こんなことしてる暇なかったな。とりあえず朝食に行くぞ」  
「あ、はい!」

銀と桜は食堂に向かった。既に椿は席についていた。遅れたが、今回は何も言わない。まだ、引き摺っているようだが、それでも迷いは消えている。これなら、心配はないと銀は判断した。

「どうだ？ 昨日はよく眠れたか？」

「ええ、まあそれなりにはね。それより、あなた、雛菊と何を話していましたの？」

「別に、ちよつとした、世間話だな。お前が選んだ俺がそうとう気になるみたいだったからな」  
「そう」

何か隠しているわけではありませんか？ と視線で椿は銀に聞いてくるが、銀はそれに気がつかない振り、何も知らない振りをした。

そんな銀を見て、椿は少し疑ったがすぐにその視線を引つ込めた。仲間を疑ってみたところで何も変わらないからだ。

「では、今日はよろしく頼みますわ」

「何か、お前にお願いされると、気持ち悪いな。今はお前の鍛冶師だ。命令しろ。お前にはそっちのほうが似合ってるよ」

「言ってくれますわね。一応の礼儀ですわ」

銀の軽口に少し笑みをこぼす椿。その様子に桜は安心した風に笑う。

「じゃあ、行きましょう！」

「ああ」

「ええ、では、行きますわよ！ ついて来なさい！」

椿を先頭に、屋敷を出発。出島内に作られた闘技場とも思える場所へとやって来た。中央に窯が用意してある。そこには、既に、親族が集まっていた。椿が来たのが伝わり、険悪な視線が注がれる。桜はおろおろするが、椿と銀は気にせずその視線を一身に受ける。

「逃げずに来たようねえ」

語尾が伸びた独特の話し方の女が言う。チャイナ服を改造したような服を着ている。スリットから、見える太ももが色気をかもし出している。

「ええ、蘭鈴伯母様もお変わりないようで」

「フン、嫌味に育ったわねえ。その髪も、その目もワタシは嫌いよ。だからあ、さっさと死ねばあ？」

千宮蘭鈴せんのみやらんりん。序列第三位。30歳。所謂、悪女。千宮の魔女と称される女。その美貌で、数多くの男を虜にしてきた魔性の女。今の世界が自分中心で回っていると言うほど自己中心的。プライドの高さは綺零に匹敵する。負けず嫌いで、綺零とは犬猿の仲。能力は綺零には及ばないが、ある種のカリスマを持っている。千宮の家に執着はなく、もらえるなら貰っておこうという程度でしかない。参加理由も椿をいじめるためというかなり個人的なものである。

「私はまだ死ぬわけには行きませんの」  
「ふん、ならせいぜい、足掻くことねえ」

蘭鈴はそう言って、一度も椿を見ることなく離れて行った。入れ代わりに雛菊がやって来る。

「お姉様、大丈夫ですか？」  
「ええ、大丈夫ですわ。心配いりませんわ。あなたは自分の心配をなさい」  
「はい、そうします」  
「逃げずに来たようだな」

そこに綺零がああの不愉快で、不敵な笑みを浮かべて近付いてきた。椿の顔が険しくなる。雛菊も気付かれないように、表情を固くする。銀は自然体で、綺零の一挙手一投足を観察する。桜はあからさまに経過して、破魔に手をかけている。

「ええ、当たり前ですわ綺零伯父様。私売られた喧嘩は買う主義ですの」  
「フン、それなら、当然死ぬ覚悟はあるんだろうな？」  
「愚問ですわね伯父様。そんなもの、この世に生を受け千宮椿として生まれたその時から、出来ておりますわ」

それは言いすぎだと内心ツッコミを放つ銀。だが、空気を読んでここでそんな野暮なことを言うことはしない。

「なら、勝手にあがいている。お前が出てくる前に、オレが全てを終わらせてやるっ」

綺零はそのまま立ち去っていった。

「はあ〜」

いきなり肩の力が抜けたかのように息を吐く椿。口ではああ言っていたが、内心ではかなり強がっていたようだ。

「大丈夫ですかお姉様！」

「ええ、心配要りませんわ」

「まったく、無理しすぎだろお前」

「これくらいしなければ当主になんてなれませんか」

すぐにいつもどおりの椿に戻る。

『これより千宮当主戦を開始致します。千宮景義のおな〜り〜!!』

閉め切られていた屋敷の扉が開く。その時、桜が怯えたように震えた。

「どっした？」

「い、いえ、なんでもありません」

桜自身はそういうが、銀からはまったくそうは思えない。明らか

に何かにおびえている。

「そうは思えないから聞いているんだが、何かあるなら言え」

「はい、何か恐ろしい気配を感じるんです。とっても怖くて、恐ろしい気配を……」

まるで肉食動物を目の前にした草食動物のように怯え、震える桜。一人、景義の異様な気配を感じ取っていた。他の者には圧倒的威圧感にしか感じれぬ、その異質を感じていた。

「おい、しっかりしろ!!」

「怖い、怖い怖い!!」

桜の瞳に狂気が渦巻く。不味いと判断した銀は、内心謝りながら桜の頬を叩く。そして、肩を掴み、一心に瞳を見つめる。

「しっかりしろ！ 呑まれるな!!」

銀の言葉で、桜の瞳のに渦巻いていた狂気が次第に消えていき、正気が戻ってきた。同時に、怯えと震えも止まる。

「あれ？ 私何を？ って、はう!! ち、ちち近いです!!?」  
「千宮の当主に呑まれかけてたんだよ。まあ、その様子なら大丈夫そうだな」

顔が真っ赤だが、いつもの桜の雰囲気戻ったので大丈夫だろうと判断し離れる。

「あ、あのありがとうございました」

「いやいい、それよりも見る。出てきたぞ怪物が」



千宮景義が姿を現した。2 mを超える巨漢の男。髪は全て真っ白な白髪だが、その黒い瞳は衰えを感じさせず、獣のように力強く光を放っている。全てを引き込む圧倒的雰囲気身を纏っている。

現に、会場に景義が現れた途端、会場の雰囲気が一変した程だ。圧倒的カリスマと、圧倒的実力を景義は備えていた。まさしく、怪物であった。

\*\*\*

景義が出てくるのを、幸村と佐助は、出島近くの物見櫓から見ていた。少し離れたこの場所にまで、景義の圧倒的雰囲気が届いていた。

「出て来たなあ、佐助えー！！ くうく、やっぱり強そうだよなあ、戦いてえなあ〜！！」

幸村が楽しそうに、体を震わせながら言う。今にも、出島に侵入し、景義に殴りかからん勢이었다。

「やめろ。お前は幕府を潰す気か」

飛び出しそうな幸村を佐助がいさめる。ここで幸村に飛び出されたら全て終わりだ。

「わかってるよ佐助え。ダイニングが大事なんだよな」

「タイニングだバカ」

「あーバカだったな！！ バカって言った方がバカなんだよ。バカ、バカ！」

自分でバカと言った方がバカ、とっておきながら自分でバカと言う幸村。やはりバカだ。

佐助はそんな幸村を無視して、景義を見る。やはり昨日の異様な気配の正体は景義だったようだ。この異質さは白劫に匹敵するかもしれないと、江戸にいる最強の男を思う佐助。

しかし、言うなれば真つ直ぐな歪みの白劫と違い、景義はまさしく混沌と言えた。あんな人間が他にいるなど、見るまでは信じられない。

それが自分たちが守護する地に居ようとは。不干涉を決め込んで来たツケが出たと言う事だ。

「何、悩んでんだよ。佐助え、オレがいるんだぜ。泥船に乗ったつもりで任せろ」

幸村は深刻な表情をする佐助を見て言った。その言葉に佐助の不安が消えた。やはり幸村にはかなわないと思う佐助。

「大船だバカ」

「また、バカつつつたな!!」

「フツ、じゃあ行くか」

「無視すんなよ!!」

佐助は物見櫓から飛び降りる。慌てて幸村も櫓を飛び降り、佐助を追った。

いざ、鬼の住む出島へ。

## 玖（後書き）

はい、どうもテイクです。

来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、二週間ほど更新できなくなります。

ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

## 拾

千宮景義が壇上へと上がる。それをここにいる者は固唾を呑んで見守る。そして、怪物景義が口を開く。

「よく集まったな。我が子と、孫たちよ」

景義が威厳の籠った声で言う。歓迎したような口ぶりだが、声の中にはまったく歓迎は入っていない。誰が死ぬか、生きるか、それだけを見ている。自分以外眼中にない。そんな目をしている。

「綺零、蘭鈴、椿、雛菊、さあ、貴様らの力を我に見せよ。さすれば、当主の座は貴様らの誰かに渡そう。では、はじめようか」

景義が合図をする。すると、黒服の男たちが、絆鋼を景義の前に持ってくる。手のひらサイズの澄んだ銀色の鉱石。純度の高い絆鋼だ。銀は、綺零と蘭鈴、雛菊が連れている鍛冶師を見る。どの鍛冶師もかなり腕の良い鍛冶師だ。普通の鉱石で刀を鍛えたならば、勝ち目はないだろう。だが、絆鋼ならば勝てると銀は思った。資格を持つ人間は少なくともここには居ない。

「では、綺零からやるがよい」

「では……」

綺零と綺零が雇った鍛冶師が絆鋼に近づいていく。

「あの、銀さん」

その時、桜が銀の服の袖を引っ張る。

「どうした？」

「なんか、周りから嫌な感じがするんです？」

「嫌な感じ？」

「はい、何か、あの人を狙ってるみたいで」

桜が景義を指す。

「まさかな……」

銀は、綺零が景義を殺そうとしているのではないかと思った。景義の主義はと千宮の家訓にはこうある。もし、当主に不満を抱いた場合、その当主と戦い、殺した者が次の当主となる。周りの嫌な気配と、綺零のあの含み笑い。この可能性は高そうだった。そして、次の瞬間、銀のその予感現実のものとなる。

パンと乾いた音が響き渡り、カランと何かが地面に落ちる音がする。そして、誰かの倒れる音が響いた。

「ッハハハハハハハ！！！」

綺零の狂ったような高笑いが会場に響き渡る。景義は頭を打ち抜かれて死んでいた。撃った張本人の綺零と、蘭鈴以外は皆啞然としていた。

「やれ！」

その瞬間、会場の彼方此方で悲鳴と血飛沫が上がる。数秒後には、会場内で動いているのは、綺零、蘭鈴、雛菊、椿、銀、桜と、綺零の部下の忍だけだった。

「これで、オレが当主だ！！ 認めてもらっぞ。貴様ら！」  
「誰が！！」

椿が言った。認めるわけにはいかない。こんな外道を当主にしたら、小夜子になんと言えればいいのか。

椿の様子に綺零がにやりと笑い腕を上げる。銀と桜は椿の元へと走る。

「なるほどなあ」

『！？』

そのとき、響くはずがない声が響いた。死んだはずの景義の声音が会場に響く。

見ると、景義の死体が、何事もなかったように立ち上がっていた。

「見事だ我が息子綺零よ。だが、我には及ばなかったようだなあ」

「な、なぜ生きている！！ 脳天を撃ち抜いたんだぞ！！」

「これか」

景義が銃弾を傷口から取り出す。抜き取ると、見る見るうちに傷口がふさがっていった。

「これでは、我を殺すには、足りなかったようだなあ。ほら、返すぞ」

景義が銃弾を指で弾く。銃弾は凄まじい速度で、綺零の眉間に赤い花を咲かせた。綺零が倒れる。

「では、続きをやるつかあ。蘭鈴貴様だ。どうする？ 我を殺してみるか？」

景義は息子を殺しておいて平然と言った。もはや人間ではない。  
本物の怪物だ

「ワタシは辞退するわあ」

「ほう、千宮の家を要らぬと申すか。それもいいだろう。好きにするがいい」

「ええ、それじゃ」

蘭鈴は、景義に背を向けて歩いていった。二度と振り返ることはなかった。途中、綺零の死体の横で立ち止まる。

「哀れねえ、綺零。キヒヒヒ、どうせ、あんたには何も出来ないのにねえ！」

そう言っつて、蘭鈴は姿を消した。その後、彼女の姿を見た人間はいない。どこへ行ったのかも不明だった。

「さて、椿、次は貴様だ」

「ちよつと待っつてもらおうかあ！！」

上空から幸村と佐助が現れた。銀と桜は咄嗟に身構える。

「幸村参上！！！！」

決めポーズなのか、幸村が右腕を天にかかげ、人差し指を伸ばす。左手を腰にあてて、決め顔。どうやら本当に決めポーズのようだ。まったくもって格好悪い。佐助がやれやれといった風に額を押さえる。

「さして、全員動くなよ」。特にその、刀持ったねーちゃんはな」

幸村が桜を指差す。刀を抜きかけていた桜が動きを止める。動けば、佐助がここにいる人間全員を殺すと、本能的に察してしまった。剣神ならば、自分の身は守るが、他の人間は護りはしない。それを知ってか知らずか、桜は動かなかった。銀が動くなと視線で言っていたのもある。

「守護か？」

銀が幸村に尋ねる。

「正解だぜ。佐助はオレの部下だけだな」

「そうか」

— 先ず守護が2人で無いことに安堵するが、まだ油断出来ない。ここには不確定要素が多すぎる。

「守護かあ、我の邪魔をするなあ」

「へっ！ 佐助え！！ そっちのねえちゃんは任せたぜえ！！」

腰の紅い棒、棍を抜く。短かったそれが、見る見るうちに標準の大きさへと変化する。

「まったく、骨の折れることを。だが、了解した」

「へ！ 行けぜ！！」

「！？」

音もなく佐助が、桜の懐へ現れる。その手には小刀が握られている。それが、桜の命を刈り取るべく首へと向かう。神速の如き速さ



に誰もついていけなかった。だが、桜の首が飛ぶことはなかった。

高い鋼と鋼がぶつかった音が響く。佐助の小刀を破魔が受け止めていた。佐助の顔は驚きに染まり、桜の、剣神の顔が享楽に染まる。

「はあああああああ！！！」

剣神が破魔を振りぬく。佐助が吹き飛んだ。そしてそのまま、壁へと突っ込む。だが、壁に突っ込んだのは丸太。忍が得意とする変わり身の術だった。佐助は剣神の背後にいた。小刀は半ばで無残にも折れ使い物にならなくなっていた。

「フッ！」

剣神が楽しそうにニヤリと笑い、佐助へと疾駆する。まるで弾丸の如きスピードで佐助へと迫り、刀を振りかざす。

だが、その刃が佐助に触れることはなかった。佐助は刃を寸前で体を下げでかわす。その動きは、目が見えないとは思えない動きだった。

2人が距離を取る。

「やるな忍、この前の奴らとは違うようだ。楽しめそうだな」

「あなたが噂の剣神ですか。なるほど、さすがと言ったところか。だが、勝たせてもらおう」

「フッ！」

出来るならな。と表情で語り、剣神が破魔を構える。佐助は手裏剣を持つ。

「はっ！！！」

佐助が手裏剣、それとクナイを投擲する。いつの間にか千を超える手裏剣とクナイが佐助の手から投擲されていた。それらは、劍神と、その後ろにいる銀と椿を狙っていた。

「来い!!」

「え、あちよつと!!」

銀が椿の手を引き、急いで手裏剣とクナイから逃げる。雛菊は既に安全圏に逃げているため、問題はない。

劍神は無謀にも、千を超える手裏剣とクナイに向かって走っていた。そして、まるで手裏剣やクナイがスローに見えているかのように、全てかわしていく。舌を出し、飛んでいるクナイを舐めるといふ、神業的な芸当までやってのけた。

劍神は手裏剣とクナイの弾幕を通り抜け、佐助へと迫る。佐助はバックステップで後方へ後退しながら、クナイを投擲する。破魔で弾きながら劍神は佐助を捉えるべく、踏み込んだ。

「死ね!!」

「悪いが、死ぬことは出来ん!!」

「だが、遅い!!」

劍神が破魔を振りぬく、だが、その時劍神の右腕が誰かにつかまれた。見ると、佐助が掴んでいる。目の前にも佐助はいる。

「分身か……」

「そうだ」

いつの間にか、劍神は百を超える佐助に囲まれていた。

「これでお前も終わりだ」  
「フツ」

そんな状況でも、剣神は笑みを浮かべていた。たった百如きで？  
守護でもないただの忍風情が、この程度で剣神を殺せるだと？  
笑わせるなよ未熟者が。この程度で、万を、億を、兆を超える人間  
を斬って来た剣神が、たった百で死ぬだと？ ありえない。

「終わるのは貴様だ……無幻流奥義鬼哭啾啾きこくしゅうしゅう！！」

剣神を中心に黒い空間が広がっていった。それは佐助を全員飲み  
込み、引き込んだ。

「な、なんだこれは！」  
「フフフフ」

剣神の声が真つ暗闇のこの空間に響き渡る。それ残響となり、何  
度も何度も響く。生来光を知らぬ佐助以外ならば、この空間に引き  
込まれた時点で廃人と化すほどだろう。

「さあ、私の踏み越えてきたものをお前に見せてやる……」

何か佐助に絡みつく。それはまるで、人間の手足のようであつ  
た。いや、紛れもない人間の手足、ただし、真つ黒でブヨブヨとし  
た、肉の塊が佐助を絡め取っていた。そして、まるで合唱の如く、  
悲鳴が、泣き声が終わりなく響いていく。佐助の頭の中に映像が流  
れ込む。それは死んだ映像。自分でない誰かが、紅い髪、紅い右腕  
の女に殺される映像。

だが、映像のはずなのに、それはまるで本当にあつたかのように  
感じられる。一回見るごとに体が引き裂かれ死んだ感覚が体を支配

する。肉体に損傷はなくとも、精神が死ぬ。いや、本当は死んでいるのかもしれない。生きている、そんな当たり前のことも、この空間の中ではあやふやで、酷く脆いものであった。

「はあ、はあ、はあ!？」

気がつくと、佐助の分身は消え、自身は地に倒れ伏していた。息をしきりに吸う。だが無数に殺された自分のイメージが頭から離れることはない。むしろ、鮮明に残っている。死ぬのは怖くない。だが、それでも死んだ感覚を何度も食らわされれば堪える。

「ほう、まだ、自我が保っているのか」

剣神が感心したような声をだす。

「だが、それでは動けまい」

剣神は幸村と景義の方を見る。苦戦しているようだった。

「存外あちらも苦戦しているようだ。さて、オレはオレの仕事をするまでだ」

剣神が気配を消して、走る。向かうは幸村と景義の下だ。佐助には、それを見送ることしか出来なかった。

\*\*\*\*\*

幸村が跳びながら棍を振り下ろす。景義は避けもせず、それを受け止めた。

「この程度か？ 守護よ」

「なわけねえに決まってるだろ！！」

地に立てた棍を軸にして蹴りを放つ。

「せい！！」

それを片腕だけで受け止める景義。だが、それは予想済みだったのか、すぐさま蹴りを放った状態のまま、体を回転させ、そのままの勢いで棍を景義に叩きつける。だが、それも、棍を掴まれ受け止められた。幸村はそれを見るや、掴まれた棍を鉄棒代わりにして、勢いをつけ蹴りを景義の顔面に叩き込む。だがそれも避けられた。そのまま棍を軸に一回転し、地に足を付け、そのまま景義ごと棍を振る。景義は途中で棍を離し空中で受身をとって、何事もなく立つ。棍は地面に突き刺さり決る。

「くそ〜！！ あれも避けるのかよ！！」

悔しさで地団太を踏む幸村。まるつきり子供のような気の抜けたしぐさだが、気を緩めた様子はない。ただ、瞳の闘志がだんだんと膨れ上がってきている。まるで、良い遊び相手を見つけた子供だ。対照的に景義は黙って幸村の次の手を待っている。

「ぜってえ、一発当ててやる！！ 縁技伸縮！！！！」

幸村の言葉そのままの現象が起きる。見る見るうちに幸村の手の中の棍がその長さを変えていく。まるで、西遊記の孫悟空が持っている如意棒のようだ。だが、如意棒と違い、まるで鞭のようなしなやかさを持っていた。それは、幸村の意思で自由に操作できた。



えはあつた。確実に肉を切り裂いた感覚があつた。幾億もの人間を斬つてきた、間違えるはずがない。だが、拭いきれない何かがある。その答えは目の前の光景が示した。景義の体には傷などなくただ、破魔だけがすり抜けていた。切り裂く感触はある。だが、刃は景義の体をすり抜けていた。それが違和感の正体。そして、悪寒、すぐさま剣神はその経験だけで後方へと跳んだ。見えない刃が剣神を狙つて来たのだ。

「フハハハ、貴様が剣神か、なるほどお、確かにこりゃあ、強ええ」  
「……………」

「だが、もつたいねえ、刀が泣いているぞお。手加減をしているつもりなら、やめておけえ、我相手に、それじゃ、死ぬぞ」

景義がはじめて反応を示し、そして動いた。両の腕を広げる。

「フン！！」

その瞬間、世界が割れたかのような衝撃が出島を襲った。

## 拾巻（前書き）

お待たせしました！

PC復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！



## 拾巻

出島の衝撃は日本全体に地震という形で及んだ。今まで経験したことのないほどの地震だった。江戸を含め、全ての町がかなりの被害を被った。そして、震源地である長崎出島、異国情緒溢れる町は壊滅した。どれほどの人間が死んだのだろう、そんなことはわかるはずはなく。ひとつの町がたった一人の人間の手によって消えた。

「うう」

衝撃を受け、気絶してた椿が目を覚ました。おかしい、あれほどの衝撃なら体がばらばらになっていてもおかしくないのに、自分は擦り傷などを負ってはいるがまったくの無傷であった。そこで、気がついた。自分の目の前に銀が覆いかぶさっていた。咄嗟に自分の盾になったことは見なくてもわかった。

「ちよつと！！ 生きているなら起きなさい！！」

「くつ、無茶を言っ……くれる」

銀が生きていたことにほっと一息つく。だが、状況は好転していない。まるつきり悪いほうだ。瓦礫をどかし、何とか外の状況を見る。瓦礫、瓦礫瓦礫瓦礫。どこまでも瓦礫が続いている。これを景義が引き起こした。信じられないというよりはあの男なら、これくらいやってしまえるだろうと、逆に納得してしまった。

しかし、その張本人である景義も、守護である幸村も、その部下佐助も、あの桜の姿をした剣神もここにはいなかった。死んだとは思えない、ならばどこかで戦っているのだろう。

「それにしても何で私<sup>わたくし</sup>たちは生きていますの？ こんな至近距離で

喰らったのなら、普通即死でしょうに」

「剣神だ。あいつがああ衝撃を切つてずらさなかつたら死んでいた」

といつても完全ではなく、剣神も人のことを気にしている暇などなかった。ずらすだけそれで精一杯だった。時代の流れは早いと剣神は呟いていた。そして、銀が椿をかばうことで椿はほとんど無傷、銀も怪我を負ったが何とか生きているという状況だった。

やはり、なにも好転していない。

「剣神？ 桜でしょう？」

「いや、アレは剣神でいいんだ」

「どうして、伝説の人間が出てくるんですの？」

こんな場所でする話ではないが気になった。だから、聞いた。だが、銀は答えず、どこか一点を凝視していた。そこには銀に澄んだ鉱石、絆鋼が転がっていた。あれほどの衝撃を受けても無傷、やはり、ただものの鉱石ではなかった。

それと同時に、上空から剣戟の音が聞こえる。見上げれば、上空で剣神、景義、幸村の三人が戦っていた。三人とも、大きな傷を負っている風ではない。三つ巴の戦いに見えるが、その実、幸村と剣神の二人がかりで景義と戦っていた。それでも景義はどこか余裕そうだった。

「不味いな、長引けば長引く程不利だ 痛っ！」

「大丈夫ですよ！」

椿が心配そうに銀を見る。銀の左腕には深い傷があり、今も血が流れている。布で縛ってあるが、血は止まらない。

「心配するな、それより……絆鋼……取ってくれ」

「わかりましたわ」

椿は立ち上がる。瓦礫の中を歩くのに邪魔なヒールの高い靴を脱ぎ捨て、気をつけながら絆鋼を拾い上げ、銀の下へ戻る。

「持ってきましたわ」

「よし……………」

すると銀が左腕の布を取った。そして、血が流れる左腕を椿の顔の前に差し出す。赤い血が垂れる。

「ちよつと！ 何を!?!」

「契約を果たす……………飲め……………そして……………イメージしろ。お前の思いを……………」

「な、何で、私わたくしがそんなことを!?! む、無理ですわ!!!」

「そんな、事言ってる場合か……………何とかするには、これしかない……………」

「で、でも……………」

銀が言っていることをすれば恐らく、この状況を好転させることが出来るのだろう。頭では、わかっているが、他の人間の血を飲むなど、躊躇われる。

躊躇う椿に、待てなくなった銀が動く。早くしなければ、危険だからだ。

自分の血を口に含み、右手で椿を引き寄せせる。

「な、何を むぐ!?!」

そして、口移しで含んだ自分の血を無理矢理、椿へと流し込んだ。あとで殴られても、叩かれても構わない。今はこれしかないのだか

数秒の口移しのキスが終わる。すると、絆鋼が輝き始めた。

「あとは……………イメージし……………」

瓦礫に寄りかかり、銀は目を閉じた。消耗が激しい。意識を保つていられない。だから、今は少し休もう。

椿は銀を見ていた。まさか、あんなことをするなんて。怒りよりも、悲しみが先に来た。自分だって年頃の娘なのだ、ファーストキスは好きな人と決めたりしていたが、現実はあるだ。まったく、雰囲気きんぎの欠片も何もない、事務的なものだった。

だと言うのになぜか、悪い気はしなかった。血と一緒に銀の気持ちきんぎが流れ込んで来たからかもしれない。純粹に自分を助けたいという思いが。

ならば、自分も答えなければいけない。ここまでしてくれたのだ。自分も何かしなくては気持ち悪い。

「……………私わたしの思いを込める……………」

目を瞑り輝く絆鋼を手で包み込み、強く思った。あなたを、助きたい。短い付き合いだったけど、心の底から、そう思えた。もしかしたら、自分は。

刹那、絆鋼の輝きが増し、辺りは光に包まれた。

\*\*\*\*\*

「はあ、はあ、はあ」

剣神と幸村は一度地上に降りた。景義だけは、見えない地面に立っているのか、今も上空に立って2人を見下ろしている。

「つええ、どうなってんだよ、あのおっさん!!」  
「知らん、自分で考える。行くぞ」

再び地面を蹴り跳躍。大気を蹴り景義へと、斬撃を繰り出す。同じ様に幸村も打撃を繰り出す。だが、やはり見えない壁に阻まれる。このままでは不味い。このままではジリ貧だ。ただでさえ今回の体は弱いのにこの無茶だ。そろそろ限界だった。とうの昔に失った本来の体ならばこんなことにはならない。屈辱的だ。

既に体は重く、動きに精彩さがなくなり、剣速も遅くなっている。せめてあと一人居てくれたならと思う。あの時は仕方ないとしても、佐助を行動不能にしたのは痛い。

その時、銀と椿がいた場所が輝き始めた。そして、輝きが収まった頃には、椿の手に一对の鉄扇が握られていた。

「どうやら、救世主の登場みたいだな」

「何だよ、剣神ありやなんだよ!!」

「さあ」

椿は鉄扇を振るった。軽く。たったそれだけで、風が巻き起こり、瓦礫を吹き飛ばす。その破片一つ一つが、命を刈り取る死神となった。

景義は片腕を風の死神に向ける。自分に向かって来る、自分に当たる破片だけを叩き落とす。

もとより期待はしていない。椿はただ、宣言したかったのだ。

「さあ！ あなたの言った通り、鉱石は鍛えましたわよ。千宮景義  
!!」

景義が椿を見る。やはりと景義は思った。あの四人の中で、一番

可能性が高いと思っていたのは他でもない椿だった。理由などなく、ただただこうなるとわかっていて。

これで目的は果たした。ここに用はない。

「では、約束通り受け取るがいい」

景義が当主の証の指輪を放る。赤い宝石に家紋が刻まれた指輪、それは椿の手の中に落ちた。

「さて、我は行く、ここにもう用はない。千宮という荷物もおろせた。ではな、劍神、守護」

景義はそう言い、霞のように消え去った。あれほど巨大で隠しよりのなかった異質な気配も綺麗に消え去っている。こうして、千宮当主戦は終わりを告げた。多大な犠牲を出して。

「終わった……………?」

椿は景義の消えた場所を凝視しながら呟いた。手の中には当主の指輪。未だに信じられなかった。あの景義が呆気なく退いたのが。しかし、何かすつきりしない気分を抱えながらも、とりあえずは終わったことに安堵した。

「佐助えー！ー！ー！」

幸村の叫び声に振り返ると幸村が瓦礫を掘り返していた。佐助を探しているのだ。

「うるさい、何を叫んでいる」

「佐助えー！ー！ー！」

佐助は瓦礫と瓦礫の間の僅かな空間にいた。ギリギリで剣神が衝撃ズラした場所にいたので助かったのだ。

その二人に剣神が刃を向ける。

「今日は大人しく帰る。佐助の借りがあるからな」

「さて、何のことか」

剣神は構えを解き破魔を下げる。

「だが、次は覚えてろよおー！！」

幸村は佐助を抱えて、出島から出て行った。それを見届けた剣神は破魔を鞘に収めた。同時に糸の切れた操り人形の如く倒れた。

「ちょっと大丈夫ですよ！？」

慌てて椿が駆け寄る。桜はスヤスヤと安らかに眠っていた。

思わず脱力しかけた。まあ、あれだけの戦いをしたのだから仕方がないと思いい納得した。銀も傷は深いが、何とかなりそうだ。

良かった。安心した。どうやら、自分も相当無理をしていたらしく、安心した途端に気が抜けて、その場にへたり込んでしまった。

ちよつど良い。意識を保つのも限界だ。このまま寝てしまおう。

そのまま、誘われるままに椿は意識を手放した。

・  
・  
・

銀が目を覚ますと見知らぬ天蓋付きのベッドの上だった。おそらく千宮家の屋敷だろうと当たりをつける。天蓋付きのベッドなど日本中探しても千宮家だけだ。

しかし、あれだけの衝撃を喰らったにも関わらずこの屋敷は無傷だ。剣神が衝撃をズラしたせいかもしれない。とりあえずは倒壊してなくて良かった。

そう思いながら銀は自分の体に意識を向ける。左腕の傷は治療され包帯が巻かれている。その他の傷も同様だ。ゆっくりと体を起こした。

そこで右手が誰かに掴まれていることに気がついた。見ると千宮椿が自分の手を握って寝ていた。

「なんでだ？」

咄嗟に口をついた言葉は疑問だった。なぜ、彼女が自分の寝ていたベッドに、自分の手を握って寝ているのか。まったく意味がわからない。それにあんなことをしたのだ。こうして起きても会いに来るかもわからないほどだ。それとも、こんなところで寝ているのには何か理由でもあるのだろうか。

「ダメだな、寝起きでまったく頭が回らない」

詳しい事情はこの眠り姫が起きてからにしよう。そうなると必然的に自分も動くことは出来ないのだが、まあ、幸せそうな椿の寝顔が見れたのだ、それくらい苦にはならないだろう。そう思いながら起こした体を倒す。こっちの方が楽だからだ。

そして、あれからどれくらい経ったのかを考える。体の具合から一日以上は経っているのはわかるが、詳しいことはわからない。やはり、椿が起きるのを待ったほうが良いようだ。幸い、椿が起きるのはそんなに後のことではなかった。

椿が目を覚ます。そして、銀が起きていることを知ると顔を真っ赤にして慌てふためいていた。ぶつぶつと何かを呟いていたが、声が小さすぎて銀には聞き取れなかった。内容は気になるが、このま



までは話が進まないため声をかける。

「おい、元気みたいだな」

その声で我に返ったのか、椿は落ち着きを取り戻した。依然として顔が赤い気がするが、大丈夫そうだったので、銀は気にしないことにした。

「ええまあ、おかげさまで。あなたこそ大丈夫そうですね」

「ああ、それで、あれからどうなったんだ？」

銀の問いに椿が答えた。景義のこと、当主のこと、それから雛菊に助けられたことを話した。雛菊は部下に庇われて助かっていたらしい。椿が瓦礫を吹き飛ばしたので出て来れたのだ。

時間は決着がついてから既に三日経過しており、現在町は復興中。当主である雛菊が精力的に活動を行っている。

「お前、当主の座を譲ったのか。どうして？」

あれほど当主になると言っていた。あの決意、覚悟に嘘偽りはない。ならば、なぜ当主の座を雛菊に譲ってしまったのか。

「この三日間、考えたんですよ。そしたら、どうしても良くなりませんでしたわ。別に小夜子の命がどうでも良いとは言ってませんが、それでいい、そう思えたんですの」

自分はどうして千宮家の当主になりたかったのか。考えたら、子供の復讐だったのだ。気に入らないことを言われたから反撃した。ただそれだけのことに気がついたのだ。そんな事ではやっていけない。だってあれほど執着していたのに、今じゃ全くなにもない。

それに、それは自分の幸せでないことを知った。小夜子も言った、千宮ではなく、自分の幸せを生きて欲しいと。だから、自分の幸せを生きる、そう決めたのだ。  
それを椿は銀に伝えた。

「そうか、それを聞いて安心した」

「ええ、それで、契約は終わりましたけど、あなたこれからどうするつもりですか？」

「帰るつもりだ。今は幕府も混乱しているがいずれ回復するから、迷惑がかかる前に消える」

契約時に千宮家に匿ってもらったと銀は言ったが、状況が変わったのだ。長崎は壊滅状態で、雛菊は復興に全力を尽くすだろう。そのため他の事には構っている暇はない。それに、幕府が心配していた異国とのコネは、全て景義が一人で個人的に作ったものだ。雛菊も椿も多少はあるのだが、それは幕府の心配する行動を起こす程の力も、野望もない者たちとのものだ。そのため、銀たちがいれば、千宮家に遠慮せずに干渉してくるだろう。

迷惑はかけられない。だから去ると銀は言った。

「ですが、あなたたちを守るくらいの力ならありますのに、それに迷惑ではありませんわ。あなたたちは恩人ですよ。恩を返すのは当たり前のことですわ」

「それでも帰る。恩でそんな無茶はしなくていい」

それにやっとな椿は自分の幸せのために生きられるのだ、自分のよくな人間がいたら駄目だろう。

椿は銀の意志が固いのがわかったため何も言えなくなった。

「そう……わかりましたわ。では、いつ出発しますの？」

「諸々の準備を考えると明日だな」

「なら、それまでゆっくり過ごしなさい」

「ああ」

椿が立ち上がり、部屋を出て行く。入れ代わりに桜が入って来た。どこか動きがぎこちない。

「どうした。動きがぎこちないぞ」

「あう、その……なぜか目が覚めたら全身筋肉痛で……」

剣神が体を酷使した代償だ。元々桜の体は鍛え上げたものではない。そんな体であるような戦闘を繰り返せば、筋肉痛になるのも当然だ。

しかし、それもあと数回で済むだろう。桜の体は武人のもものではないが、戦闘による酷使で傷ついていく。その度に回復の過程で傷つきにくくなるように強くなっていくのだ。その証拠に銀と出会った頃の桜とは、筋肉の付き方が微妙に異なり武人のそれに近づいている。桜は気づいてないようだが。

「なるほどな。まあ、すぐ治るだろ。それより明日には帰るから準備しておいてくれ」

「はい、わかりました。でも、少し残念です。あんなことにならないにかつたら観光出来たかもしれないのに」

「だな」

だが、悩んだところで過去は変えられない。ならば明日へと、前へと進んだ方が有意義だ。

そして、時間は過ぎ、銀たちは屋敷を出る。見送りには椿と雛菊が来ていた。雛菊は忙しい中、何とか駆けつけてきたのだ。

「それじゃあ、世話になった」

「ありがとうございます」

「いえ、私わたくしの方こそ、ありがとうございますと言わせていただきますわ」

「お姉様だけでなく私からも言わせてください」

得られたものは確かに多い。だが、それだけに失ったものも多い。だが、それでも大丈夫だろう。一日見て回った長崎の町は、もう復興しようとしている。それは千宮の力だけでなく、ここにいる人たちの思いもあるだろう。

「じゃあ、またいつかな」

銀と桜はそう言って、博多までの道を歩き始めた。長崎の駅が使えないため、博多まで歩くのだ。博多の駅はきちんと作られていたため、今でも使用可能であったのだ。

二人が歩き去った道をいつまでも眺める椿。

「ねえ、お姉様、はい、これをどうぞ」

「え？」

雛菊が旅荷物と、絆鋼より作られたあの鉄扇を渡してきた。

「行きたいのでしょうか。私は一人で大丈夫です。頼もしい部下もいますし。お姉様は今まで大変だったのですから、幸せになってください」

逡巡は一瞬だった。どうやら、自分の中ですでに答えは決まっていたようだ。

「頼ってばかりね」

「出来の良い妹を持ってよかったね。じゃあ、結婚式をするときは呼んでね」

「はあ！？　なななな、なんでそうなるの！？」

椿は顔を真っ赤にして否定する。だが、雛菊はその反応に満足したのか、それ以上は何も言わなかった。

「さあ、お姉様」

「ええ、ありがとう。それじゃ、またね雛菊」

「はい、椿お姉様」

椿は旅荷物を背負い、鉄扇を持ち、走り出す。

「待ちなさい！！」

ゆっくり歩いていた銀と桜にはすぐに追いついた。二人は椿の様子を見て驚いた

「どうしたんだ？」

「一緒に行かせてもらいますわ」

「はあ？　どうしてだ？」

「あなた、これの姫風の内容を忘れてませんか？」

「姫風？」

椿が鉄扇を指す。姫風は鉄扇の銘かと、銀は納得した。そして、椿が言いたいことがわかった。つまり、絆鋼を所持している者は重罪で、掴まればどうなるかは想像に難くない。そして、雛菊が当主の千宮家に椿は迷惑をかけたくない。そのため、決断はひとつ、千宮を出ること。しかし、誰の助けもなしにハーフの椿がともに生活するのは長崎以外、まだ難しい。そして、今椿に頼れるのは銀と

桜だけということだ。

「なるほど……………お前がそれでいいのなら、勝手にしろ」  
「では、勝手にしますわ。よろしく銀」

こうして、二人は三人になり、三人は博多へ向かい、帰路へついた。

## 拾貳

道場に声が木と木がぶつかり合う音が響く。床をすり足で歩く音が響く。緊迫した雰囲気の中、道着姿の二人の女が舞う。一人は木刀を構えた黒髪黒眼の小柄な少女。もう一人は、金紗の髪とエメラルドの瞳の木扇を構えた少女。

二人の少女は互いの得物を構えたまま、相手の動きを見ている。先に動いたのは黒髪の少女。正眼に木刀を構えたまま、金髪の少女へと走る。その動きは、無駄が多く、武人としては最低の速度だった。そのまま、スピードを乗せて、木刀を振るう黒髪の少女。それを金髪の少女は木扇でいなしていく。金髪の少女に木刀は一発もかすりもしない。

黒髪の少女に疲れが見え始める。それを見た金髪の少女が攻めに転じる。

一対の木扇から繰り出される攻撃。そして、黒髪の少女の手から木刀が弾け飛んだ。金髪が木扇を黒髪の少女の首に突きつける。

「そこまで！」

銀髪の男が宣言する。勝負あり、金髪の少女の勝利だ。

「はっ〜」

終わった途端、黒髪の少女　春夏秋冬桜が道場の床にへたれこむ。

「だらしがないですね」

流れる汗をタオルで拭きながら金髪の少女　千宮椿が桜を見下

ろしながら言う。

「まあ、初めてにしては上出来だろ」

銀髪の男　糸杉銀が言った。

これは、道場での修練だ。家に帰ってから、椿が言ったのだ。まだ、武器を使いこなせないから修練がしたいと。銀は桜の修練にもちょうどいいと思い、試合をさせたのだ。

結果は見ての通り桜の負け。今まで五回試合をやったが、五回とも椿の勝ちだった。しかも、ほとんど桜の完封負け。力、速さ、センス云々の前に武術を知らないのだ。

「あなた本当にあの時と同じ人間ですか？　弱すぎですよ」

「あの時？　あの時ってなに？」

「当主戦のことですよ。まさか、忘れたとでも言いますの？」

「うーん、忘れたって言うよりは、覚えてないって言うか。うーん」「要領を得ませんわね」

椿は桜に聞くのを諦める。代わりに銀に聞くことにした。あの出島壊滅時に聞けなかったことを聞こうと思ったのだ。おそらくそれが、桜について一番の説明になると判断した。

視線でそれを銀に訴える。銀は気がついたのか頷いて外へ出るように合図した。

「さて、わたくし私はもう、終わりにしますわ」

「そうだな」

「じゃあ、私も」

「お前は素振りしてる」

「ええー!？」



椿と共に銀は桜を置いて道場を出た。そして、誰も来ないであろう蔵へ。中に入り扉を閉める。

「それで、どういうことですか？ あの桜の様子。さすがにおかしいと思いますわ」

「今から話すことは桜には言わないでくれよ」

万が一桜に剣神のことが知られた場合、どんなことになるか予想出来ない。そのため、先に釘を刺しておく。

「内容によりますわ」

椿の答えは肯定ではなかったが、銀はそれで満足した。椿ならどんな話でも、桜の為にならないことはしないはずだからだ。

銀は椿に話し始めた。

「椿、お前は剣神って知ってるか？」

「？ 知ってますわ。当時は生ける伝説とまで言われた剣豪ですわね。しかも、死後も度々歴史に名を残している伝説の人物。最低の殺し屋、虐殺魔と呼ぶ人もいますわね」

「そうだ。そこまで知っているのなら話が早い。その剣神が桜の中にいる。そして、刀を抜いた瞬間その剣神が表に出てくる」

急に音が消えた。椿はあまりのショックでぼかんとしている。頭を鈍器で殴られたような衝撃だった。椿は信じられないというのが正直なところだった。あの鈍くさい桜に史上最強の侍と謳われる剣神の魂が憑依しているなど、到底信じられる話ではない。

しかし、頭の別の部分ではそれを信じていた。全て辻褄が合う。刀を抜いた時の、あの桜の才智を超えた強さ、剣技、あの非情な性格。刀を納めた時の、あの鈍くささ、温和な性格。その違いを説明

するならば、二重人格化か今の憑依の話を持つてくるのが一番だ。そして、あれほどの変化ならば、二重人格ではありえない。二重人格が個別の名前を名乗ることなどない。合ったとしても、剣神という伝説の名を使うはずがない。だからこそ信じられる。信じるしかなくなる。技術も、何もかもがその通りなのだから。

だが、そこで椿は引っかかりを感じた。なぜ、銀はこんなことを知っている。桜と過ごしているのなら、多少のことは知っているかもしれない。それは当たり前だ。だが、それにしてはどこか、銀は詳しすぎるように感じられた。

「……………なんで、あなたはそんな本人も知らないことを知っていますの？」

思い切って聞いて見る。答えてもらえとは思っていない。だが、聞かずにはいられなかった。自分だけ知らないのは嫌だった。

「会ってるからさ。昔、桜の一代前の憑依者に」

椿は再び衝撃を受けた。まさか、銀が桜の前の憑依者に会っていたなどと誰が想像出来よう、出来るはずがない。

「その者はどんな人間だったんですの？」

「なぜだ？ お前には関係ない」

そして、それきり銀は口をつぐんだ。桜の前の憑依者については話したくないというように。椿が何を聞いても、何一つ答えてはくれなかった。おそらく、何かあったのだらうと推測する。銀が話したくなるほどの何かが。

「そう……………。では、あの子はどうなるんです？」

「……………死ぬ。いずれ、剣神の運命に沿って死ぬ」

銀が告げたのは、凄まじい衝撃を椿に与えた。

・  
・  
・  
「もう、遅いですよ。何してたんですか？」

道場に戻ると、いつもの袖のない黒のミニスカート丈の着物と同じく黒のニーソックスに羽織を羽織った格好になっていた。素振り  
は終わったようだ。

「ちよつとな。じゃあ、そろそろ食事にするか。椿は着替えて来い」  
「ええ、そうしますわ」

椿が道場から出て行った。

銀が桜の方に振り返ると、桜はどこか不機嫌顔だった。ジト目で  
睨んでいる。

「どうした？」

「……………椿ちゃんと仲いいんですね」

「ん？ そうか？ 別にちよつとした話をしてきただけなんだが」

「私にはそんな話ししてくれないじゃないですか」

「まあ、する必要がないしな」

本当のことだった。桜に関しては何も言うことはない。一緒に生  
活していれば大抵のことはわかる。改めて話すこともないだろうと  
銀は思っていた。だから、正直にそう言った。

だが、桜はそれが気に入らなかつたようだ。更に不機嫌そうな顔  
になり、嫌なオーラが漂う。微々たるものだったが。

「……………もう、いいです。銀さんは勝手にすればいいです!」  
怒って桜は道場を出て行った。それと入れわかりに椿が入ってきた。

椿は紺色のリボン、白のブラウス、青のロングスカート、黒のスッキングという格好だった。雛菊が用意した中で一番まともだったものらしい。椿は大抵この服を着ている。他のは到底椿には着れるようなものではなかったらしい。

「あの子どもでしたの?」  
「わからん」  
「あ〜」

銀の様子に何かわかったような声を上げる。

「それは銀が悪いですわよ。まあ、私わたくしにも責任がありますけど」  
「何がだ?」  
「(まったくこれは、強敵ですわね)」

椿が小声で呟いた。小声だったので、銀には聞こえなかった。

「ん、何か言ったか?」  
「なにもありません。はあ、まあ、あれは一時的なものでしょうし、あの子の性格ならすぐに忘れられると思いますわ」  
「お前、何気に酷いな」  
「あなたほどではありませんわよ」

そして、その通りとなる。

桜が慌てて滑りながら道場に飛び込んで来た。相当慌てているの

か、髪を振り乱している。

「あ、あの、そのななな」

「落ち着け桜、深呼吸しろ」

「は、はい、スーハースーハー」

深呼吸を何回かして、ようやく落ち着いた桜は事情を銀に説明する。

「えっと、木箱を背負ったなんか、超絶美人がうちの前に来たんです。商人って名乗ってました」

「ああ」

銀には思い当たる節があった。そして、何でそんなことでそんなに慌てて入ってくるのやらとか、思った銀。まあ、あいつに会えば誰でも驚くかと経験から納得して、客が待っている玄関へ向かう。

「わかった行くか」

「誰ですの？」

玄関に向かう途中に椿が聞いてきた。

「それ私も知りたいです」

「ああ、知り合いの商人だよ。ここに来たこと教えてないんだけどな。どうして、知ってるのやら」

玄関に行くと、木箱を下ろした女性が座っていた。赤髪で、スタイルがとても良い。少なくとも、この場に居る人間が会ったことがあるどんな人間よりも良い。そして、胸が大胆に開いた服を着ている。

「あら、遅かったのね。そして、二人目？ なに？ 私が来なかった間に二人も？ やるわねえ」

「違う違う。居候みたいなもんだこの二人は」

「あら、そうなの？ 残念」

「何がだよ」

やっぱりねという顔をしてから、なんでもないといい、女商人が自己紹介をする。

「じゃあ、自己紹介しておこうかしら。私は新井妖子<sup>にいしよ</sup>。人身売買以外なら何でも扱ってるわ。銀とは、結構長い付き合いね。よく、玉鋼とか、くず鉄とかそんなものを売ってるわ」

「春夏秋冬桜です。えっと、借金して、今お手伝いしてます」

「千宮椿よ。まあ、ただの居候ね」

桜と椿も新井に自己紹介をする。それが面白かったのか、新井が笑い出す。

「ははは、面白いわねこの子達」

二人は心外だ、という風だが、確かに事情を知らなければ面白いと銀は思った。

その後、新井は自分の家の如くあがり込んできた。庭で荷物を広げている。

「大半は下の村で売ってきたけど、まだ結構残ってるわよ」

木箱のどこにそんなものが入っていたのやら、出るわ、出るわ、敷いた敷物いっぱい新井は商品を広げた。日用品の小物から衣服、

高級そうな装飾品と最新の輸入品などなど。

これで本当に売って来たのかと疑ってしまう。

桜は初めて見るものが多いのか目を輝かせて、食い入るように商品を見ている。無邪気な子供のように和む。

椿は主に装飾品を一つ一つ品定めしながら見ている。千宮家の血なのだろうか、その目は真剣なものだ。

銀はそんな対照的な二人を見ながら、新井に玉鋼を注文している。それから何か幕府の情報がないか聞いた。

「そうね、まずはあんた達を追ってる話は聞かないわね。そもそも幕府が本気を出したらこんな所すぐに見つかるわ」

「確かにな。だが、それはおかし」

絆鋼を持つ者、鍛えた者は重罪。まず死罪は免れないのだから。

新井もそうなのと同意する。だが、いくら考えても答えは出ないため、二人は考えるのを止めた。どの道良い話ではあるのだから追われていないのなら、色々出来る。

「まあ、考えても仕方ないわね。っと、そういえば、北の方で何かあるみたいね」

「東北か？」

「ええ、なんか、秋田に幕府の要人が結構入ったそうよん」

あの辺りに何かあったか考える銀。確か何も無い。農家ばかりだったはずだ。あとは雪が降り積もっているくらい。幕府の要人が気になる程の何かがあるとは思えない。

だが、気にしても意味はない。わざわざ東北まで確かめに行き、危険を犯すこともない。

「一応気にかけておくが、まあ、確かめには行かない」

「賢明ね。じゃあ、注文も承ったし、温泉いれてもらってもいい？」

「お前、それが目的でここまで来たな。こんな真つ昼間から」

「そうよん」

「まあ、いいか。昼飯食ってからな」

「了解」

銀は桜に昼を作るように言う。まだ、商品を見ていたかったのか名残惜しそうだったが、新井がまた見せるし、一つあげると言ったら機嫌よくやってくれた。

桜の絶品昼食に舌鼓をうったあと、新井は桜と椿を伴い屋敷にある温泉へ。この屋敷何で温泉があるのだろうか。そして、真昼間から入ってもよいのだろうか。

「はあ、いいお湯ね。あなた達こんない湯に毎日入ってるの？ 良いわね」

温泉につかり伸びをしながら、ゆるみきった声で言う新井。なかなかどうして、ゆったり出来る温泉だ。ひとりの人間が所有しているのが、勿体ないくらいだ。一般に安く開けば、儲かるんじゃないだろうか。この辺りにそんな娯楽産業はないから、いいんじゃないか。

そんなことを考えながら新井は桜と椿を観察する。二人とも可愛い。あの朴念仁には勿体無い。

桜は日本人らしい綺麗な黒髪で、小柄ながらスタイルもなかなかいい。しかも、年齢の割にまだまだ発展途上な感じがする。これから先、更に美人になるだろう。気になるのは筋肉の質だが、それも発展途上、これからだ。それに気にした所で変わらない。時間が解決するはずだ。

次に椿、こちらは流石は異国の血と言ったところか。金砂の髪はサラサラで、揺れる度に光を放っている。エメラルドの瞳は意志を



秘めた輝きを放っていた。スタイルは抜群に良いと言った風ではないが、バランスが取れていて、まるで一種の芸術品だ。

しかし、残念だと思う新井。素材は良いが、少々妖艶さが足りない。まあ、これは自分の希望なので蛇足だ。

言うなれば、二人はなつたばかりのみずみずしく新鮮な果実だ。もう少し赤く熟れたのなら文句なく、どんな男もイチコロだろう。

そこまで考えて、さてではそろそろお楽しみを始めようと新井は二人の方へ。最初のターゲットは桜だ。段取りを考えながら近づいていった。

桜はちょうどこちらに背を向けている。椿は体を洗っている。こちらもなかなかにそそられるがまずは桜。気配を消せば楽勝だ。新井は気づかれぬまま桜へと飛びかかった。そして胸を揉む。

「にゃあああ!？」

「あら、可愛い悲鳴」

更に新井が桜の胸を堪能する。中々に良い形に大きさ。腕にこう、吸い付くような感触。柔らかさもたまらない。この反応がたまらない。初めてなのは確実。そういった子をいたぶるのは本当に楽しい。新井は更に桜の胸だけでなく体中にその指を這わせる。きめ細かい肌、さらさらな髪と、この子やっぱいいわえ〜とか、思いながら堪能している。

「な、何事ですの!？」

さすがの椿も桜の悲鳴を聞き気がついたようだ。いかに気配を消そうとも、悲鳴を上げられたら気づかれる。まあ、新井はそれで構わないと思っていた。このまま見られながら桜を弄るのもそそれるからだ。その後、椿で楽しむときも、よりいっそう楽しめる。

というわけで、椿の問いを無視。自分の楽しみを優先する。

「やめい!!」

スパーン!! と、良い音が響く。

「いった〜い!」

椿が紙を蛇腹状に折ったうえで、一方にガムテープ等を巻いて握りを作り反対側は扇子状に開いたもの、俗に言うハリセンで新井の頭を叩いた。あまり痛くないがそれなりの威力で叩かれたので頭をさする新井。そんな新井に椿が顔を真っ赤にして言った。

「あ、あなたは何を破廉恥なことをやっていますの!!」

椿が新井に言っている間に桜は抜け出して、風呂場から完全に逃走してしまった。新井がそれを名残惜しそうに見つめていた。

「あ〜あ〜、せつかくのお楽しみが〜」

未練たらたらな新井。しかし、行ってしまつて仕方ない。ならば椿で楽しむしかない。素材としては、今はこちらのほうが上玉。ならば、こちらに目標を変更するのも悪くない。少しとはいえ、桜は楽しめたのだから、違いを比べてみるのも一興という物。そうと決まれば即行動。

「ちょっと、聞いてますの!」

音もなく新井が椿を押し倒す。そして、その甘い果実に口をつけた。

「あ!？ あっ…ん!」  
「いい声で鳴いてくれるのねえ」

抵抗するがそれにより更に新井は燃えてくる。女の子にとって大切な唇は奪わないが、それ以外は堪能させてもらう。甘い果実を舐めるたびに椿が甘い声を出す。中々にいい反応。舐めながら、指を椿の腰に這わせる。すべすべの肌は素晴らしい感触。指がすべるたびにピクリとする椿は可愛かった。

「ふふふ、可愛いわねえ。はむ」  
「あっ!っ!」

新井が椿の耳を甘噛みする。ああ、いい。本当にいい素材だと思  
う新井。

「や、やめなさい!」

顔を赤らめやめろというが、新井には逆効果。更に激しく攻め立てる。いかに抵抗しようとも体は正直だ。少し刺激を与えてやれば艶っぽい声を出してくれる。

「…んん…ふあ…あ…はあ」  
「あはっ、楽しいわね。大丈夫よ。気持ちよくしてあげるから」

耳元でささやき、新井は椿の下腹部へと手を伸ばしたのであった。

・  
・  
・  
「それにしても遅いなあの二人」

銀は風呂に入っている二人のことを考える。なぜか、桜は先に飛び出してきた。妙に顔が赤くなっていたのが気になったが、聞かないでいた。どうせ、新井が何かしたのだろうと思ったからだ。だから、二人が遅いこともあまり気にしなかったのだが、それにしても遅すぎる。

「なあ、桜何か知らないか？」

「はえ！？ い、いえ、その何も知りません」

「そうか」

桜が出した奇声がちよつと気になる。だが、桜が言うのなら、何も知らないのだろう。見に行きたいが男が見に行くわけにもいかない。桜に見に行くように言ったが変に赤くなるだけで、見にいこうとしなかった。

しかし、その必要はなくなった。二人が戻ってきたからだ。どこか椿は放心し、新井は逆に

「遅かったな」

「ええ、楽しんでたからね」

「？」

「こつちの話よ」

その後、彼女は銀の元で一夜過ごした後、悠々と去っていった。

## 拾貳（後書き）

新年一発目の更新です。

皆様あげましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

さて、挨拶も終わったので連絡を。

次回の更新は十六日を予定しています。

ので、皆さんお楽しみに。

それではまた。

## 拾参

江戸で徳川陶咲は、先日の地震の被害の把握建て直しを部下である神楽に任せたと、長崎での報告書を見ていた。

どうにも不可解な点が多い。突発的な自然の地震ではないのは報告書でわかった。普通ならありえない話だ。普通の、特別でない、一般の、人間なら誰も信じないことだろうが、普通でなく、特別で將軍家である陶咲にはひとつだけ心当たりがあつた。だが、それは彼女から見てもありえないことであつた。それは相手に覇を持つ者がいると言うこと。

覇とは、その時代、時の支配者が持つとされる特別な力。契りを結んだ者の力を開花させ、強大な力を呼び起こす。また、覇の契りを結ぶと絆鋼の真の力が解放され、世界すら手に入れることが出来るとされる。そして、契りを結んだ者同士は永遠の絆が結ばれる。

歴代の女將軍は皆等しく覇を持っていたが、陶咲は持っていない。生き別れた兄が持っていた可能性が高かつた。そして、陶咲はそれ以外の覇の使い手のことなど知らない。一度調べて出てこなかつた。だからこそありえない。

「はあ、考えれば考えるほどわからないわ」

陶咲は嘆息する。考えれば考えるほど、思考の迷路に迷い込み考えていることが怪しくなってくる。それはあつてない、これも違う。全ての可能性がありそうで、ありえない。そんな思考の迷路に迷い込んでしまった。

「陶咲様、少しお休みになられては？ この頃根を詰めていたようですよ。気分転換をなされれば、何か良い考えが浮かぶかもしれません」

神楽が陶咲に提案する。

神楽は思う、少し働き過ぎだと。ただでさえ將軍という重責を背負っているのに休みなしで仕事をし、行方知れずの兄を思っては体が保たない。それに未だに彼女は成長期なのだ。体を壊して成長が阻害されることはあってはならない。

「とは言いますけど、まだこの前の件も終わっていませんし。私が留守にするわけには」

「その件については僭越ながら私の方で処理させて頂きました。他のものもあらかた終わっております。どの道、江戸城の修復などもありますから、お休み頂いても構いません」

「そうですね。では、お言葉に甘えます。久しぶりに休むとしまし  
よう」

陶咲は動きやすい服に着替え、城下へと神楽と共に繰り出すことにした。

まず、陶咲が向かったのは江戸守護の絢火の家だった。守護と言っても陶咲は日常まで把握していない。そのため興味があったのだ。

「ごめんください」

「はい、ただいま」

絢火の声が聞こえ、玄関まで歩いてくる音が聞こえ戸が開いた。

「陶咲様!!!」

眼鏡をかけた絢火が出て来た。

「突然お邪魔してごめんなさい」

「とんでもありません。光栄です。粗末な所ですけどどうぞ」  
「では、失礼します　あら？」

どうやら他に来客がいるようで、自分以外の靴がある。どこかで見たことがある靴だ。陶咲が記憶を探る。これと同じ物を履いている人間は多いが、靴の具合から陶咲には誰かわかった。

「神依さんも来ているのですか？」

陶咲が神依をさん付けで呼んだ。実はこちらの呼び方が基本である。

公共の場などでは將軍という役職柄人呼び捨てで呼ぶが、基本陶咲は人をさん付けで呼ぶのだ。

「ええ、不本意ながら」

本気で不本意そうに絢火が言った。

「そう、お二人は本当に仲がよろしいのね」

「俺の発言聞いてましたよね!？」

「騒々しいぞ。誰が来たんだ」

絢火の叫び声を聞きつけて奥の部屋から道着姿の神依が出て来た。神依に陶咲が声をかける。

「こんにちは神依さん」

「こんにちは。今日はどうして？」

「久しぶりのお休みなので、皆さんの様子を見ておこうかと思って」  
「じゃあ、あがって下さい」



本来それを言うはずの絢火ではなく、陶咲と同じ客であるはずの神依が言った。どこか偉そうだ。勝手知ったる他人の家というやつなのだろう。

神依の発言に神楽はもつと敬意を込めると言いたくなかったが、神依が自分よりも遙かに権力の高いことと、陶咲が何も言っていないので言うのを止めた。

ここで騒いで陶咲を煩わせるのは本意ではない。やるならばきちんと時と場所を考えて内々に進めると、そんな物騒なことを考えながら、神楽は陶咲が入るのを待ち、自分も絢火の家に入った。

居間に移動している間も絢火は神依にいろいろ言っていた。それを陶咲は楽しそうに見ている。神楽はもつと守護らしく振る舞えと思いつながら見ていた。

「何でお前はそんなに偉そうなんだよ！」

「こつちです」

絢火が神依に言うが、神依は華麗に無視し、陶咲を居間に招き入れた。

「聞けよ!!」

「五月蠅いぞ。騒ぐな」

騒がしくさせてるのはどつちだと思つ絢火だが、言ったところで神依は認めないため、思うだけにする。代わりに血が出るんじゃないかと思うほど拳を握り、プルプルと怒りに震えていた。

居間は卓袱台しか置かれていない畳張りの質素なものだった。窓と障子は開け放たれており、縁側と陽光が照る綺麗な庭が見えている。

本当に戦闘時の絢火の家とは思えないほど落ち着いた雰囲気があると思う陶咲。なるほど、確かにこれなら、神依が入り浸っている

のも領ける。

「いい所ですね」

「はい、こいつには勿体無い所です」

「だから何でお前が答えるんだよ!!」

二人の掛け合いにクスリと笑いを漏らす陶咲。そう言えば昔はお兄様と、こんな言い合いをしたことがあったなと思い出して懐かしくなった。帰って来たらしい文句を言っただけで困らせてやる。そう思い、陶咲は兄を絶対見つけ出すと再び決意を新たにす。

言い合いが終わり絢火がお茶とお茶菓子を持ってきた。陶咲が食べる時に神楽が毒見をしようとしたが陶咲が却下する。

「神楽、守護が私を殺すわけじゃないでしょ。それにこれは絢火の手作りなんだから、毒見なんてしたら失礼よ」

「……………わかりました」

神楽からすれば納得が行かない。神楽は守護を全面的に信じているわけではない。遺憾ながら陶咲には覇がないのだ。絶対の忠、覇の絆がない。それはいつ裏切られるかわからないことを意味しているのだ。

もちろん完全に信頼できないわけではない。絢火や神依、幸村など大半の守護は陶咲に忠誠を誓っているため、一応は信用している。だが、完全じゃない以上疑うのは当然だ。例え陶咲に必要なと言われようともやめるわけにはいかない。

だがとりあえず、疑ったことについては謝罪しなければならない。

「絢火殿、お疑いして申し訳ありません」

「いや、別に神楽さんの言ってることもわかりますし」

「別に気にしなくていい。こいつだからな」

「神依てめえ、どういう意味だそりゃー!!」

「……………」

「無視すんな!!」

何とも賑やかな二人だ。神楽は謝ったことが馬鹿らしくなるくらいに。呆れるほどだ。それでもパートナーを組んでいるんだから、二人とも素直じゃない。

それから、しばらくお茶とお茶菓子に舌鼓を打ちながら話をた。

「さて、じゃあ、そろそろ私達はおいとまさせていただきますね」

昼間近といった所で陶咲が言った。かなり長居してしまったので、そろそろ出ようかと思ったのだ。

「そろそろお昼ですから食べていけばどうです?」

「いえ、絢火さん流石にそれは悪いですから。それに市の方も見ておきたいですし。神楽行きますよ」

今度いつ休みが取れるかわからない以上見ておけるものは見ておかなくてはならない。そもそも、過保護な家来たちが無駄に外に出してくれないからこんなことになるのだ。仕事が忙しいのもあるが、過保護すぎるのも考えものだった。

「はっ!」

「それじゃ、お二人ともまた。お茶おいしかったです」

「また、来てください。今度はお昼食べに。好きな物作って待ってますから」

「俺は肉じゃがな」

「お前には聞いてねえよ!!」

二人がはじめた騒ぎを聞いて笑いながら陶咲は神楽と共に市の方へと向かう。

市は人でごった返していた。商人の町大阪と違って日本中のものが集まっているわけではないが、それでもこここの市には大体のものがあるだろう。陶咲の政策もあり中々に盛況だった。市を見ればその国のことがわかるというが、良い雰囲気だ。

「久しぶりに来ましたが、中々良い感じですね神楽」  
「はい、陶咲様」

そこら中から、市場の親父たちの威勢の良い声が響いている。屋台からはいい匂いが漂っている。丁度昼時だから、なおさらだろう。そろそろ自分たちもお腹がすいてきたので何を食べようかと考えている。

そこで丁度目に入った屋台で神楽が適当に見繕い、それを食べたあと、市をもう少し散策することにした。

「そういえば神楽はいつもここで買い物をしているんですか？」

「はい、私はここで生まれここで育ちましたから」

「そう。私も昔ここに来たことがあるのよ。仕事も何にもない頃。まだ、お兄様が居た頃で、私が三歳の頃だったかしら」

その頃のことを懐かしそうに語る陶咲。しかし、すぐに元に戻る。

「では、行きましょう」

「はい」

江戸のはずれへと陶咲は向かう。休みだから守護の様子や、市の様子を見に行くというのはすべて口実。本来の目的はもっと別にあった。江戸のはずれにあるとされる系杉の鍛冶屋。先日の一軒で倒

壊したまま残されている。近隣の住人は騒いでいたが、それも今では何もないに等しい。本来ならば、そんな場所に陶咲を連れて来るような場所ではない。

だが、神楽は何も言わず陶咲を案内した。神楽もまた、行方知れずの陶咲の兄を見つけないと望んでいた。生涯を捧げるに値する主を。

「ここですね」

「はい」

糸杉の鍛冶屋は崩れたままの状態が残っていた。雨風にさらされてほとんど朽ちはじめていたが、しかし、それでも、残されたものは今だその原型を留めていた。それが何であるかわかるくらいにはしっかりとしていた。

「酷い有様ですね」

顔をしかめながら陶咲が言う。神楽は中に入り、陶咲が入れる場所を作る。出来てから、陶咲も中に入る。報告どおり、ほとんど使えるものは持ち去られたのか残ってはいなかった。

それでも何かないかと神楽と陶咲は必死に探した。しかし、一度忍が調べていたからか、何も見つからなかった。陶咲は落胆を露わにする。あまり期待してはいなかったが、やはり何も見つからないと言っの少し堪える。

神楽は瓦礫を退かしながら何かないかと探す。そして井戸を見ていたとき、一冊の本を見つけた。

「陶咲様!!」

「何か見つけたんですか!？」

「これを」

神楽が一冊の本を陶咲に渡す。どうやらそれは日記帳のようだった。  
なぜ、隠されていたのか。それはわからないが、とにかく開いてみる。

『未来でこれを見つかるであろう、將軍徳川陶咲様へ』

そこには、はっきりと陶咲の名前が書かれていた。

「これは……」

「どういうことでしょうか？　これが書かれたのはまだ、陶咲様が將軍となられる前のはずです」

「……………そうね。でも、どうやら、考えるのはあとのようですね」

その瞬間、森の中から忍が姿を現した。神楽が陶咲を刀の柄に手をかけ守るよう前に出る。

「どこの忍ですか？」

「……………」

相手に答える気はない。その代わり行動で意思を示した。静かに武器を抜いた。將軍への敵対行為。

その様子に陶咲は嘆息する。呆れた。呆れ果てた。どこの忍かは知らないがとんだバカもいたものだ。呆れを通り越して逆に感心してしまいそうだった。

そして、命令を発す。ただ、一言、殺せと。

「はい、陶咲様」

神楽が頷いた瞬間、剣閃が煌めいた。その次の瞬間に鳴り響く鯉口の高い音。そして、忍の首が飛ぶ。それは宙を舞い、血を撒き散らし、地に転がる。

それは一瞬であった。剣閃が閃いた。その次の瞬間、鯉口が鳴ったその瞬間には、忍たちの首が綺麗さっぱりと切断されていた。

しかし、それを見ても、忍たちは退く気を見せない。一瞬のうちに忍の半数が死んだというのに。まったく退く気を見せなかった。

「ふう、仕方ありませんね神楽」

「はい。行くぞ、遠く剣神には及ばぬが喰らうが良い無幻流奥義百花繚乱!!」

刀を鞘から抜き放つ、瞬間、剣閃の嵐が、忍の魂を刈り取る。その様、まるで死神が無数の大鎌を振り下ろすが如し。その首を狩る鎌からは誰一人として逃れられる者はいない。

嵐が過ぎ去ったあとには瀕死の忍以外、生者は陶咲と神楽しか居なかった。

「終わりました」

「ええ、ありがとう。城から、人を呼びましょう。彼らにはしっかりと話してもらわないといけませんから」

「はい」

誰が何を企んでいるかはわからない。だが、この一件の主は、よほどのこの日記や、ここに住んでいた人間のことを知られたくないようである。だったらなおのこと、知らなければならぬだろう。この日本の更なる、闇に足を踏み入れることになろうとも。

## 拾肆

時は十二月、日本はすっかり冬の装いとなっていた。東北など来たの県では、雪が降り積もり、美しい雪化粧を見せている。今年は、あまり雪の降らぬ地域でも例年よりも多くの雪が積もり、国民を楽しませていた。

銀たちの屋敷があるこの地域も例外ではなく雪が降り積もっていた。麓の村から続く長い石段にも雪が降り積もっているため、ヘタをすると怪我をしてしまいそうなほどだ。麓の村も状況は同じように、初めて雪を見る子供たちのはしゃぎ声が聞こえて来る。

銀はこの季節は好きだった。鍛冶場に居たら寒さを気にしなくていいからだ。冬の寒さは鍛冶師にとって中々に丁度良い。そんなわけで麓の村人の農具の修理などの仕事をしていた。そんなとき、一通の手紙が届く。

黒の封筒に入った黒の便箋に白のインクで書かれた手紙だった。

「なんだこれは？」

「そのような手紙なら裏の社交界とかでは招待状として使われますわね」

手紙の封筒を見た椿が言う。実物などは見たことはないが、噂くらいで聞いたことがある。しかし、この手紙はその招待状とは違うようであった。招待状ならば、どこかに何かのマークでもあっていいはずだ。それがなく、真っ黒と言うのは少し怪しかった。

「中身はなんと書いてあるんですの？」

「今読む」

銀が手紙の内容を読み上げる。



『我が主殿、あなたにお預かりになっていたものを返す時が来ました。つきましては、東北が秋田までご足労願います』

書いてあったのはこれだけであった。

銀は記憶を探るが誰かに何かを預けた記憶などない。ならば人遣いか。何となくその可能性も低い気がする。勘だが。ならば何なのか。

「差出人の名はないですわね。どういうことですか？」

「わからないな。わからないが……秋田に行ってみるのがいいだろうな」

「畏かも知れませんかよ」

誰が畏を仕掛けるんだと銀は思った。幕府が畏を仕掛けるわけがない。戦力差は明白、それに情報では追っ手などはない様子なのだ。畏はずはない。それに、これは銀の秘密を知っている者からの手紙だった。それを確かめに行くのは急務だ。

「桜はどう思う？」

「うーん、私は銀さんがしたいようにしたらいいと思うよ」

「あなたはきちんと考えていつているんですの？」

「……………」

突然黙る桜。何も考えていなかったことが露呈した。まあ、椿はそれも予想通りだったようで、それ以上は何も言わなかった。桜に關してはこのままでいいやという諦めがあった。どうせ、考えたところで高が知れている。椿が桜をこの一ヶ月くらいテストした結果だ。

「はあ、まあいいですわ。それで銀、最終的にどうしますの？」

「行ってみることにする。幕府の動きも気になるし、手紙も気になる。確かめるのは丁度良い」

「じゃあ、列車の手配ですわね」

「ああ、頼む」

椿が部屋を出て行く。列車のチケットを頼みに町まで行ってもらったのだ。こういうときは慣れている人材が居ると助かる。

「さてと、準備しろ桜」

「はい！」

銀は東北行きの準備を始めた。

・  
・  
・

駅から秋田行きの列車に乗り、銀たちは秋田へと向かう。椿がそれなりに良いチケットを取ったようで列車の旅は快適と言えるものであった。だが、それを満喫するわけにも行かず、指定されたコンパートメントの中で三人は集まっていた。

「それで、秋田に着いたらどうしますの？」

椿が銀に聞く。

手紙には秋田に来いということしか書いていない。それからの日程など決まっていなに等しい。見切り発車が出て来たのだから、今のうちに秋田についてからの身の振り方を決めておいた方が良さそうだ。そもそもが、怪しい手紙から始まった旅だ何が起こるか不思議ではない。対策くらいは練らなければ。

「そうだな、とりあえずは手紙を出した主を探すのが一番だろうな」  
差出人を見つけないければ何も出来るわけがない。それに、文面から、駅で待っていることが予想される。さほど心配はいらないかもしれないと思いつながら銀が提案する。

「そうですね。問題は目的はなにかですわ」  
「何か作って欲しいんだよ。銀さん鍛冶屋だし」

桜の発言に呆れる二人。そう思っていないからこうやって相談していると言うのに。とか、出発の前にもきちんと説明したはずなのだ。それを忘れてまたここで言うかと頭を抱える椿。

「それはない。東北の方に俺のことを知っている人間はいないだろうからな。とりあえず、勝手な行動をしないということでもいいんじゃないか？」

「そうですね。一人に分断されてはかなり危ないです。特にあなた」

椿は銀を見る。それには同意する銀。この面子の中で一番弱いのは銀だからだ。桜は言わずもがな、刀を抜けば剣神が姿を現す。椿にしても、絆鋼で鍛えた鉄扇がある。町への影響などを考えなければ全てを吹き飛ばせるくらいだ。対して、銀には何もなし。武術の才能はない。心得がある程度なのだ。一人で相手が出るのも二人までだ。

そのため、分断されることだけは避けなければならない。

「まあな、気をつける。あとは、着いてからだな。ゆっくりしておけよ」

「ええ」  
「はい！」

銀は目を閉じる。列車の揺れにしたがい、眠りの園へと落ちていった。

・  
・  
・

秋田はやはり雪で覆われている。よく列車が動いたものだ。そう思っていると、今日はこれで終わりらしい。これ以上は動けないようだ。

そして、予想通り、秋田の駅から出ると、そこには黒マントの人物がいた。マントで顔も覆っているため、男か女かすら判別ができない。唯一出ているのは口元だけだ。それだけでは女のようにも見える。

『ようこそ、秋田へ』

マントの人物がいう。声は男にも女にも聞こえる。そんな声。やはり、自分の正体を教える気はないと見える。

「お前がこの手紙を出した本人か？」

『ええ、そうです。長らくご無沙汰でした』

「俺はお前に会った覚えはないんだが」

『はい、それはそうでしょう。あなたとは、あなたがお母上のお腹の中にいたときに会っただけですからな』

思いつきり初対面であった。それでは覚えてははずもない。直接会ったことなどないのだから。それで、ご無沙汰だったなどとよく言えたものだ。おそらくからかっている。その証拠に唯一見える

口元は笑みを浮かべている。

しかし、その言葉は銀にこの人物の正体を半ば教えたようなものであった。

椿は用心深くマントの人物を観察するが、今のところ何かしようとするそぶりはない。しかし、いつでも鉄扇姫風を抜けるようにしておく。

『安心しろ千宮の。お前たちに危害を加える気はない。その奴ら見たいにはな!』

マントの人物がマントを翻し、クナイを放つ。それは背後から飛んできたクナイを弾いた。クナイを投げたのは白服の男二人。正体はわからないが忍だ。そして、このマントの人物も忍であった。

白服の男二人は防がれたのを見るや否やすぐさま次のクナイを抜き銀たちに向かって疾駆していた。桜と椿が動こうとするが銀がそれを制す。マントの人物が既に動いていたからだ。

マントをはためかせクナイを持ち二人の男に疾駆するマントの人物。交差する瞬間体をひねりそのまま回転の勢いを使いマントの人物は、クナイを振るった。真白き雪のキャンパスに鮮血が舞う。紅き薔薇を描く。

マントの人物は返り血を一切浴びることなく二人の男の首をかき切ったのであった。住人は誰もいなかった。この凶行が誰かの目に留まったということもなかった。

マントの人物はクナイの血を払い死体を一瞬のうちに片付ける。それを裏路地に放つてから、銀たちの所に戻ってきた。

『待たせました。さあ、行きましようか』

「その前にあいつらが何なのか教えてもらいたいですわ」

『それはできません。というより、このような場所ではまたいつ襲われるかわかりませんから』

「くっ、わかりましたわ」  
『では、こちらに』

マントの人物が歩き出す。それに銀たち三人はついて歩き出す。向かうのは雪積もる山であった。町を出てそのまま道をそれて森の中に入っていく。

「うう、それにしても寒いです」

桜が言う。桜は、銀と椿が厚着をしているのに一人だけいつもの格好だ。それでは確かに寒いのは当たり前だ。

「何で厚着してないんだよ」

「うう、これ以上迷惑はかけられませんから」

「お前な」

呆れる銀。それくらいならば迷惑にはならない。それよりも、風邪でもひかれて治療費がかかるほうが困る。というかそっこのほうが高いので、厚着したほうが安く済む。

『それならこれを着ておけ』

マントの人物がどこからかコートを取り出し桜に渡す。

「あ、ありがとうございます」

いそいそとそれを纏う桜。それでずいぶん楽になったようだ。それでも、まだ寒いのは変わらないようだ。

『さて、ここからは私から逸れない様について来てもらう。逸れれ

ば死ぬ。いいか?』

「わかつている。そうでなければどの道死ぬからな」

桜と椿もつなずく。

『それは重畳。こつちだ』

それから四時間、銀たちはぶっ続けて歩き続けた。途中で雪が降ってきたりなどで、大変なことになったがそれでも休まずに歩き続けた。既にここは標高数百mの山の上である。当然だが、椿と桜はそろそろ限界だ。というか、よくここまで脱落せずに付いてこれたと言える。

「おい、まだ着かないのか。二人が限界だ」

『もうすぐ着く。この洞窟の向こう側だ。よく付いてこられたな』

そういうマントの人物の口元は笑っているかのようにつりあがっている。

「試したのか」

『ええ、そうです。これから先、この山にも登れぬようならばそれまで、これから先の戦いなど到底戦うことなどできません』

それ以上のことを聞こうと銀が口を開こうとするが、マントの人物はこれ以上話すことがないというようにさっさと洞窟の中に入っていた。

「もう少しだ二人とも行くぞ」

「はあ、はあ、よ、ようやくですの」

「つかれた」

日ごろから鍛錬は欠かさないべきだなと改めて実感した二人。  
マントの人物を見失わないように三人はさつさと洞窟の中に入った。彼らが洞窟の外からの光が届かない場所まで行くと、ひとりで洞窟の入り口は閉じ始め、完全に密閉されてしまった。音もなく、痕跡すらなく。元から洞窟などなかったかのように隠蔽されてしまった。



## 拾伍

洞窟を抜けた先に広がっていた景色は先程の雪山の景色とは似ても似つかないものになった。全てが一変した。世界を知らぬ間に移動したように、世界がそのベールを脱いだかのような錯覚にさえ陥る。全てを越える衝撃を三人は感じた。

そこに広がっていた景色、冬ではなく春。草花咲き誇る美しき里がそこにはあった。

『ようこそ隠れ里冬逃げの里へ』

驚愕している三人にマントの人物がマントを脱ぎながら言った。マントの下の素顔は女。赤茶色の髪をポニーテールにした忍装束を身に纏った一見少女に見える女であった。

「ふう、ようやく名乗れるの。妾の名は神子島松じゃ。よろしくな」

老獪な口調で松は言った。外見に似合わず中身は年寄りくさい。だが、それを言ったら問題になりそうなので誰も言わなかった。

「女だったか。それで、俺たちを呼んだ理由はなんだ？」

「せつかちじャの。まあ、それもそうじゃな。こつちじャ。ここで立ち話もなんじゃからなあ」

松に着いて里に下りていく。

忍隠れの里には銀たちは初めて来ていた。いたって普通の里のよっくに感じられるが、意識してみればいたるところに侵入者対策の罠や、攻撃用の穴などがたくさんある。気を抜いていれば大変なことになることは必死だ。

「なるほど、隠れ里だな、確かに。それにしても俺はこんな場所昔も今も、聞いたことはないんだが」

その一言が松に聞こえたのか。クスリと笑う松。

「当たり前じゃ。ここは特別な隠れ里じゃからなあ。そう簡単に見つかるわけにもいかんのじゃよ」

「何を隠しているんだ？」

「それも着いてからじゃ」

それ以上は答えんぞと、松は言うてから、先を歩く。銀はそれ以上聞くことをあきらめて付いていく。桜はきよるきよるとしているのを椿に注意されてから落ち込んでいた。椿はやりすぎたかと後悔している。そのため、どちらかに話しかけることも出来なかったのだ、銀は前だけ見ていた。

「着いたぞ」

案内されたのは、里長の住居だった。他の建物よりも豪華で大きかった。

「ここじゃ、入れ」

そこに松は自分の家のように遠慮なく入っていく。その後銀たちは顔を見合わせた。

「あの松さんはもしかして、里長なのでしょうか？」

「待ちなさい桜まだ、決め付けるのは早いですわよ。あの年ならば、里長の子供かもしれませんわよ」

「とりあえず入るぞ、それで解決だ」

「あなたはもう少し悩んだらどうですか？」

「意味ないだろ」

銀は里長の住居に入っていく。それに続いて桜も入る。納得が行かないというように、椿も桜に続いて中に入った。そこには、里長の席と思われる場所に座った松と、その付き人と思われる男が待っていた。どうやら、松はその若さで里長のようであった。

「どうじゃ？ 驚いたか？ 妾が里長ぞ」

どうじゃ？ と聞いてくる松。それにどう答えようかと答えあぐねていると松がふくれっつらになる。

「なんじゃ？ 何の感想もないのか！」

子供かと思う一同。桜にまで思われているのだから、その程度がわかるだろう。それに、感想を言う暇もなかっただろうとツッコミたい一同。

「感想を聞きたいなら少し説明してからにしろ。それが、もう少し待て」

「ん？ それもそうじゃな、妾が早急すぎた」

「それで、私たちを呼んだ理由ってなんだったのですか？」

桜が本題が気になって聞いた。

普通に考えてもこのような嚴重な隠れ里に招待されるというのはよっぽどなことだ。それほどの何かがあるのか、それとも、また絆鋼のことなのだろうか。様々な考えが浮かんでは消えていく。ただ、敵意は感じないので信用してもいいはずである。

「うむ、そうじゃったなあ。銀じゃったか今は……お主に返すものがあるのじゃよ」

「俺にか。お前たちに何かを預けた覚えはないぞ」

「そうじゃろうな。そうじゃろうな」

一人で納得している松。銀は話を促した。そうしなければ、話は進まないと思っただからだ。

「で？」

「うむ、そうじゃな、まずは、桜と椿じゃったか、お主たちには少し退出してほしい」

「どうしてですのー！」

「そうですー！」

桜と椿が反論する。それもそうだ、ここまでつれて来られて話をするとときに除け者にされるといふのなら、誰でも反論するだろう。当たり前のことだ。そして、その話は銀についての話なのだ。気になるのは二人とも同じ。後で、話を聞こうにもきくと銀は話してはくれないのだから。

しかし、松は譲らなかつた。これだけは話すか話さないかは銀に一存することだった。銀も退出してくれと言う。そういわれたら引き下がらざる得なかつた。

「わかりました」

「……………わかりましたわ」

桜と椿が外に出て行く。その途端、松が頭を下げる。深々と。いや、松だけでなく。この部屋に居る者は全て銀に頭を下げていた。

「何のつもりだ」

「度重なる無礼、申し訳ございません」

「……………お前たちは、俺が何か知ってるのか？」

「はい」

苦虫を噛み潰したような顔をする銀。逃げても逃げても、離れても離れてもどこまで追ってくるものに嫌な顔をする。

「用件は何だ……………」

「あなたに覇を返したいと思います」

「……………霸か……………」

「はい、そして、こう伝えるようにと」

松はそろそろと話し始めた。そして、とあるものを返したのだった。

\*\*\*\*\*

桜と椿は里長の家の前で立っていた。先程まで中の会話を聞き取るうとしていたのだが、何らかの忍術でも使っているのかまったく聞く事が出来なかった。今は、諦めて待っている。何回か侵入しようとしたが、常に誰かがいるため無理だった。

「はあ、椿ちゃん、いったい何の話だと思えますか？」

「さあ、私に聞かないでほしいですわ」

椿は桜の問いにイライラしたように答える。完全に椿はイライラしている。何に対してイライラしているかと聞かれたならば銀と答えるだろう。ここまでつれまわしておいて、出て行けだ。桜はまだしも、椿には我慢ならない。だから、イライラして素っ気無くなっている。

椿は桜に当たるのはいけないとわかっているが、元来の性格からして、自重することが出来なかった。後で、謝っておこうと思うが、イライラは収まらない。

「そうですね。それにしても、いったい何なんでしょうね。この服も、銀さんからもらったし、あのお屋敷だって、思えば私達銀さんのこと何も知りませよね」

「……………そうですね」

桜の発言で、先程までのイライラが収まり、逆になんとも言えない感情が溢れてくる。これは悲しみだろうか。何も知らなかったことが悲しいのだろうか。

「何を話してるんでしょう」

「私わたくしに聞かれても、わかりませんわ」

\*\*\*\*\*

「……………」

銀は黙って考えていた。松たちは、銀が言って普通の姿勢になっているが、しっかりと銀を見据えたままであった。

銀が考えているのは、先程松が話したことだった。現実と、過去、そして未来、その全てに関係する、衝撃の事実。日本を、しいてはこの世界すら揺るがし、滅ぼしかねないほどの脅威それについての、事実。重すぎる話について考えていた。

そして、桜と椿について。話すか、話さないか。話せば、巻き込むことになる。話さなければ、巻き込むことなく、平和に過ごせるかもしれない。しかし、それである二人は納得しない。事情を知ってもおそらく同じこと。

「銀様？」

「様はいらない。それより、本当のことなのか？」

「はい」

「そうか」

「外のお二人に伝えるか伝えないかは、あなたしだいですが、仲間が多いほうが良いと、妾は思う」

松が言うことももつともな話、この際話してしまったほうがいいのかもれない。そう、どうせもう巻き込まれているのだから。話して、それで着いてこないのならば、そこで別れば良い。この隠れ里の人間を護衛に使っても良いとのことなので、そう危険はないだろうから。

「ああ、わかった、俺から話す。二人を呼んでくれ」  
「御意」

松が二人を呼んでくる。案の定二人は不機嫌そうな顔をしている。桜はそうでもないが、椿は隠すつもりもなく、不機嫌オーラがビンビン出ていた。それに銀は苦笑というか、顔を引きつらせながら、二人に座るように言う。

しぶしぶながら二人は座り、椿が用件を聞いてきた。

「それでなんですか？」

「これから、お前たちに大事なことを話す。そして決めてもらうことがある。言うておくが俺の独断でどれだけお前たちに話すかは決める。だから、話さないこともある。それでも聞いてくれよ」

この銀の発言に二人は驚いた。つい先程まで、外で、絶対に聞けないとか、どうやって聞こうかとか、を話し合っていたのだ。それ

なのに、あっさりと言は話してくれるといった。少なからず驚くのは当たり前だろう。全てとはいかないようだが、それでも、話してくれるというのだ。ここは素直に聞くに決まっている。

「これから話すことは信じられないことだろうが、聞いてくれ。特に椿、お前には関係がある」

「私わたくしに関係？」

「まあ、聞いてからだ」

「わかりましたわ」

「さて、話そう」

銀が二人に松から聞いたことをはなす。ただし、自分に関することを伏せて、全てを話す。

・  
・  
・

この日本に危機が迫っている。それは、覇を持つ者。先の千宮当主戦に置いて、千宮景義が見せた力。そして、その力を持つ者たちがこの日本のどこかに潜み、現幕府の妥当を狙っている。そして、戦いの鍵は絆鋼。その力を全て引き出すのが覇。覇と絆は二つで一つ。絆鋼を持つ者は狙われる。そして、覇を持つ者も。

・  
・  
・

「どういうことですか？」

「まったく意味がわからないです」

「ま、だろうな。俺だってまだよくわかってるわけじゃない。ただ、これだけは言える。いずれ、この日本は滅びる。そして、世界すらも……」

「……………」



「……………」

あまりのスケールの大きすぎる話に椿と桜は押し黙る。当たり前だろう。いきなり世界の聞きと言われてもよくわからないのが本音だろう。そもそも、一度で理解しろというのが不可能な話なのだ。裏を知らなければ、そして、千宮景義を知らなければ、そんなことなど正面から否定していただろう。そんな話だった。

## 幕間（前書き）

1ヶ月お待たせしました。

これから復帰です。

これからもよろしくお願いします。

## 幕間

闇夜よ、闇夜よ、溢れよ、闇夜よ、惑えよ、闇夜よ、悶えよ  
闇夜。

歌が響いている。それは、暗い暗い深淵の底。

ここはどこで、そこはどこ、ここはそこで、そこはここ。

響く響く、闇夜の歌。

作れよ、造れ、創れよ、ツクレ、無から有、有から無、在り  
て、在りて。

悲しき旋律、静かなる侵略。

これは何？ 夢現のまほろばの、幻、想い、そこにある。

消えてゆく星の光も、祈り越え、命は惑う。

深みにはまる、はまる、はまる、廻り、廻る、生命の旅。

星々は次第に消え失せ何もなくなった。

その場に九つの影が現れる。

それは、黒く、黒く、黒く、漆黒よりも深い、深淵よりも暗い。

一つの影が前に出る。

千宮景義。

影の中央には姫君。

漆黒の姫が座っている。

「準備が整いました姫」

景義が漆黒の姫に言う。

「そうですか……では、時は満ちました。これより、我々は国崩しを行います」

一斉に影が四方へと広がっていく。

月のない新月の夜。

宴は始まる。

深淵の底、歌姫は歌う。

さあ、始めよう。

始まる。

開幕。

これは序章。

始まる。

これが、本当の始まり。

## 拾陸

幕府將軍徳川陶咲の耳にとんでもない知らせが飛び込んできた。それは襲撃。正体不明の軍による、各地への攻撃の知らせ。ありえることのない現実の知らせ。

「どういうことです!?!」

神楽に陶咲が聞く。これは異常。明らかなる異変。今まで平和だったこの国に何が起きているのか。どうしてもわからない。予兆などなかった。全てが突然。後手に回っている。いや、予兆ならばあった。あの時の襲撃。糸杉の鍛冶屋を訪ねた時のあの襲撃。どこの者かもわからぬ者たち。あれが予兆。それに気づけなかった陶咲にこの非はある。しかし、それよりも今は状況を知ることが先決。

「は! 報告によりますと、どうにも各地で同時に襲撃が行われたようです。鹿児島、高知を中心とし、この全国各地です」

「何が目的だと思いますか?」

「わかりません」

陶咲は考えのを後にし、指示をだす。このまま襲撃をされたまま黙っていることなどありえない。陶咲は若いが、それでもこの国を治める將軍なのだ。民を守るのが仕事。

「守護を中心とし、この襲撃を治めなさい。幸い、この江戸に来るまでには時間があります。まずは、各地襲撃を食い止めなさい」

神楽はすぐさまそれを伝令の兵士に伝える。伝令の兵士は走って出て行った。

陶咲は考える。この戦い長引けば不利になる。戦をやめて久しい。完全に平和ボケしたこの国。いや、平和ボケできるほど、平和だったこの国で、まともに戦える者はおそらく守護だけであろう。今の徳川軍は戦争を知らぬ者たちばかり、陶咲も実践は初めてだ。

対して報告を聞く限り、相手は戦慣れしている。それほど軍をどこに隠していたのか。そんな疑問も出るが、そんなことを考える余裕はない。まずは、状況を知り、対策を立てるのが先だ。

「陶咲様」

そんな中に白劫が入ってくる。こんな大変な状況でも、落ち着いている。いや、落ち着きすぎている。下手をすれば、ここがやられる可能性もある。そうだといいのに、白劫は笑っていた。ニヤリとまるで、この状況を楽しんでいるかのように。いや、実際に楽しんでいるのかも知れない。彼の戦いを知る者は知っている。彼が戦いというものを楽しんでいることを。それは陶咲も知っている。

しかし、今回の白劫の様子はそれではない。戦いを楽しんでいる風ではない。そもそも、戦っているわけではない。むしろ、もつと別の、長年やりたかったことがついに出来るという子供のような笑みをしている。

「白劫、何の用です」

「屑は消えろ」

黒の軌跡が閃く。それはまっすぐに神楽の首へと向かっていた。しかし、それは神楽の首を刈り取ることはなく、鋼のぶつかり合う音が響いた。咄嗟に抜いた刀、それで神楽は白劫の刀をぎりぎりで防いでいた。

「ほう、屑でもそれなりか」

「くっ！」

確実に首を刈るその軌跡。それを神楽が防げたのは偶然以外の何者でもない。ただ、白劫を信用していなかった。それだけ理由で警戒していたから。だからぎりぎり防ぐことが出来た。もし一瞬でも気がつくのが遅かったならば神楽の首は確実に床を転がっていただろう。だらりと汗がたれる。陶咲だけでも逃がさなければと、神楽は脱出経路を考える。外に意識を集中させると、江戸のあちらこちらで火の手が上がり、悲鳴が響きわたっているのが聞こえる。外に逃げたとしても危険なのは変わりないがここにいるよりはるかにましだ。

「白劫何のつもりです。よもや裏切ったなどというのではありませんよね」

「裏切る？ ご冗談を陶咲様。私は元から裏切つてなどおりません。守護だからと言って私を信用しすぎましたね」

「では……」

「ええ、私は、元からあちら側の人間ですよ」

それを聞かされても陶咲の中にはやはりという思いしかなかった。この白劫と言う男は最初に会ったとき、自分が將軍になったときから胡散臭いと思っていた。いつ裏切るかもわからないとまで思っていた。理由なら様々だが、あえてあげるのなら目だ。全てが無関係だと言う目。何にも執着していない無しかない不自然な目。それがこの白劫という男を信用できない最大の理由であった。

そして、それは正しかった。白劫の口からは真実が語られた。白劫は敵。今まで疑問に思っていたことが明らかにされた。普通ならスッキリとしそうであったが、この状況はそれを許さず。陶咲の心に絶望の影を落とす。

最悪とは、このことだろう。幕府最強の守護、白劫が敵側の人間。



これは少なからず土気にかかり、そして、最強の敵が現れたことをあらわしている。白劫に敵う相手として咄嗟に思いつくのは剣神一人のみ。

まさしく最悪、絶望の一步手前。二人には楽しそうにステップを踏みながら歩く、死神の足音が聞こえそうであった。いや、聞こえていた。すぐそこまで確実に迫っていた。ニヤニヤと笑いながらその手に持った大鎌を振り下ろそうと構えている。そう、白劫の背にはそんな死神が張り付いているように見えた。

「陶咲様、私が時間を稼ぎます。その間に逃げてください」

「でも！」

「あなたは必要な方です！ あなた無くして誰が徳川の世を守ると言うのです！！」

「しかし、それなら神楽も」

「駄目です。私は奴を足止めしなければ。行ってください」

「私は……」

「早く行ってください！！ 私に、あなたまで失えと言うのですか！！」

「！？ ……わかりました。必ず、生きて追いついて下さい」

「はい」

陶咲は白劫の脇を通って逃げ出した。白劫はそんな陶咲を追わなかった。止めようと思えば止めることも出来たはずなのに白劫は止めなかった。小娘一人すぐに追い付ける。そう白劫は無言で言っていた。齒噛みするがそれは事実。

「白劫私が相手です」

「フツ、貴様程度が相手になるとでも？」

「いいえ、思いません。ですが、せめて一太刀、浴びせて見せまし

「よう」

「出来るのならな」

互いに得物を構える。気を抜けば一瞬で終わるそんな死合いが始まる。

\*\*\*\*\*

琉球。

戦火がこの常夏の琉球を飲み込んでいく。突如としての全国一斉蜂起。それはこの樂園と呼ばれる島琉球でも変わりはない。

「やれやれ、私が出なきゃいけない相手なのかい？」

胸の大きく開いた着物を着て、ソファーにだらりと寝転んだ肉感的な女性が報告に来た兵士に言った。この琉球で守護が動く事態など徳川幕府が始まって以来のことであった。せつかく暇で南国の天国だからこの琉球に来たのに意味がない。

「はい」

「はあ、しょうがない、行きますよ。琉球守護流燐りゅうりんにおまかせ」

流燐が戦場へ出る。その手には武闘鞭。

「さあてと、久しぶりの戦楽しめる相手は……」

流燐が琉球で繰り広げられる戦闘区域を見渡す。戦うに値する相手を探す。どこの戦場もこちらが押されているが、そんなところは放っておく。こここの兵士には自分で何とかしろと言ってあるため手出しをする気はさらさらない。

「お、いいの発見」

流燐が見つけたのは男。こんな熱帯気候の琉球だというのに黒のロングコートを羽織り、不気味で白い仮面をつけている。明らかに怪しい雰囲気だが。纏う気配は達人のそれ。それも、あの白劫と同じ雰囲気。あのいけ好かない男と同じ雰囲気なのは少しどころかなり嫌だが、それでも暇をつぶせる相手だ。文句は言うまい。

「さて、相手、してもらおうよ！」

流燐が地を蹴った。琉球の空へと跳ぶ。目指すは、黒コートの男。

\*\*\*\*\*

日本が最北、北海道が蝦夷の地。真白きキャンパスに血の薔薇が咲き誇っている。戦っているのは幕府の軍と正体不明の軍。血の薔薇を咲き誇らせているのは幕府軍の方であった。挟み撃ちされているのである。正体不明の軍に乗じてここにいる農民たちが一揆を起こしたのである。理由は不明。しかし、数日前までは何の不自由もなく暮らしていた農民たちが一揆を起こすとは考えられなかった。

「何か理由があるはずだ、何か……」

ファー付きのフードが付いたコートを着た髭を生やし、棍棒を持った茶髪の男が言う。吹雪の中目を細めて本陣で戦局を見つめる。どうにも戦場は混乱しきっている。小不明の軍に農民一揆。タイミングが良すぎる上にどうにもきな臭い。そのとき、正体不明の軍に敵将が目に入る。

メガネをかけニヤリと笑う緑の服を着た長髪の男。ニヤリと笑っ

た顔はまるで口が裂けているかのように見える。心底この状況を楽しんでる、そんな感じの顔。そして、いつ気が付くのかという顔。

「あいつか……」

「鍵森様！」

「どうした」

男、かきもり鍵森がやってきた兵士に聞く。兵士は顔面蒼白としている。

体も震えており、明らかに何かまずいことが起きている。それだけは明白だ。

「そ、それが……、我が軍、本陣を残し全滅いたしました」

「何！」

まずい、本当にまずい。ここが落とされた場合、次にこいつらが向かうのは江戸。そう、江戸まで続く道を破壊しながらこいつらは江戸へと向かうだろう。そうなれば江戸は終わる。江戸にはこの軍勢の相手をする余裕はないだろう。ならば、ここで是が非でも止める。

「行くしかないようだな。さてと、久々に暴れるとしようか。付き合ってもらおうぜ」

そう鍵森は呟き、本陣を一人飛び出した。

\*\*\*\*\*

九州が鹿児島。黒き雲が天を覆い、赤き星の血液が流れ出ている。幸村と佐助たち幕府軍は窮地に立たされていた。タイミングが良すぎたのだ。鹿児島襲撃と火山の噴火。悪条件が重なって九州の幕

府軍はほぼ壊滅。鹿児島を捨て福岡まで退くことすら考えていた。

「な、なあ、どうしたらいいだよ佐助え!!!」

「少し落ち着け幸村。今考えてるんだ……」

しかし、考えてもこの状況を打開する方法を見出すことは出来なかった。自然災害に反乱の挟み撃ち。この状況、如何に守護と言えど厳しいことこの上ない。もしもの時は幸村だけでも逃がさねばならないと佐助は考える。この状況は言っては悪いがこちらがこれから勝つことは不可能だろう。ならば、この後、幕府が倒された後のことを考えなければならぬ。これから先おそらく幕府の権力を取り戻すには戦力がある。そのために守護には生きてもらわなければならぬ。

佐助はこの状況の優先順位を決めた。幸村の生存が第一位。幕府の名は反乱の鎮圧だろうが、佐助の主人は幸村唯一人。幕府のお偉方の命令には幸村が従うならば従うがその行動原理は幸村の命が優先なのだ。ならばやることは決まった。

「佐助ー！ まだかー！」

「ああ、今考えがまとまった」

「おお！ 何だ！」

「これだ」

「つて、うわ!？」

佐助が印を切ると幸村の足元に穴が生じた。そこに幸村は落ちていった。落ちていくときに何でこんなことするんだとか叫んでいたが佐助は無視。すぐに穴を閉じた。

「なんや、守護、逃がしたんか」

そこには棍を持った軽薄そうな男が立っていた。すぐに佐助は戦闘態勢をとる。

「自分、やるんか？ まあ、ええけど、ちゃんと楽しませてくれや」

\*\*\*\*\*

商人の町大阪。活気に溢れた町は火の手が上がり、燃え盛っていた。依然の喧騒は今はない。阿鼻叫喚の地獄と化している。その中に赤髪の男が立っている。両腕には紅蓮の籠手。その籠手は赤く燃えていた。

「ヒヤハハハハ！ おいおい、幕府つてのはその程度なのかよ！」

男が腕を振るう。それだけで、町は崩れ去っていく。敵は吹き飛び死んでいく。なんとも簡単。蹂躪は請うあるべきだと男は思う。圧倒的蹂躪こそこの世で一番楽しいものだと思ふ。多少の物足りなさなど関係なしに男は腕を振るい町を粉碎していく。そこに慈悲も情けも何もない。あるのは悦楽のみ。

「ヒヤッハアアア！ 燃えろ燃えろ！」

破壊を楽しんでいく男。その様子を見る一人の女の影があった。

「……………」

右目に眼帯をした病的なまでに肌の白い女だ。右手には肉厚な片刃の大剣を持っている。女は男を射殺さんばかりに睨み付けている。

「おい、その女、見てるだけじゃなくてさ、出て来いよ」

「……………」

「てめえ、守護か？」

「……………」

女は返答の代わりに大剣を向ける。

「やるってか？ いいぜえ、俺を楽しませろ！！」  
「……………」

女は大剣を振るい、男は拳を振るう。

\*\*\*\*\*

江戸、決戦の地。日の本の国で最も栄えし町。しかし、今は黒煙が上がり、そして、狂気が渦巻く地へと変貌している。

襲撃前4人の守護が江戸に集まっていた。しかし、白劫が離反した今、ここに居る守護は3名。その3名は陶咲の保護を最優先で動いていた。しかし、敵が多いことで陶咲までたどり着くことが出来ずにいた。

「おい、神依、渡りで行けねえのかよ！！」

「無理だ。なぜかはわからないが繋がらない。誰かに妨害されているようだ」

「くそ！」

「これ、まずいよね？」

髪をツインテールにした女が言う。江戸に来ていた守護の才華さいかである。絢火、神依と同期の守護。

「ああ、まずいな。こんなのはここ100年はあったことがない」  
「そうだよな。一体誰が」  
「おい！　ここでそんなこと言ってる場合じゃないみたいだぞ」

目の前に少年と少女が立っている。少年の方は黒の銃、少女の方は白の銃をそれぞれ右手、左手に持っている2人は常に左手と右手を握り合っている。

「姉さま、来たよ」

「そうね、来たね」

「殺そう」

「殺しましょう」

「ふふふふ」

「ふふふふ」

不気味な2人組みだった。左右対称、白と黒。それが2人に感じる3人の印象だった。どこか不完全で、どこか完全。不気味で、異様。幼くて、大人のように。不釣合いで、釣り合っている。

「こいつはやべえぞ、おい、神依。お前先にいけ。ここは俺と才華で足止めしとく、お前はさっさと陶咲様連れて来い」

「うん、神依君早く行って」

「わかった」

神依はさっさと走っていった。ためらいすらない。

「あいつ、清しいほどためらいなく行きやがったな」

「そこが神依君の良いところでしょ」

「嫌なところだがな。さてと」



絢火と才華は共に武器を構える。

「「さあ、遊びましょ」「」

\*\*\*\*\*

戦火が広がる。

平和だった国、日本に暗い影が落ちる。

いまだ、覚醒の刻は遠く。

なお、燃え落ちるのみ。

流れる星は、命の証。

全てを飲み込んで、江戸の空に、雨を降らせる。

## 拾漆

沖繩、幕府側本陣。苛烈な戦いが繰り広げられている。そこで叫び声上がる。

「守護が来るぞ、逃げる！！」

味方の兵士の誰かが叫んだ。それだけで、味方は全員その場から撤退した。戦いの途中だというのに全員が一斉に撤退したのである。

怪訝に思っていた敵と暴徒たちはそれでも好機と思ひ、本陣へと詰め掛ける。しかし、その動きは止まる。そこに武闘鞭を手にした1人の女がいたからだ。こんなところに女がいるなどと聞かされていなかった敵と、やばいものが来たど動きを止める暴徒。そう、立っていたのは琉球守護流燐。この地を守護する最強の女。

暴徒たちは一斉に逃げ出した。敵兵は何がなんだからわからずとも、とりあえずは流燐に攻撃を仕掛けた。流燐はそんな敵たちを見て言う。

「さあて、行かせてもらおうよ」

流燐は武闘鞭を薙ぐ。それだけで、本陣に詰め掛けていた敵兵が全て同等に薙ぎ払われた。ただし、暴徒だけは吹き飛ばされず、敵兵のみを吹き飛ばしていた。これだけの乱戦の中で寸分の狂いもなく民を見分け、それ以外を薙ぎ払い民を遠ざけたのだ。凄まじい技量であった。それに暴徒は圧倒され近づくことすら出来ぬようになった。

「さあて、邪魔者は消えたね。通らせてもらおうよ」と

流燐は散歩に行くかのように気軽な風に本陣から出る。そこに新たな敵兵が集まってくるがまったく気にせず武闘鞭を薙ぐ。それだけで、暴徒以外が全て吹き飛んでいく。流燐が通った後には吹き飛ばされた人が積み重なっていた。そのどれもが凄まじい打撲を受けている。

「ひるむな！ 相手は1人。数で押せば」  
「数で押されるほど守護は甘くないんだよ！！」

武闘鞭を薙ぐ。その軌跡は全てを吹き飛ばしていく。武闘鞭の先から出る衝撃波は当たる者を切り裂いていく。縦横無尽の軌跡を避けることが出来る者はいなかった。唯1人を除いて。

（あの男、さつきから狙ってたのにまったく当たる気配がないねえ。困った困った。こりや直接私がいけないと駄目みたいだね。まあ、あらかたこの辺りの奴らは片付いたし、行くとしますか）

流燐は地を蹴った。群がってくる兵士たちを飛び越える。下を群がる兵士に武闘鞭を叩きつけ、地に伏させて。着地した後は全力で走った。武闘鞭を振るい目の前の敵を全て吹き飛ばして流燐は男の前へと走った。流燐が通った後にはぼつかりと道が出来ていた。その周りは死屍累々。民だけには絶対に手を出さずに。

そして、全てをなぎ倒して、流燐は男の前にやってきた。男はそれを黙ってみているだけであつた。君の悪さは変わらない。

「……………」  
「さあて、流燐様に来てやったよ」

「……………」  
「愛想がないねえ」

武闘鞭を男のすぐ真横に叩きつける。地面に亀裂が走るがそれでも男は微動だにせず、声1つ上げなかった。少しは何か反応があるものと思っていた流燐はあてがはずれ少し不機嫌になる。今度はもっと近くに振り下ろすがやはり男に反応はない。更に近くとどんどん近づけていくがただ男は立ち尽くしているだけだった。

「気味が悪いねえ。あいつにそっくりだ」

あいつ、江戸守護白劫。この気味の悪さはあいつに匹敵する。それだけに何かいやな予感がする。どうにも、この男からは嫌な感じが匂ってきている。こいつとは1秒でも顔をあわせていたくない。災害などの前の肌がピリピリした感覚が流燐の体を駆け巡る。

「……………」

「本当に、最悪だわこれりゃ」

「……………ボソ」

「え？ 何か言ったかい？」

「……………死ね」

「!？」

ゾクリと嫌な予感が体を駆け巡った。その予感にしたがってあらん限りの力で地を蹴った。その瞬間。流燐が立っていた場所が粉碎した。あと一瞬遅ければ流燐が粉々になっただけの可能性があった。男は微動だにしていない。何も流燐にはわからなかった。ただ、幸村の報告にあった力と同質の何かだと推測するがそれ以上はわからない。

「やっかいな力だねえ！」

武闘鞭を振るう。しかし、見えない障壁に防がれ男には攻撃が届

かない。何度も繰り返すがやはり結果は同じであった。

「チツ、本当に厄介だねえ」

空中を蹴り、一気に地面に降りた流燐は一瞬のうちに男に接近する。そのまま、武闘鞭の柄で男の仮面を狙う。男が始めて動く。武闘鞭の柄を避けた。そのまま流燐から距離をとる。

「なるほどねえ、わかったよ。あんたたちが使ってるその障壁みたいなのはある一定のラインを越えて接近すれば効果はないってわけだろ。まあ、それには結構無茶をやったがね」

障壁に触れた流燐の腕が黒くこげていた。利き手でなかったことをよしとするべきだろう。あの障壁は武器などの無機物の進入を防いでいる。無機物の進入を防げば殆どこの世界でそいつらを殺すことが出来なくなるからだろう。人を殺すには多くは何か武器を使用するからだ。無機物の武器を。しかし、それは人間などを介せば無理矢理に進入することが出来るということをあらわしている。

攻略法はわかったが、それをやるには代償が大きすぎる。片腕であの程度ならばそれはもう不可能と言える。それに、報告では意識の外からの攻撃は防ぐことはできないことがわかっている。それなら、意識の外から攻撃すればよい。普通ならできないようなことだったが流燐は余裕があった。

「それでもやるのが守護だし、守護の戦場に敗北の二文字は必要ないからねえ。縁技　流し水！！」

地を蹴り空中で武闘鞭を振るう。武闘鞭が彼女の背後で、まるで波のように蠢く、そして、それは一斉に意思を持って男に殺到する。男に逃げ道など与えない。嵐の時の大波のように、武闘鞭の黒い波

が男を襲う。普通の相手ならばこれを見れば逃げ出そうとする。しかし、男はそれでも変わらせずにただ、片手を掲げる。見えない力が現出する。それを黒の大波へ放つ。

そして、双方の力が激突する。拮抗。両者の力は完全に拮抗していた。しかし、それも長くは続かない。拮抗は破られる。そして、この琉球の地に赤い雨が降り注いだ。

## 拾漆（後書き）

次回はもろもろの事情により更新はお休みです。再来週にまた会いましょう。

## 拾捌

日本が最北、北海道が蝦夷の地。戦場は混迷を極めていた。正体不明の軍と農民一揆。そして、新たに死んだ味方や死んだ敵すらもが動き戦っていた。戦局は圧倒的に幕府の不利であった。その原因はメガネをかけニヤリと笑う緑の服を着た長髪の男。敵将だ。それを打破するため蝦夷守護鍵森が打って出る。

「さあてと、ほんと、しゃあねえな」

得物の棍棒を肩に担ぎながら本陣から出る。背水の陣で構えられた本陣の前には敵が包囲している。中々に壮観な光景であった。こんなとき出なければ楽しめたかもしれないと鍵森は思いながら敵将の男を見る。ニヤリと笑った顔は変わらずに、さあ、来いと、味方もいるぞとこれでそうすると、表情が語っていた。

確かに、敵の中には死んだ戦友も、飲み仲間も、ツケを貯めてた居酒屋の親父まで、知った顔がいくつもあつた。普通ならば攻撃することなどできるはずがない。できたとしても躊躇する。そして、死んだはずの死体が動いているという事実は士気を著しく下げている。この状況、覆せたなら奇跡であり、後の世まで語り継がれること間違いない。

そのことに鍵森は嬉しく思う。パツとしない世の中だと思っていたが、こんな機会が与えられたことに神に感謝すらする。こんな状況でも鍵森はくつがえせると、そう思っていた。

「さあて、前線に出てるうちの兵、巻き込まれたくないなら、全員本陣に下がりな!!」

全ての兵士が退いたのを確認し、鍵森は肩に担いだ棍棒を構え、



息を吐く。目を閉じた鍵森。その鍵森に敵が殺到する。いかに守護といえどこの人数差で勝てるはずなどないと思っただからだ。だが、次の瞬間にはそれが覆されることとなる。

「うおおおおおおおらあああああ!!!!!!」

気合と共に鍵森はあらん限りの力で棍棒を振るった。その瞬間音が消えた。そして、凄まじい衝撃と共にその爆音は敵兵士に降り注いだ。碎ける地、宙を舞う人、降り積もる雪すらも、いや、天を舞う雲すらも全て鍵森の一撃は吹き飛ばしていた。

息を吐きながら棍棒をドンツと地面に立てる。鍵森を中心に半円形のクレーターが出来上がっているような状態になっていた。敵も、暴徒もその全てが等しく吹き飛ばされ、その衝撃波によって生じた真空の刃に切り裂かれていた。どれほどの敵が死に、どれほどの民が先ほどの死んだのかそれはわからないが、この蝦夷守護鍵森は、敵も味方も等しく破壊し蹂躪する。それが蝦夷守護鍵森である。

「さあてと、どれくらい死んだか？」

死屍累々。そう表現したほうがよい光景となっていた。しかし、敵将の男。あの男だけは立っている。そして、指揮者のように腕を広げ、そして振る。倒れていた人間が動き出す。立ち上がり、動く。到底動くことが出来そうもないものが動いていた。まるで人形だ。

「おいおい、どういうカラクリだこりゃ。ったくよ……やりがいがあるじゃねえか」

棍棒を担ぎなおし、鍵森はやってくる敵に向ける。そして無造作に振るう。型も何もない。ただ力任せに振るう。その風圧で全てをなぎ払う。

「ヒヤッヒヤッヒヤッ、面白い。あなたは面白い！。だが、少々無粋だ」

男が言う。男は依然腕を振るうのをやめない。それに呼応して敵は動く。確実にこの現象を起こしている原因はこの男だ。この男をつぶせば終わる。誰でもわかることなのに鍵森は男を狙おうとはしなかった。鍵森の中にあつたのは楽しみだけだ。それ以外は二の次に回す。暇をもてあましていた分をきっちり清算するまでは。

「何言つてやがる。死者を使ってやがるためえに、言われたかないねえ！！」

「死人にくそも何もあるわけないでしょう。使えるものは使う。何が悪いのです」

「下種野郎だな」

「あなたには言われたくありません」

「違えねえ。と言つて鍵森は棍棒を薙ぐ。そして、すぐに吹き飛ば敵に接近し、棍棒を振り下ろす。渾身の力で振り下ろされる棍棒はいとも簡単に敵の体を粉碎していく。さすがに粉碎された敵は動くことはなかった。鍵森は再び棍棒を薙ぎ、振り下ろしていく。繰り返していくうちに、鍵森の体は赤く染まる。それと比例し、顔は笑顔になっていく。」

「ハッ！！ 楽しいねえ！！ 殺戮はこでなくちゃなああ！！！！」

型も何もなく力任せに振るわれる棍棒。それは赤く染まり、赤い軌跡を描き、赤い血飛沫を上げる。しかし、かけらでも残ればそれは鍵森を襲つ。

「つたく、鬱陶しい!!」

溜めを作り、棍棒を振るう。その瞬間、銀閃が煌めいた。赤い血飛沫が雪を染める。鍵森の左腕が宙を舞っていた。

「ぐああああああああああ!!?」

「まったく、ここまで粉々にされては、使えないじゃないですか。どうしてくれるんです? 実験台が1つもいなくなってしまうましたよ」

「くつ、糸かこの野郎」

「はい、そうです。よく気が付きましたねえ」

男の周りには円を描くように無数の銀糸が浮いていた。それは男の腕に繋がっている。楽団の指揮者のようにしていたのはこの糸で人形劇のように死体を操るため。暴徒も無理矢理これによって操られていたということらしい。そして、糸はピンと張ればそれは刀の刃に匹敵する。これが鍵森の腕を飛ばしたカラクリ。

男は更に腕を振るう。

「さて、面倒な本陣、全て切り捨てましょう」

「まっ!!」

男が腕を振るう。銀糸がまるで生物のように本陣を廻り、そして、男が腕を引くと、全てを断ち切った。血の雨が降る。本陣が崩れ去る。それは一瞬のことで叫び声も何も上がらない。静寂の中で、建物が崩れる音が響く。そして、その合間には男の狂ったような高いヒステリックな笑い声が響いていた。

「貴様ああああ!!」

「おや、まだやるのですか? 片腕のあなたに私を止められると?」

「うつせえ、そんなの関係ねえ。貴様はただ、殺す！ 縁技 霧  
風！！」

鍵森が棍棒を薙ぐ。それは風の刃となりて、蝦夷の地にその刃を振り下ろした。男は演奏を指揮するように腕を振るった。銀糸が閃く。そして、蝦夷の地に赤い雪が降り注いだ。

## 拾玖

佐助は走っていた。追ってくるのはあの軽薄そうな棍を持った男。守護でない佐助には勝ち目など何もない相手だ。それでも、状況しだいならば不可能でないと佐助は考えながら、燃え盛り酷い有様な町を走り抜け、森の中へ飛び込む。燃え盛る町の中で戦っている。いつ火に巻かれるかわかったものではない。それに、今現在灰が降り注いでいるため森の中ならばある程度は灰が防げると、忍が戦う場所としては最適の場所であるからだ。

「ここまで来ればあるいは……」

「なんや自分、逃げ切れた思うとるんか？　ワイから逃げようなんて甘いで」

男は木の上に棍を肩に掛けながら立っていた。やはり、逃げ切れるなどと樂觀視は出来ないことを再認識する。だが、佐助はまあいいと思う。元より勝つことが目的ではないのだから。足止め、それさえ出来ればいい。その間に、幸村が陶咲を確保できればいいのだから。しかし、それでは幸村の部下として誇れるものではない。

佐助が印を切る。

「火遁　木の葉」

手裏剣を投げる。それらは、炎を上げて男へと向かう。男は楽しそうにニヤリと笑い、木々の上を飛び跳ねながら、または棍で弾きながら全てかわしていく。佐助は幸村と同じものをこの男に感じた。しかし、それで攻撃の手が止まることなどない。続けてクナイを取り出し、男に投擲する。男はそれを弾くか避けるかするはず、そこに向かって更にクナイを投擲する。予想通り男はクナイを避けた。

そこにクナイが迫る。

「甘いわ!!」

だが、それはいと簡単に弾かれた。しかし、佐助にはそれも予想済みであった。一瞬のうちに男の背後に移動し、男の背にクナイをつきたてる。

「なる!!」

男は手を背中に回し強引にクナイを掴んだ。即座にクナイを離し別のクナイで斬りつけにかかるが、男は空中で反転し、棍を振るう。佐助はそれを掴み、男を蹴ってその反動で、木の上に着地する。男も反対側の木の枝に着地した。

「なる、やるやないかい!!」

「……………」

佐助がこの数回の攻防でわかったことは男が途轍もなく強いということだ。常人ならば最低でも3回は殺せたとはいえずの攻撃であったがその全てを防がれた上、反撃までされた。間違いなくこの男は守護に匹敵する。そんな男が今まで幕府に見つからずにいることに驚きを隠せない。しかし、現に隠されていたということは、1つの仮説を佐助の中で打ち立てる。だが、それを確認するすべはない。しかし、そうだった場合、この將軍の世は終わる。

「なに考え今度るんや! 死ぬで!! もっと、ワイを楽しませえ

!!」

「!!」

考えに集中している間に男は佐助の目の前に移動していた。防ぐ間もなく男の振った棍に吹き飛ばされる。木々をなぎ倒しながら吹き飛ばす様はさぞ相手には痛快なものであっただろう。幸村もやっていたのだが、佐助は実際に受けてみたシャレにならないことを感じた。

そこに男の追撃が迫る。それを何とかクナイで受け止め男を蹴り飛ばす。

「くっ」

「へっ！ ぜんぜん弱いで！！」

「悪いな、守護のように規格外の存在ではないのでな。だから、それも使わせてもらう」

「ん？」

男の体には先ほど蹴り飛ばしたときに爆弾を付けておいた。時限式のそれが爆発した。普通の人間ならば生きては生きて入れないだろうが、それもわからない。なぜなら、あの男に触れた体の一部分は黒焦げになっているからだ。佐助はあの千宮景義を思い出す。あの男も同じようなものを使っていた。意識の外からの攻撃ならば防がれることはないことと、人間などならばあの障壁に防がれることはないことはわかってはいるが安い代償ではない。これは長くは保たないかもしれない。

「つあっ！ 多少効いたで！」

しかし、爆発が収まっても男は無事に立っていた。体中すすまみれであるが大きな傷は見て取ることが出来ない。

「今度はこっちから行くで！！」

男が攻めに出る。佐助は身構える。そこから男が次にどんな行動に出るか予想した。しかし、男は予想外の行動に出た。男はあろうことか武器である棍を投げたのである。それに虚を突かれた佐助は反応が遅れてしまった。気が付いた時には男は目の前で拳を繰り出していた。拳が体に触れた瞬間、何かが砕ける音が響き、そして佐助は人外の速度で吹き飛ばされ、岩に叩きつけられた。いつの間にか森は終わり、そこは溶岩が流れる地獄絵図のような岩場に来ていた。

「ガハツ!？」

血を吐く佐助。ただの拳で肋骨の骨が数本砕けていた。折れたのではなく砕けたのだ。ただの拳ではない。何だこの拳はと、佐助は朦朧とする意識の中で思う。

「修羅流奥義虎突。ワイの一撃、どうや？」

「修羅流だ、と……!？」

修羅流。時代の影においてただの一度も敗北したことのない最強の流派。ただ強さのみを求めた、その名の通り修羅の流派。知られている特徴としては特定の武器を持たないということ。無手を含めたありとあらゆる武器の扱いに精通しており、どのような状況でも戦えるということ。その技の全てが敵を殺すことに通じているということ。

「ああ、そうや、やけど別に無敗の流派やないで？ ただ一度だけ、過去に一度修羅流は負けてるんや。そう、あの女に。修羅すらも凌駕する、あの剣神になあ。まあ、公式やないさかい、誰も知らんがなあ」



男が修羅流ということにも驚いたが、それを凌駕した剣神にもまた驚愕した。

「やけん、ワイは、あの女を殺さなあかのや。なあ、教えてや？ 剣神はどこにおるんや？ あの修羅すらも凌駕する鬼はどこにおるんや？ なあ、あんた戦ったことあるんやろ。教えてや」

「聞きたい、のなら、こつちにこい、教えて……や、る」  
「男に寄る趣味なんぞないんやが」

男はしぶしぶと佐助の方にあるいてきた。これが最後の機会である。これを逃せば後はない。それに、もう既に視界が歪んできているのだ。体も満足には動かない。息も苦しくなってきた。どうにも肋骨の破片が肺に刺さっているようだ。どの道砕けたのだから、助かることもない。それなら、取れるのは1つしかない。

「で、どこなんや？」

「……………ん」

「ん。よく聞こえん？」

「知らんな。そして、死ぬ。悪いな幸村、約束は守れそうにない」

佐助は隠し持っていた爆弾全てに起爆した。それらは一斉に爆発した。凄まじい爆発が巻き起こる。それに呼応して火山が噴火し、溶岩が流れる。それは、佐助たちがいた場所を飲み込んだ。黒煙があがり、溶岩が全てを覆い隠した。

## 式拾

商人の町大阪、燃え盛る町の中で眼帯をした病的なまでに肌が白い女と野性味溢れる赤髪の男が相対している。女は幕府の守護の零雪あり、男は名も知れぬ紅蓮を纏った破壊者だ。互いに互いの得物、女は身の丈ほどの片刃の大剣、男は紅蓮色の籠手。何もかもが正反對な両者は同じように殺気を相手に放つ。片や氷のように鋭利で冷たく、片や炎のように乱暴で熱い。ただ2人は互いに相対して相手の様子を見ていた。そして、同時に相手へと疾駆した。

零雪は大剣を振るい、男はそれを拳で受け止める。凄まじい水蒸気が一瞬にして生じる。強大な冷気と強大な熱気がぶつかったためだ。それらは2人の能力である。

「てめえも常時か!!」

「……………」

零雪は応える事なく大剣を振りぬく。男の腕をその燃える籠手ごと切り裂くために。しかし、男はそれに合わせて後ろに跳びそれを防ぐ。零雪が振りぬいたところで懐に入り込み、彼女の顎に向けて蹴りを放つ。それを零雪は体をそらしてかわす。そのままバク転をし男の顎を蹴り上げようとす。男は体を横に動かしそれをかわす。そして、2人同時に距離を取る。

「やるな!!　だが、まだまだこんなもんじゃねえ!!」

男が地を蹴り零雪へと疾駆する。その速さまさしく風の如し。燃え盛る炎を引き裂きながら、男は拳を零雪に放つ。それを体を横に移動させかわしたところで、男の拳の軌道に大剣の刃をあわせる。男自身が刃に突っ込んでくる構図。常人ならばかわすことなど出来

ない。しかし、男は大剣の腹を膝で蹴り上げた。凄まじい威力の膝蹴りに零雪の腕も跳ね上がる。それを好機に男が蹴り上げたままの姿勢から蹴りを放つ。

零雪は大剣を持っていては間に合わないとは判断し、大剣を離し、その蹴りを両腕で受け止める。そのまま、男の足を上に跳ね上げさせる。さすがの男の姿勢を崩す。その隙に零雪は男に蹴りを放つ。避けることが出来なかった男は腹に蹴りを喰らった。少々後ずさり体勢を立て直す男。その間に手放した大剣を回収し、構える零雪。

「はっ！！ 効かねえな！！」

「……………」

やはり打撃では話にならないかと、零雪は腰だめに大剣を構える。大剣が冷気を纏い、渦巻く。男は迎え撃つように拳を構える。熱気が籠手を多い、渦巻く。2人は同時に地を蹴った。冷気を纏った大剣を零雪は振るい、男は拳を振るう。大剣と拳がぶつかり、凄まじい衝撃を巻き起こす。

火を吹き飛ばし、瓦礫を薙ぎ払い、大阪の町を吹き飛ばすほどの衝撃が襲つ。衝撃が収まり、その中心点から、零雪が吹き飛ばす。

「……………」

受身を取った彼女の顔は厳しい。対して男の方は悦楽に酔い、笑っている。

「ヒヤハハハハハッ！！ それだよ、その表情が見てえんだよ。悔しいだろ？ 最強と謳われる守護が負けるってのあさあ、どんな気持ちだ？ なあ、教えてくれよ。オレにさあ」

「……………」

零雪はただ、黙って大剣を構える。

「ケツ、愛想のねえ。だが、まあ、続けるってのは賛成だ！！！」  
「……………」

零雪が地を蹴り、大剣を振るう。大剣から冷気の刃が放たれる。男はそれを炎を纏った拳で打ち砕く。熱気と冷気がぶつかり水蒸気の壁が生まれる。その隙に零雪が接近し、男に大剣を振るう。男のわき腹を大剣は捉えた、そう零雪が思ったが、そうではなかった。男は身体を思いっきり曲げ、剣の軌道から無理矢理に身体を外した。

「！！！」

「ハッ！！ これくらい出来ないで幕府に喧嘩なんざ売れねえよ！」

「……………」

これでは勝てないなと零雪は思う。これではどうやってもあの男には届かない。なにやら、奇妙な壁もあるようだし、本当にこれでは勝てないなと思う。だが、零雪は勝つ気であった。これで負けては、守護になつた意味がない。だからこそ零雪は勝つためにアレを使う。

「……………二段縁技 雪羅鬼神！！！」

零雪の縁技は普通の守護とは少し違う。彼女の縁技「雪羅鬼神」それは、常に発動するタイプの縁技である。殆どの縁技が自分で放つて始めて効果を発揮するものであるが、彼女の縁技は常時発動する珍しい型である。このタイプに限り二段縁技と呼ばれる特殊な技が存在するのである。それが二段縁技。どのような効果かは常時型しか知りえないため殆ど資料は残っていないが、二段縁技が公式に

使われたのは一度、かの信長公と光秀の戦い、本能寺の変その時である。第六天魔王として君臨していた織田信長を一撃で殺した技とされている。

雪羅鬼神は、絶対零度のその身に宿し、使用者の能力を極限まで強化し、その上で触れたものを完全に氷付けにする技である。これが零雪の本気の姿である。

「……………行くぞ」

零雪が地を蹴る。触れた地面を凍結させながら走る。しかし、周りの火の手のおかげで、凍った地面は一瞬のうちにとけて水溜りを作り出していく。それもすぐに蒸発していく。それらを気にせず零雪は男へと疾駆する。

男もまた、疾駆する。炎が渦巻く。炎を纏って男は零雪に向かう。そして、大剣が男の籠手に防がれる。触れた籠手を凍らせようとす  
るが、すぐに溶けてしまう。

「それがめえの本気か？ まったくきかねえなあ！！」

「……………狙いはこれじゃない」

「あん？」

そこで男は気が付いた。氷が溶けると何になるか。それは水、そして水が溶けるとどうなるか。それは水蒸気となる。今、ここには大量の水蒸気がある。つまり、これを分解するとそれは水素と酸素になる。そして、大剣に仕込まれたカラクリ。それによる電気分解つまり、ここには大量の酸素と水素が存在している。それらはよく燃える。特に水素は爆発し、大量の水を出す。火種はたくさんある。それこそ、この男自体が火種。

「な！ 貴様！」

「……………逃がしはしない！」

零雪が男の足を氷付けにする。男は逃げ出そうとするが、凍るほうが早い。そして、爆発が巻き起こった。大阪の町は綺麗に消えうせた。

## 貳拾（後書き）

ようやく更新することが出来ました。

お待たせしました。

相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりそうですが、がんばって更新して行くつもりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0800o/>

---

破魔月

2011年11月16日01時57分発行